川柳塔

創刊大正十三年　通巻一一〇〇号



日川協加盟

通巻1100号記念特集号

No.1100

一月号

第七回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第六回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

川柳塔社

課題と選者（各題二句　共選）

課題吟　「鍵」　真島久美子（番傘川柳本社）
　　三宅保州（川柳塔社）
　「顔」　岡崎守（札幌川柳社）
　　山本希久子（川柳塔社）
　　赤松ますみ（川柳文学コロキュウム）
雑詠　小島蘭幸（川柳塔社）

投句要領　規定の用紙（コピー可）または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。

投句料　一〇〇〇円（切手は不可）

投句締切　**平成三十一年二月二十日（水）消印有効**

送付先　〒543－0052
大阪市天王寺区大道一－一四－一七－二〇一
川柳塔社　誌上大会係　宛
TEL／FAX（〇六）六七七九－三四九〇

賞及び発表　各題特選に賞呈　発表は川柳塔誌五月号誌上
川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

「川柳雑誌」「川柳塔」通巻一〇〇〇号記念出版

『麻生路郎読本』



A5版
514頁
頒価　三〇〇〇円
（郵送料共）

目次

麻生路郎アルバム
麻生路郎作品「旅人」「旅人その後の作品」
麻生路郎文集・麻生路郎語録
麻生路郎物語（東野大八）
麻生路郎の人と作品
麻生葭乃作品「福寿草」
麻生路郎著作解題・麻生路郎年譜
麻生路郎・葭乃作品索引

ご希望の方は左記の事務所までお申し込みください。

〒543－0052
大阪市天王寺区大道1丁目14番17号
花野ビル201号
電話　06－6779－3490
川柳塔社
振替　〇〇九八〇－四－二九八四七九番

命のバトン

小島蘭幸

おれに似よ俺に似るなと子を思ひ　路郎
飲んで欲しやめてもほしい酒をつぎ　葭乃

大正13年2月に『川柳雑誌』を創刊した麻生路郎・葭乃の比翼句碑は、路郎のふるさと尾道の文学公園に建立されています。私は今年も千光寺に参拝して、比翼句碑に川柳雑誌・川柳塔通巻一一〇〇号のご報告をしたいと思います。

昭和40年10月、『川柳雑誌』から『川柳塔』へ、麻生路郎から中島生々庵へ命のバトンは繋がれたのです。

子猫ぞろぞろみな宿命の顔かたち　生々庵

初代川柳塔社主幹、中島生々庵のこの句に出合ったのは、私が川柳を始めて間もない頃でした。「宿命の顔かたち」の厳しさにハッとしたのを覚えています。小児科医だった生々庵、この句は、これから世間の荒波へ立向かう子供達へのエールだったのです。

自我没却という泳ぎ方である　栞

二代目川柳塔主幹、西尾栞のこの句は、夜市川柳大会、課題「泳ぐ」私の選の特選句です。栞という呼名を聞いたとき、とても嬉しかったのを覚えています。

ボウリング恋のライバル壜　薫風

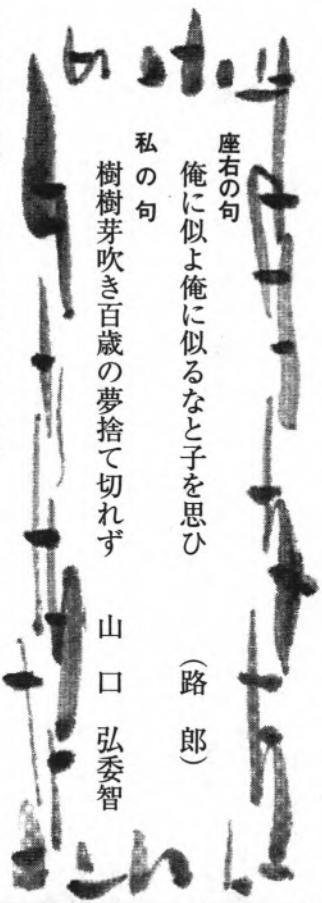
三代目川柳塔社主幹、橘高薫風のこの句に出合ったのは、正にボウリングの全盛時代でした。ボウリングのピンを恋のライバルに見立てて、ストライク!!　爽快です。

ほろ酔いや銀河に美女を泳がせる　天笑

四代目川柳塔社主幹、河内天笑のこの句は、天笑家に家族四人で宿泊させていただいた折、色紙に書いていただきました。

麻生路郎、中島生々庵、西尾栞、橘高薫風、河内天笑と繋いで来た命のバトンは今、私の手にあります。今年の9月28日、『川柳雑誌・川柳塔』創刊95周年記念大会を開催致します。私は川柳塔発展のために尽力された先達の皆様をしみじみと偲びたいと思います。

最後になりましたが、本年が穏やかな年でありますように心から願っています。



座右の句
俺に似よ俺に似るなと子を思ひ　（路　郎）

私の句
樹樹芽吹き百歳の夢捨て切れず　山口弘委智

川柳塔　一月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「亥」

■巻頭言　命のバトン……小島蘭幸…(1)
私たちの歴史……新家完司…(2)
川柳塔（同人吟）……小島蘭幸選…(4)
自選集……(40)
句集の森……(43)
温故知新……(43)
水煙抄……西出楓楽選…(44)
橘高薫風句抄……(62)
英語 de Senryu ㊽……吉村侑久代…(63)
誹風柳多留一二篇研究 67……(64)
『川柳雑誌・川柳塔』通巻一一〇〇号記念特集……(66)
　中島生々庵・仁部　四郎・梅崎　流青
川柳塔の川柳讃歌 番外編……木津川　計…(70)
同人特集　私の一句……(74)
■追悼文（遠野さんを偲んで）……坂　裕之…(83)

私たちの歴史

新家完司

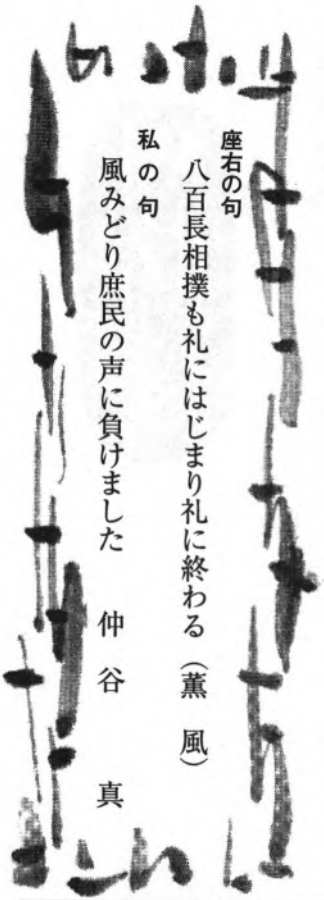
忠臣蔵での敵役は吉良上野介と決まっているが、この吉良殿の領地であった三河国播豆郡（現在の愛知県西尾市吉良町）では名君と慕われている。それは、今も残っている黄金堤に代表される治水事業や新田開拓など、時には私財を投じて領民のために尽くした人柄による。

上野公園の西郷隆盛像除幕式のとき奥方の糸さんが「こげな人じゃなか！」と言ったらしいが、この「こげな人…」の想いは、「こんな顔ではなかった」とも「こんな浴衣姿で出歩く人じゃなかった」という意味であるとも言われている。

このように、過去の物語には後世の人が脚色しているところが多々ある。

博物館の農耕具や武具などからは昔の暮らしぶりが推定できるが、物語として展開されると信用できなくなる。歴史ドラマなども「史実ではなく単なる娯楽作品」と割り切って楽しむべきであろうが、「ホンマかいな？」などと野暮な想いが先立ってなかなか嵌まり込めない。

愛染帖……新家完司選…(84)
檸檬抄「鮮やか」……川端一歩・山岡冨美子共選…(88)
せんりゅう飛行船㊼……新家完司…(91)
一路集（「重宝」……佐藤古抽選…(92)
（「ロマン」……小河柳女選…(93)
初歩教室「姫」……居谷真理子…(94)
川柳塔鑑賞……石橋芳山…(96)
水煙抄鑑賞……古今堂蕉子…(98)
■エッセー（香川県おっぱこ吟社を訪れて）……古今堂蕉子…(99)
インスピレーション・ナビ　印象吟……大西泰世…(100)
十二月本社句会……(102)
句会燦燦……弘津秋の子…(106)
川柳塔WEB句会「金」……樋口由紀子・髙瀬霜石共選…(107)
各地柳壇（佳句地十選／両川無限・谷口義）……(108)
一月各地句会案内……(120)
柳界展望……(122)
■編集後記（ひとこと／塩満恭子）……朱夏・眞澄…(154)



座右の句
八百長相撲も礼にはじまり礼に終わる（薫風）
私の句
風みどり庶民の声に負けました　仲谷真

さて「塔」の前身である川柳雑誌が創刊されたのは大正13年2月。今年で95周年を迎え、この一月号は「通巻1100号」となる。これは紛れもない真実の歴史。

月刊誌で95年を迎えながら1100号とは計算が合わないが、昭和19年1月から昭和21年8月の戦中戦後の期間と昭和22年1月から同年5月までの間、止むを得ず休刊に追い込まれた結果のこと。路郎師が無念の決断をしたこの事実も、残酷な戦争の記録と共に、私たちがしっかり覚えておくべき真実の歴史である。

ちなみに、昭和21年9月に復活刊行された242号は僅か8ページ。物資が乏しかった中を苦労して調達したであろうその用紙は茶褐色に変色し、捲れば破れそうなほど劣化している。おそらく近い将来には損壊し貴重な記録は消え去るに違いない。この現実を踏まえ「川柳塔誌電子化事業」が立ち上げられ、諸兄の理解と応援を得て順調に進捗している。

これからも歩み続ける川柳塔の歴史は紛れもなく「私たちの歴史」である。貴重な作品と作者名を記録し、冊子と電子データとして後世に伝えて行くのも私たちに課せられた責務である。



小島蘭幸選

ひょうひょうと来てひょうひょうと去る風　鈴鹿市　小河柳女
哀しみの歳月食べて鳴らぬピアノ
満月のしずくを飲んで生き返る
新聞紙の劇場ゆるり眺めてる
白いページを埋める灰色のわたし
透明になるまで秋の天見つめる　堺市　澤井敏治

初めましてと飴ちゃん配る塔まつり
菊人形のうら針金という仕組み
もみじ舞う風にも色のあるように
頷いてくれた情けにしがみつく
明日香路の鐘晩秋を告げている
蹟いても父母の歩んだ道を選る　枚方市　丹後屋肇

兄妹が跨がっている走馬灯
妹の棺は浄土を向いていた
鋤焼の肉へ妹監視の目
妹の手編みのモデル役だった
妹のつっかい棒で立ち直る
妹の落暉ひたすら数珠が哭く　奈良市　大久保眞澄

鯖よんだつもりはないが五十肩
当座の穴を埋めるぐらいが役どころ
顔はピカソ体はルノワール仕立て
人参が嫌いでも大人になれた
フローリングで滑りじゅうたんに躓く
終活のスイッチ故障してばかり　松山市　柳田かおる

コワレそうなわたし乾燥注意報
くねくねと私の中にある妬心
追いかけて来ると思って逃げたのに
待つ人のないふる里の岩清水
もの想いフッと深爪してしまう
塩害か紅葉の色にさえがない

松原市　森松まつお

間違ってましたと口に出す勇気
遠回しに言ったら誤解してはった
筋肉痛そうか昨日の溝掃除
男前にしてと床屋で言うてみる
一軍と二軍入れ替えしたい矢野
一ヶ月酒やめ機嫌悪いこと

桜井市　安土理恵

スーパーもポストも遠いけど静か
パワハラもセクハラも無く八十路
月の光浴びて鎮めているこころ
笑い声夕焼けの子ら五六人
あの人も風になったという便り
ゴシゴシ洗う思い出したくないところ

鳥取県　斉尾くにこ

口癖をためらいがちに真似てみる
玄関は小さいギャラリーようこそと
ひたひたとせまる平成最後の日
半日もたてば解読できぬメモ
ウツ病の同じ辛さを知る栞
晩秋をデザートにして庭のカフェ

橿原市　居谷真理子

恋という玩具を欲しがっています
銘酒買うしみじみ語る人も無く
冬が窓叩く心に火を焚こう
翡翠の一羽が飛んで胸の沼
いち早く手を引いたのは仕掛け人
君の血に少年ジャンプビートルズ

大阪市　谷口義

生きている者同士で祝うお正月
老化現象別に悪気はないらしい
ほろほろと抱いていたのは風だった
どうでも良いけれど年女らしい
男と女川になり風になり
上手投げで行きたい今年の運勢

大阪市　平井美智子

さよならの予感　糸切り歯が疼く
眠らせた思慕が時々夜泣きする
神さまのエールか肩に鳩の糞
夕焼けを一枚もらう海の町
待っている形に洩れる窓灯り
耕してみようか愛が面白い

神戸市　冨永恭子

わたくしが小さいだけのことでした
サバ缶がしてやったりと目立つ場所
誘惑を断てずぜんざい三杯目
継続が大事とパワー出し惜しむ
絶えぬよう次世代に継ぐいかなご煮
冷めてからではもう手遅れなんです

改憲へ永田町から鳩が消え
ピンコロの願いは神にご一任
天国の扉開くのを待つ齢
主夫をして主婦に任せる後始末
個室で一句便座快適なる温度
締切りが活力源の趣味の道

札幌市　三浦強一

平成はあと四枚のカレンダー
ひょっとしてそのＤＮＡ私かも
もう一度源氏の世界覗こうか
マニキュアを見せても無反応の夫
いつからかお菓子も食べる夫です
香香はもう親離れ人間は

上尾市　中村伸子

賑やかに振る舞い過去は悟らせぬ
横槍を入れ泣いている寂しがり
丸洗いしても通らぬ針の穴
身の程を知ったジャンプの着地点
ＣＭの犬より私無表情
気まぐれな天使が毒を吐きたがる

大阪市　小野雅美

老いの目に敵も味方もいい仲間
是々非々を貫くたびに味方減る
命など神に丸投げして遊ぶ

羽曳野市　吉村久仁雄

平和へのうねり辺野古へ押し寄せる
木漏れ日の古道で過去に笑いかけ
米粒ほどの愛を生き抜く糧にする

河内長野市　森田旅人

声を聞くただそれだけの至福感
食洗器ルンバに名前つけ家族
くじける日雅号に背なを支えられ
バイキング敬遠してるこれも老い
予測不能ブルーシートが売り切れる
落ちぬ汚れひとつふたつは持っている

出雲市　岸桂子

汗拭いて一人納得する軍手
川柳の話ばかりをして見舞い
アリバイは全部日記に書いてある
病院の匂いをつけて家に着く
頂点のない川柳をひた走る
水仙が踏み場ない程芽を出した

鳥取市　倉益一瑤

少年の瞳をして蝶を追っていた　（竹口清信さんを悼む2句）
まだ死なんでそう言ったくせ嘘つきだ
彼岸花生者も死者も入り乱れ
明日はあす日暮れの海は凪いでいる
心配はないさ大きな傘がある
涙ホロホロ謝る芸もうまくなり

堺市　柿花和夫

信念を吐露する人はメモ持たぬ
高僧の死にともないは本音かも
母なれば五体投地も苦にはせぬ
一石を投じ身を退く夢を見る
スナックのママはみんなの味方です
古都の秋鴟尾もいそいで暮れてゆく

紀の川市　山東日出男

森を出たサルがいつしかヒトになる
薩長の志士にもあった国訛り
訳ありの訳を話せば長くなる
不揃いなリンゴの芯に蜜が巻く
気の利いたジョークが言えるのも長所
爺ちゃんは今日もひねもす時代劇

寝屋川市　籠島恵子

感情線ただいまスローカーブ中
取り替えっこになってしまった土産
夕やけも虹もメールに添えてくる
立冬にまだ咲いている月見草
世話焼きが居てくれるのでバスツアー
捨てられぬ人から貰うお人形

八幡市　今井万紗子

亡母の背を流す幸せ夢の中
廃駅に待つ人があり伝言板
父の伝言何かお酒の臭する
うちのマドンナキュートでおしゃま三才児
再婚してますます若くなりはった
後期高齢まだ青春のど真ん中

松山市　栗田忠士

ブラックアウトオール電化の泣き所
内緒にしてあげるの裏にある毒矢
アンドロイドもさすがアドリブには弱い
ガラケーを持つ手にちょっと照れがある
大物は狙わぬ父の単打主義
つぎはぎの人生でした泣き笑い

岸和田市　宮野みつ江

一通の手紙がくれた冬の虹
明日への希望配達する夕日
パソコンが今は私のおもちゃ箱
相槌を打って痛みを分かちあう
時間ならやりくりせずにたんとある
頬紅に見た目元気になる私

岡山県　山縣のぶ子

快晴の紅葉見下ろす空の旅
娘や孫に呼ばれルンルン歌舞伎座へ
夫は逝く隠居の森を後にして
なつかしや年中無休夫の酒
追いかけて来てほしかった丸木橋
苔生した先祖が光る墓掃除

和歌山市　磯部義雄

元号が変われど僕は変わるまい
ＡＩの時代高齢者の悩み
子供らに二パーセントは辛過ぎる
頼るのは薬と医者と妻の肩
停年を迎えてくれた無人駅

和歌山市　上田紀子

頂いた命じっくり陽に晒す
金平糖味方の数を読み違え
断捨離をすれば長生き出来そうで
錦秋の絵筆にひとつ足りぬ色
笑いながら釣瓶落としの陽が沈む

和歌山市　坂部紀久子

立冬に上衣一枚脱ぎすてる
ペン置いて気付いた窓の外は闇
欠席の理由しつこく聞かないで
嫁が何故くれたかクイズの本二冊
上向きに寝ると反抗する背骨

和歌山市　武本碧

自信ある時には近く見える的
バランスの悪さは愛でカバーする
ブレーキの効かぬ妄想走り出す
正直が過ぎてひとりの絵を画く
幸せの目盛はいつも自分流

和歌山市　土屋起世子

健脚に感謝してます紅葉狩り
振り向いてくれないけれど咲く野菊
鮮やかな柿が残っている廃屋
独り住む家にも少しあるドラマ
主婦の意地掃除ロボには任さない

和歌山市　古久保和子

これからを飾る鉢植え買いに行く
しなやかに揺れてコスモス咲き残る
河口までやっと流れてきた思案
まずメシを炊いて次の手考える
泣いて済むことでないから泣きません

和歌山市　堀冨美子

突然の激痛いよいよと思う
行き詰まると子の手を借りる不甲斐なさ
マイペース取り戻したい日の焦り
今更に出会いの友の温さ知る
気力なお八十路の幕を退かせない

和歌山市　松原寿子

風避けて生きる火種を絶やさない
打たれ強い杭も崩さぬ意地がある
井の中の蛙で読みが浅過ぎる
肩書はないけど姿勢崩さない
悩み事胸に閊えたまま冬に

岩出市　藤原ほのか

お迎えはまだまだ先と思いたい
伸び悩むことがあっても怯まない
冗談で済まないことが数多ある
このごろは鏡のわたしにぎょっとする
冗談と思っていても笑えない

海南市　小谷小雪

森林浴　光合成もできそうだ
間に合わせに縫った綻びまた解れ
お待たせと拡大鏡に来る光
ドストエフスキー読み悩みは続く
まあいいよ　ここはピエロになっておく

海南市　堂上泰女

大切にすれば甘える猫になる
災害に遭ってもやはり優し姉
遅刻癖もうあなたには用はない
寒くなりアダモの歌が恋しなる
ソロリソロリ煽り運転されぬよう

紀の川市　楠原富香

栄光を掴んだ背が老いて行く
過ぎた日を揺すれば夢が零れ落ち
消しゴムの屑が格闘した証
定年になると気儘な時間割
独り居の良さを満喫して孤独

橋本市　石田隆彦

パワフルに生きる半分は見栄も張り
鉄旅へ誘いこむのは時刻表
病持つ老いの予定は不安定
何歳だろうと一生今が華
足音を聞いて育ってくる野菜

京都市　清水英旺

新聞に反面教師こと欠かぬ
よっこらしょいいつつ家事に立つ女房
気の利いた言葉チラシの裏にメモ
だれからもお呼びかからぬきのうきょう
お十夜の鉦聞いているしまい風呂

京都市　藤井文代

補聴器も聞き流すため離せない
背中押す風は鏡の中に居た
人には迷惑かけても通すマイペース
真実を追えば事実に迫られる
読心術心に眼鏡掛けてみる

京都市　三宅滿子

里帰り娘にそっと渡す旅費
天高く墓参の後の露天風呂
朝ドラに戦前戦後教えられ
買い出しで五人育てた母白寿
夫より頼りがいある掃除ロボ

長岡京市　山田葉子

明日何があるやらキッチン整理する
みずみずしい言葉五感に沁みてゆく
悪女にはなりきれないで旅続く
ロスタイムあせった方が負けらしい
傘寿前なのに旧姓今も好き

大阪市　磯島福貴子

秋本番もうあの暑さ忘れてる
不摂生たたり補正がきかぬ身に
フグクエカニ今年もやはり垂涎に
街彩るイルミネーション歩が弾む
少子化故出来ちゃった婚歓迎す

大阪市　岩崎玲子

今朝も又こむら返りで目がさめる
里の風あたると傘寿子に還る
亡母の歳越して動けるありがとう
声出して土手の散歩で五六曲
挑戦した孫の算数解けなんだ

大阪市　内田志津子

治癒力の失せた体に老いを知る
狭くても夢いっぱいの一戸建て
戯れる盲導犬は役終えて
わがままになった退任セラピー犬
引き際の美学せごどんから学ぶ

大阪市　宇都満知子

目に耳に歯にも主治医ができました
朝バナナ食べてますかと聞く主治医
長風呂に声かけ安否それとなく
いろいろあった今年を終うあとすこし
寒い日は亡母の手紙と日向ぼこ

大阪市　江島谷勝弘

大都会のカラスはどこへ帰るのか
天地異変どうやら的は大阪に
終活にミシン習っていますボク
わっうれしい五百円玉潜んでた
それぐらい自分で考えたらどう

大阪市　榎本日の出

満面の笑みが幸せ呼ぶらしい
すっぱりと脱いだお風呂が天国よ
好きなこと出来る間は先ず感謝
リニアカー乗ってみたいが間に合わず
素っぴんで出掛けることに慣らされる

大阪市　榎本舞夢

芸術の秋鑑賞するも多忙なり
あっちこっち記念句会と忙しい
展示会レイアウトする忙しさ
年賀状お節料理と慌ただし
来年は元号変わる皆多忙

大阪市　大川桃花

鬼太郎の肩で目玉が指図する
ビルに挟まれ踏ん張っている鬼瓦
殺人的猛暑生きのび友とお茶
預金と寿命ジレンマ抱え四コマ目
三選の内閣案の定ゆるい

大阪市　大治重信

ウフフフ笑って入る掘炬燵
拾いしは昔昔の子のボタン
赤ちゃんは手相をもって歩きだし
台所母はいつもの割烹着
ラーメンを食べてる机　冬帽子

大阪市　奥村五月

跡継ぎが博士になって閉める店
処罰無し財産もなくもう八十路
神様も働きすぎと神無月
孫晴れ着婆が張り切る七五三
鬼コーチ家に帰れば孫を抱く

大阪市　笠嶋恵美

眼科医が気楽に生きと笑い出す
プーシキン美術館展ああしんど
カルチャーへ足が無理やと言いました
夫婦げんか友が電話でぶちまける
やっとこさ自分に楽な道選ぶ

大阪市　金川宣子

迷うこと計算入れて家を出る
良い悪い両方あって人間だ
終末期散るべき時は潔く
何クソとたまに尖って生きてやる
老人に席を譲った若作り

大阪市　川端一歩

逢いたい人ある幸せを噛みしめる
史好豆秋ひさしを読んで歳の暮れ
愉快な日お酒が二本多くなる
嬉しい日みんなに握手したくなる
兄の死は親送るより悲しけり

大阪市　熊代菜月

体調を気使う嫁の声やさし
雨女出かけるたびに雨が降る
私達男と女で今夫婦
手のひらに口惜しさグッとにぎりしめ
痛む足いたわりながら行く句会

大阪市　古今堂蕉子

自己責任引返すのも進むのも
行ける足ある間に行くか蟹食べに
コーチのひと言　弱気の虫退治
アドレナリン全開神技が冴える
ええとこもあります　だから五十年

大阪市　近藤　正

世直しに良い元号はないものか
消費税猪突猛進では困る
医者通い終わりスマホでも買うか
辺野古を止めれば美ら島が賑わう
財布の紐と口はしっかり締めておく

大阪市　坂　裕之

うまくいくように皆で手を組もう
辛い事いっぱいあって当り前
きっちりと決めたい時にまた滑る
良い人と巡り合えたの感謝です
高すぎる評価に動き固くなる

大阪市　髙杉　力

優しさが沁みるお出掛け車椅子
語り継ぐつもり昭和の明と暗
足して二で割ったあたりにいつも居る
五つ星ホテル窓から見える宿
地球にはやさしい妻でエコバッグ

大阪市　髙杉千歩

九十三になりますおめでとうに遠いホーム
大正昭和平成いつまで生きる九十三
松竹梅南天造花ですこの世
あんたがたどこさスマホ見て下さい
寿を知らぬ世代と祝い膳

大阪市　田中廣子

祖母偲び幼い昔懐かしむ
トランプの狭い考え世を乱す
句会終え友と楽しいティータイム
初孫を抱いた嬉しさ身に浸みる
ほほ寄せて抱かれたことが懐かしい

大阪市　田中ゆみ子

そんな時いつも隣に詩があった
孤独ではないポインセチアにシクラメン
知らないことがいっぱい明日が楽しみだ
新刊書君の素顔に触れたくて
学校が楽しいうさぎの世話係

大阪市　津村志華子

幸せの彩で輝く朝ぼらけ
杖突いて何を願うや初詣で
また一つ歳増えました仏さま
柿食べて句作を練っているところ
銀河ゆきの切符は既に予約ずみ

大阪市　津守なぎさ

看護師にゆだねあしたの夢を見る
木偶になる病衣流れに逆えず
書きなぐる自分の文字が読めぬ怪
目ぐすりを命中させるのは至難
枯れ葉舞う日光浴に憧れる

古里の棚田賑やか彼岸花
郷愁のちらちら母の宅急便
正倉院東洋文化菊映える
ありがとう遺言父の愛に触れ
わたしだけの宇宙と思う試着室

大阪市　寺井弘子

凛凛しさが淋しさを呼ぶセピア色
癒やし系人畜無害のことですか
結婚へゴールを決めるできちゃった
嫌われぬように正論少し曲げ
適当にそれがわからぬ塩コショウ

大阪市　寺本実

家族葬増えて回覧板が減る
夫への素直が時に蹴躓く
紅葉を住む町に見る長散歩
台風へ請求したい屋根瓦
孫との繋がり変化さす成長

大阪市　原田すみ子

友急逝徒然草を思い出す
生き抜くためテレビ体操日課です
秋の日の吟行楽し當麻寺
芸術の秋絵を観ていのち洗濯す
両陛下の平和への意志受け継ごう

大阪市　平賀国和

ひとすじの煙が語る過去未来
子と孫と曾孫玄孫にポチ袋
今と過去比べ続けて生きている
煙突を見上げサンタのスクワット
真っ白な画布に描こう自分色

大阪市　藤田武人

愚痴聞いてほしくわざわざやって来る
青年が倒れたチャリを助け船
ハプニング続きで閉じた発表会
焼ソバとお好み焼きの日曜日
部屋中に紙を広げて五七五

大阪市　藤原千恵子

本当の勇気黙って一歩出る
定型をはみだす青いアンビシャス
砂は多弁に百態の風と生き
欲の手で掴むと割れるシャボン玉
人はみな単身赴任するあの世

大阪市　升成好

待ち兼ねた秋晴れ誘う今日の汗
逢いたくて息子の友が来てくれる
シルバーさんの松の剪定に励まされ
人の振り我が身は杖を捨てたくて
身の丈の傷気長く歩く癖にする

大阪市　吉内タカ子

大阪市　若本安代

出来すぎた話やっぱり断ろう
楽しさは歩く吟行古寺めぐる
二の足を踏んで実らぬ恋ばかり
靴に足合わせた頃は無理が利き
蹟いた理由足かな頭かな

堺市　奥時雄

村が市になり住む人いなくなり
達者なうちはと友から里の味
猪が人より多くいると言う
正月はやはり日本酒などと言い
選挙権持つ孫達にお年玉

堺市　加島由一

ラジオつけ合掌をして水を飲む
松茸が豊作興味ないニュース
ひょっとしてドジョウは地震予知せぬか
爪を切り散髪をして昼寝する
スーパーでお節受け取る大晦日

堺市　源田八千代

扶けられてたのが助ける破目となり
老体に鞭打ち通うメトロ線
云十年振りのラッシュに見舞われる
天地人まさかまさかの年暮れる
新年に期待を込めて拵える

堺市　齋藤さくら

親切な言葉涙もろくなっている
婆ちゃんの出番無くなるのも寂し
日曜日ゆっくり寝ろと言うてくれ
もう一度会いたい人が夢の中
走ったら転ける歩いたら追い越され

堺市　遠山唯教

花道に彩る花を咲かせたい
里のあき墓参に栗の実を拾ふ
ふり絞る力の老いを自嘲する
庖丁より絵筆もつのが好きな妻
面子などいったら妻と暮らせない

堺市　内藤憲彦

年金では手も足も出ぬ月旅行
見ぬ振りができぬ沖縄の悲願
あの世への家族葬にもランク分け
どっこいしょ自己責任です足と腰
目が合って一〇〇円入れる赤い羽根

堺市　矢倉五月

バイクから軽四ちょっとした出世
広い窓シャワーもあるが所詮病室
久々に会う娘に言う事メモしとく
又お茶をしょうねおしゃべり今しよね
ますますの活躍祈られている便り

茨木市　島田誠一

きちきちとやれば傷つく人が出る
待ち合せ場所と時間を二度三度
マニュアル化した気配りが味気ない
マスゲームだけはカラフル北の国
年金は平日割と仲が良い

貝塚市　石田ひろ子

だんだんと優柔不断になって来た
読書から充電してる老いの知恵
ペン胼胝も知らぬパソコン走る指
クラス会艶ばなしより死ぬ話
階段より遠回りしてエレベーター

河内長野市　大島ともこ

新元号期待膨らむ初日の出
新年の抱負毎年コピーする
ビルの谷間昭和ひっそり吐息つく
ハルカスが手を振る旅のプロローグ
赤い靴に呼び止められたグレーな日

河内長野市　梶原弘光

信頼回復に努めたいと埒もない
雑学を小出し図書館にて補充
普通ではやけぼっくいに火は点かぬ
相老いもあといくばくか一つ屋根
他人より二三歩先でよいアタマ

河内長野市　木見谷孝代

使い切る心希林さんに学ぶ
公民館文庫身近で選りやすい
日本のおばけたじたじハロウィーン
朝夕のお煎茶旨い九谷焼
久しぶり会話が弾む回り寿司

河内長野市　黒岩靖博

台風がジャマジャマジャマとなぎ倒す
寿命のび老いらくの恋二ツ三ツ
寿命のび預金通帳みて不安
少しでも健康寿命維持努力
迫る入試急に萎んだ受験校

河内長野市　辻村ヒロ

押入れに捨てられぬまま玩具箱
正義感自己満足か振りかざす
生かされている責任を模索中
夫婦仲多少の矛盾は知らん振り
あなたより長生きするとウォーキング

河内長野市　藤塚克三

本心で妻と向き合い口喧嘩
悔しさを呑み込み明日の糧にする
おばちゃんは迷うふりして買い叩く
お土産は試食重ねて決められぬ
今日退院我が家の風呂で鼻歌を

河内長野市　村上直樹

アベノミクスティッシュ配りも消えました
月の出を待ってちびちび新走り
母さんの介護するよと言うニート
未完成だからそれぞれ人間味
昭和平成洗い清めて新時代

河内長野市　山岡冨美子

執着を捨てると透明になれる
鍋の湯気だまって棘を抜いてくれ
冷蔵庫たまに変身して倉庫
またひとつ緑内障というおまけ
平凡な名前にちちははの祈り

河内長野市　山室光弘

美味い肴燗は人肌秋の風
地に足をつけた牛歩で前を向く
不惑から迷いがスルリと入り込み
消えぬ欲灰になる日も近いのに
頑固さはブレぬ男の勲章だ

岸和田市　岩佐ダン吉

玉の汗僕の全てを洗いたい
何よりの励まし共に歩きたい
あの日まで敵だとばかり思ってた
多数派に安住僕が軽くなる
耳は貸す僕の話も聞きなさい

岸和田市　雪本珠子

ミニ穿いて闊歩したのが夢のよう
猫にまで気遣いされているわたし
川柳を心の友に暮らす今
一病を手懐けながら生きてゆく
隙間風入る余地ない夫婦仲

四條畷市　吉岡修

横っちょで責任のないよいしょする
貧乏が鍛えてくれたから自信
芝居の席横の夫が邪魔になる
機転やないおっちょこちょいなだけのこと
麻酔さめ待ってた妻へVサイン

吹田市　木下敏子

趣味ひとつ提げてゆっくり年を取る
精一杯生きて八十路の句を捻る
割り勘で三人いつもお茶の友
句読点打って今夜は早寝する
ありがとう今日も何回言うたやら

吹田市　須磨活恵

晦日そば少し残して除夜の鐘
お雑煮も一人しずかなおついたち
週に一度脳トレクイズ呆け防止
ナベの底ピカピカ磨いてまたあした
風邪ひかぬように躾かないように

吹田市　野下之男

知らぬ人よくやりました平和賞
どう見ても新入生新大臣
ほんとかな女性尊重ただ一人
はたらけよ息子に渡す一万円
薬箱ジャパン製だと小さな字

高槻市　指宿千枝子

疎かにしてはならない言い伝え
ばあちゃんに聞いた伝説忘れない
起き抜けに力試しと布団蹴る
ノルウェーの旅はムンクに会いたくて
雨上がりの波止場にムンク見え隠れ

高槻市　片山かずお

昔歩けた距離を車の世話になる
採用条件人手不足が緩くする
アッと気づいた時は大概もう遅い
ティッシュの付いていないチラシは貰わない
賢げに見える白シャツ紺パンツ

高槻市　島田千鶴子

秋ですね向いの家の柿すだれ
おおげさに空気吸い込む里の朝
霜月の陽のやさしさを身に纏う
ご無沙汰を侘び合っている電話口
声だけは今日も元気でよく走る

高槻市　初代正彦

まだ夢をあれこれ抱くロスタイム
配るもの別に無いのも気楽です
まあまあの暮しさぞかしお幸せ
草臥れた書斎の隅にある秘密
平成の終いにやおら種を撒く

高槻市　杉本義昭

デザイナー自分の色で勝負する
亡母の肉ジャガしっかり嫁が繋いだ味
点滴の命を繋ぐ音がする
ネクタイの長さ合わない時がある
うちの妻あっさりだから有難い

高槻市　富田美義

秋晴の先の先まで蝦夷の旅
グルメより快便うれし老いの秋
コウモリも一緒に暮らす山の駅
始球式届かなくても大拍手
投げつけた言葉に疼く長い夜

高槻市　富田保子

縁あって秋の日に咲くかすみ草
秋祭りタイコの音に酔うわたし
ていねいな同じ話を聞きに行く
川柳の趣味が背を押す老いの坂
恐いもの見たくはないの目をつむる

百均のリズムで生きて気負いせず
物置きにごろごろしてるジャパネット
行列が短い今日は並ぼうか
パック買い余分な二つまた捨てる
マンションの谷間で生きるたこやき屋

高槻市　原　洋志

この時世造花で参る墓事情
エライ人だろうお墓に名刺受け
高野山大大名の墓荒れて
川柳塔碑仲間入り前お参りに
孫達に墓前で家系自慢する

高槻市　松岡篤

書道展絵を画くような筆使い
時々は大きな声で本を読む
ジャンケンで負けて大きい方になる
安田さん痩せ衰えて無事帰国
ハードルを低くしてから気が楽に

高槻市　安田忠子

歩けなくなるぞと脅す万歩計
トランプで占いましょう近未来
文春に写真撮られて中吊りに
病んで知る頼りになるの妻一人
青からの脱皮を目指す70歳

豊中市　上出修

人の痛みにそっと寄り添う苦労人
ファーストと言うては我意を通す国
にっこりとされて味方とつい思う
スマホよりは情が伝わるメモ用紙
小憎らしいと思う人ほど役に立ち

豊中市　藤井則彦

チューリップ植え楽しみ増やし春を待つ
松茸が豊作だけど届かぬ値
トルコ産の松茸でする土瓶蒸し
日本の秋を楽しむ栗ご飯
ありがとうとさよならを言う御焼香

豊中市　松尾美智代

予選など無い人の世というレース
くすぐられふにゃふにゃになる虚栄心
誰でもが持てる宝のいい笑顔
世代間ギャップを埋める里なまり
竹とんぼさあ舞いあがれ里の空

豊中市　水野黒兎

合唱とは個性ひとつの花束に
太古語る貝を耳から遠ざける
いまの米国リンカーンの姿見えず
頂上近しもう生き方は変えられず
まだ欲がありアンテナを高くする

富田林市　片岡智恵子

富田林市　関　よしみ

枯蔓を引いて森音やわらかく
吊し柿とろとろ陽気朱が深い
とんとんと行く年マスクかけ直す
ほのぼのと幸せ願う一行詩
千両の一粒ずつに雨が沁む

富田林市　中村　恵

軸足を替えると景色まで変わる
秋彩に内緒話が染められる
納得のゆくピリオドはまだ打てぬ
ひとりでいる時を狙っている涙
虎落笛温和な顔が遠ざかる

富田林市　山野寿之

まっ新な愛が生まれる池の蓮
金婚に固結びした赤い糸
吊るし柿一番なりを半分こ
平坦な道でなかった靴の底
鋏が孫に替わってきた番

寝屋川市　伊達郁夫

トイレ拭く明日があろうとなかろうと
守るもの捨てるものなし枯すすき
ライバルの斜め後で思案する
懐の深い男だ海を抱く
笑い声きっと誰かが耐えている

寝屋川市　冨山ルイ子

戦慄の記録インパール涙が
兵の遺族インパール知り泣くだろう
日本兵の魂残るインパール
将官は帰国兵餓死病死インパール
魂がふるえる戦争の無謀さ

寝屋川市　平松かすみ

転ぶなと地球を掴む足の指
一日をねぎらい摩るふくらはぎ
ママチャリで昭和平成走り抜け
ピンヒールまだ履けますと同い年
ありがたい土だ小芋が出来ました

寝屋川市　森　茜

ゆっくりとうす墨いろになるわたし
ふさぐ日は魅夷の「道」と対話する
レコードがすり切れるまでイブ・モンタン
さるすべりいろに路地うら夕焼ける
すずらんのかすかに香る日の美談

羽曳野市　安芸田泰子

許される余命は知らず春仕度
昭和史を丸ごと抱いている八十路
面白く聞かせる今日の失敗談
乱雑な部屋に入ってほっとする
タイマーをかけたテレビが子守唄

秋晴れに暮の掃除を片付ける
ネガティブな夫に反論して疲れ
風邪治り減った二キロがすぐ戻る
百観音あと十ヶ寺で満願に
蟹豊漁来年からは減るらしい

羽曳野市　宇都宮　ちづる

暖かい立冬まずはありがとう
震度2が心構えを問うてくる
台風禍やっと嬉しい見積り書
元気ありがとオクラにゴーヤモロヘイヤ
知らぬ間に山茶花七つ八つ笑う

羽曳野市　徳　山　みつこ

ふらふらとあの世の景色見て帰る
内視鏡病巣ついに顔を出す
輸血しながら大腸検査ありえない
集中治療室電極まみれ闇
終の章牙剝き出してくる持病

羽曳野市　中　川　ひろ介

今年また思い出詰めて小菊咲く
子や孫と距離置かねばと自問する
七十路もまだ気付くこと多くあり
甥姪と語らい貰う兄の通夜
チュンチュンと小鳥明るい朝をくれ

羽曳野市　藤　原　大　子

失敗があって楽しい生きる道
雲は天才である秋の朝
能トレのグーチョキパーができません
ぼんやりとしている方が調子いい
毎日が泥鰌掬いの踊りです

羽曳野市　三　好　専　平

ドッコイショと痛むところが増えて喜寿
まだ生きる明日へ笑顔絶やさない
ストレスにどっぷりA型の受難
良い年になりますように新元号
新しく明日を刻む時計買う

東大阪市　北　村　賢　子

秋色を足して古里から包み
曲がったこと嫌いで敵も多かった
価値観の違いで盟友と分かつ
コスモスの迷路で寅さんと出会う
一年の締めは第九のニ短調

東大阪市　佐々木　満　作

目がさめて今日を生きぬくヨガ体操
小春日へ元気でウォークの友がいる
妻元気私も元気年の暮れ
ハーモニカ吹いて癒しのボランティア
今日もまたメダカとしゃべる老いの午後

枚方市　二　宮　山　久

枚方市　二宮紫鳳

先ず写メに納めて食すイタリアン
陽だまりの中で夢みる老いの午後
浮き沈みあって阿吽の夫婦仲
新米のうまさに負けたダイエット
老いて今持ちつ持たれつ生き上手

枚方市　山口弘委智

子の帰省親子の酒量逆になる
紅葉山麓まだまだ未完成
薄くむくリンゴに負ける軽い嘘
近道という落し穴人は好き
絵心と詩心煽る五七五

藤井寺市　太田扶美代

翼ないことをすっかり忘れてた
哀しみにくっついて来たいい話
手の届くトコで満喫してる秋
誰だろう夫が笑ってる相手
今はもう全部忘れた花言葉

藤井寺市　鴨谷瑠美子

人待ち顔が写るパン屋のウインドー
こころ変りしたかのように喋らない
歪んではいるがわたしを飾る棚
誘惑に乗ってもみたい秋日ざし
訃の風はふいに暦を裏返す

藤井寺市　鈴木いさお

くたびれた咽がときどき誤嚥する
舞い落ちる枯葉にわが身重ねみる
ライバルはハズキルーペにしたらしい
収穫の喜び地車ひた走る
フェデラーとジョコビッチさえ居なければ

藤井寺市　髙田美代子

暑さに負け寒さにも負け齢とは
風邪引かぬ様に気遣うのも仕事
ネイルアートしてます気分優れる日
染めたのですかと白髪をほめてくれ
気張らねばすぐ年末とお正月

藤井寺市　吉田喜代子

良き季なり汚れが目立つ季でもある
松茸は買えぬが茸楽しんで
人のため何か動くと身は軽い
下手な字も個性と言ってくれる人
メール友反発するが好きである

藤井寺市　若松雅枝

延命治療そろそろ考慮しとかねば
同窓生会えば忽ち気が和む
夢に出た亡き子は今も幼稚園
朝昼晩呑む順番に置く薬
白菊に囲まれ逝った人想う

箕面市　大浦初音

粗い目のザルで掬って楽に生き
奥歯をかみしめる癖があるらしい
マウスピースはめれば夢はラグビー場
甘い言葉久しく聞いたことがない
長電話チャイムの音でやっと切れ

箕面市　酒井紀華

菜を洗う溢れる水で里の秋
触れて納得ふわりと落ちた冬桜
カスミ草そっと私を包む愛
乳房すう力信じる子の未来
あれっきり他人になった夜の駅

箕面市　出口セツ子

人間が好き大勢の会話聞く
見舞い行く嘘がつけないから苦手
祝いより不幸が多くなる齢
一日は楽し二日は飽く独り
お独り様肩身の狭いレストラン

箕面市　中山春代

おばちゃんの歩幅で埋まる京の坂
ポリ袋着せた新聞午前四時
神様が押してしまった削除キー
十二月八日へ飛ばす紙の鶴
私って縄文美人だったのね

箕面市　広島巴子

シルバーに輝くすすき我が夫婦
ノルウェーの森のロケ地でポーズとる
人波に乗ってうきうき一万歩
別腹は一つじゃないと食べ歩く
ワッショイと未来へ跳ねる子の神輿

八尾市　内海幸生

初日の出希望に明ける新元号
新元号十連休も連れてくる
恵みとは何処までだろう雨の量
解脱した筈の目が見る株価表
平成に有難うさま心から

八尾市　寺川はじむ

外人が着けると見映えする不思議
台風一過ほっと安堵の稲穂垂れ
被災地に作業着映えるボランティア
売れっ子も流行り廃りに身を焦がす
先頭はメスかも知れぬ蟻の列

八尾市　宮﨑シマ子

民宿の麦飯懐かしく食べる
紅葉の里山幼い私そこに立つ
五臓六腑元気に雑煮食べている
年玉は祖母の係りと決めている
姉妹が集まる方言が飛びだす

八尾市　村上ミツ子

水飲んでエアコンつけて過ごしたが
半端ない暑さなんだかなつかしい
ポイントためてへそくりに繰り入れる
思案ばかりで何もできない終活よ
雪山を登る子熊のメッセージ

八尾市　山根妙子

朝の荷で宅配が来る秋乗せて
万国旗運動会の孫探す
蝋燭が揺れる仏飯栗ごはん
霜葉が句碑にこぼれて人温く
陛下とは同じうねりの世を生きる

大阪府　米澤俶子

今日の愚は流し明日は悔いぬ日に
ふたりの夕餉明日のことは疑わず
生かされて感謝時々忘れる日
置きざりのピアノは只の飾りもの
蜜入りのりんご剝く手が嬉しがる

神戸市　上田和宏

二階からメシとトイレだけ降りる
気に入らぬ電話不機嫌に応待
カッと開くと見えないものが見えてくる
ふるさと納税おいしいお米ありがとう
よいしょでは上がらぬ腰の歳を誉め

神戸市　奥澤洋次郎

友達が居なくなってるかくれんぼ
川柳で四コマ漫画描いてみる
認知症になれば私はどないなる
片減りの直りようなく八十路入り
逝く時は一人の覚悟生きている

神戸市　能勢利子

イタリア人が組立てに来るルミナリエ
句会帰り途中下車してルミナリエ
ルミナリエ募金続ける神戸っ子
ふところが寒いと帰宅早くなる
煌煌と電気つけたら寝る赤児

神戸市　細川花門

母恋し墓前に菊の香を活ける
墓参り悔いても遅い親不孝
生誕の七十七年目の自戒
秋燈下電子辞書あり句集あり
文机は乱雑なれど心地良い

神戸市　山口光久

縫い代があると思っていた不覚
まあまあじゃ満足しない匠の目
陶芸の名人だって出来不出来
力にはなれず悔しい木偶の坊
物忘れ激しくなって擦り合い

神戸市　山崎武彦

暗闇でひっそり外す菩薩面
実線が点線になる四コマ目
切り取り線で命だんだん惜しくなる
シテとワキ補い合って五〇年
ゆるやかな思慕を断ち切る秋の雨

明石市　糀谷和郎

停電に納屋の湯たんぽ生き返る
エンピツで地球儀なぞる夢はるか
無印のままでは故郷帰れない
あずさ2号はるか記憶を通過中
老いるとは枯木に擬態することか

尼崎市　加川靖鬼

坂道はうしろ歩きが楽という
外反母趾ただひたすらに耐えただけ
いい夢を咲かせて欲しいぽたん鍋
わがままの猫ねこなりのスケジュール
マタタビを少し混ぜたい貴男にも

尼崎市　永田紀恵

ガラクタを珍品にする骨董屋
川柳が硬い頭を揉んでいる
右まわりに飽きた時計が拗ねている
無理矢理なルビでキラキラ子の名前
欲の皮いっしょに伸びる詰め放題

尼崎市　藤井宏造

空を飛び飛魚元気見せつける
空元気見せてきましたクラス会
葬儀終えネクタイはずす帰り道
この世は楽し散り急ぐことはない
待つ方が性に合うので早く行く

尼崎市　藤田雪菜

行く末はどうあれ古都の秋に酔う
どの橋も名前があってなつかしい
見てるのに左右対称書けぬ眉
途中下車君の名に似た小さい駅
目標を稀にクリアし雲の上

尼崎市　山田耕治

母と妻と女二人に育てられ
猫はまだ戻らぬ雨戸閉められぬ
じいちゃんはそっと後方支援する
怪獣もいる熱の子の枕許
我慢してネクタイ締めていたのです

川西市　岡一心

手弁当何より嬉し母の味
級友の声援必死徒競走
成績は二の次で良し運動会
びりも佳し思い出残る交歓会
楽しみは皆んな仲良しクラス会

川西市　山口不動

股関節人工に換えロボット化
同意書は全身麻酔まかせます
妻子来て行ってきますと手術室
麻酔覚め妻子の顔が大写し
一夜中ナース室には天使いる

篠山市　酒井健二

乗客は私一人で大あくび
平凡な喜怒哀楽に泡が立つ
かみ合わぬ世を厭うても替えは無い
強欲が散ってようやく人並みに
袈裟を着て旅で酒代稼ごうか

篠山市　酒井真由

寄り添うてふわりと萩の風の中
平成も今年かぎりの今宵満月
遠き日の記憶月下のギターソロ
海昏れて地球がまるく見える丘
這い這いの児へころころと毛糸玉

三田市　足立つな子

生真面目な手抜きがへたで疲れだす
嫉みなし丸く治める器量人
若い胃だ検査いらぬと医者ほめる
これからだ百いき体操仲間入り
橋渡しのめぐり合いから五十年

三田市　上田ひとみ

エピローグ未完成ですこのまんま
さよならの向うにほうら茜雲
ほめられてこんなに軽くなっていく
長生きも楽ではないと言うのです
窓開けてあなたを風を待っている

三田市　尾崎一子

地震豪雨過ぎてようやく秋に入る
あちこちで大会沢山拍手して帰る
展示会華やぐ友は逝ったきり
部活就活疲れた孫にはスイーツ
穏やかな暮しの中で亡夫恋う

三田市　北野哲男

平成の最後に拝む初日の出
年金の元は取ったがまだ達者
コンビニのコーヒー旨し雨やどり
治癒力の手助けすると言う老医
お下りを着ても輝く瞳があった

三田市　久保田千代

目を少し美術の秋にふくらます
農地にも都市化をめざす青写真
ザブザブと悩み洗ってまたあした
カラオケのテンポ若さを思わせる
シーソーの中程にある妻の椅子

三田市　多田雅尚

安全と言う二文字が軽視され
母強し両手に抱える二人の子
独裁に歯止めも要ると星条旗
浮遊するクラゲを見ては癒やされる
暖冬と聞けば嬉しいエルニーニョ

三田市　谷口修平

一寸だけブランコに乗る塾カバン
役に立つ人から順に辞めてゆく
なぜだろう悩み続けているロダン
プライドの羽根を畳めば風が凪ぐ
風邪薬いつも酒屋で買ってます

三田市　野口真桜子

七色風船手から離れる蒼天に虹
朽ち果てた屋根裏に棲む福の神
ブランド林檎むけば普通の顔になる
遥か来た道に女のカケラ捨て
マンネリの男女偶に投げあう変化球

三田市　福田好文

うそ見抜く母は悲しい目で叱る
偏差値を知るまで前途無限大
医の進歩みんな老衰まで生きる
プロ並の道具揃えて飽きる趣味
半日は探し物する妻の留守

三田市　堀　正和

監督を替えて夢見るタイガース
公園の落葉踏み締めモンタンに
ドングリを拾い磨いて並べる児
赤トンボ唄いしました墓終い
続編を書いております傘寿から

三田市　村田　博

東京五輪やっぱり秋の青空で
電動もあえぎ喘ぎの古稀の坂
青春の思い出残る手術痕
川柳が一番人気文化祭
止まったら死にます僕は回遊魚

高砂市　松尾柳右子

青空へ栄枯盛衰姫路城
若者が揃う豊かな秋祭り
新年の希望に友が増えてくる
しあわせは娘夫婦の車間距離
あらたまる年へ頑張る年女

宝塚市　丸山孔一

天引きで細い年金更に痩せ
外見良しだけど内部はガタガタや
過ぎた旅傷跡順に薄くなり
永遠に人智自然の試練受け
誕生日貧乏神がオメデトウ

花火咲く少し後れる音連れて
最年長言われ嬉しくない時も
ようやっと病名決まりホッとした
古カバンこれ見よがしの意気を買う
ハイタッチ祖母の背越えたいい笑顔

西宮市　秋元てる

天空に自己主張して銀杏の黄
表紙は秋寺の曼荼羅ご覧あれ
平凡な暮し彩る紅葉狩り
法被着て掃除しているのが社長
拉致の子を平均寿命こえて待つ

西宮市　緒方美津子

すっぴんのおばあさんにはまだなれぬ
お受験後遊んでくれぬ孫である
よう遊んだな覚えているかい孫よ
今年かぎり言うて五年のクラス会
定食は栗ごはんなり栗拾う

西宮市　亀岡哲子

ろうそくがまさかの出番あの停電
濃紫のりんどう凛と野の仏
「山の彼方」ドローンにロマン打ち消され
北極の神秘を溶かす温暖化
雪景色答え求めて京の寺

西宮市　福島弘子

赤い羽根募金の元祖衰えず
足跡がしっかりしろと言っている
失言に気が付かぬまま笑ってる
今日終る宝の日記増えてゆく
核保有抑止力とはきな臭い

西宮市　福田正彦

Uターン家業継いだという便り
拝啓と敬具で終る固い方
野菊摘むかの小説を思いつつ
秋の風葉擦れの音が五線譜に
AIに支配されるというヒト科

西脇市　七反田順子

どんぐりの輪から抜けたい汗をかき
休憩で空気を軽くする会議
襲名で階段昇る梨園の子
朝日より夕日に詩情見るも老い
台風の心配消えて旅支度

南あわじ市　萩原狸月

民生委員解り合う頃お別れに
初めての訪問話盛り上がる
先ず老爺先祖の話から始め
老婆たち才能溢れ多才なり
訪問で教わる事の有難さ

奈良市　阿部紀子

春秋にお互いの無事宅配に
納税のふるさと自慢お裾分け
出張のサンタの地から子のカード
我儘をじっと我慢の孫を褒め
終活を免許返納から始め

奈良市　宇賀史郎

何しても自慢に見える成功者
旧友と自慢もミスも笑いあい
「努力した」の言い訳きかぬプロの道
親と子の立ち位置少しずつ逆に
友達に我が歳を見る同窓会

奈良市　髙橋敬子

フルムーン少し豪華にのんびりと
旅に出て改めて知る地方過疎
抱いた夢半分出来ず古稀を越え
玄人味と褒めれば妻は有頂天
定退し本音の言える同期会

奈良市　辻内げんえい

お節介やめたらただのじいちゃんや
笑ったら何もかも白紙になった
隠し事あってマスクを離せない
誰も居ない隣家にマンジュシャゲが咲き
あかんあかん歩幅だんだん縮こまり

奈良市　山本昌代

言い慣れぬお世辞ポイントずれている
青春を歌う古老の目が燃える
正倉院へ歩く姿もよっこらしょ（クラス会）
巻きスカート天平人もおしゃれ好き
正倉院古文書に読む借用書

奈良市　米田恭昌

剪定にふっと晩秋身に染みる
土瓶蒸しふうっと香りいただける
思い通りなんて不遜なことでしょう
おかげさまこの頃じわり湧いてくる
スニーカーハミング響く花畑

生駒市　飛永ふりこ

お日さまにぎゅうっと抱いてもらう朝
分かち合い苦労話のできる友
心にも足にも鉛友の通夜
にんげんの手本スーパーボランティア
人生の今紅葉のど真ん中

香芝市　大内朝子

洗いものできる息子に嫁の技
ゆるキャラも退屈してるシャッター街
ゆるくなり着ごこちよくて捨てがたい
父送りますます元気母卒寿
ジグゾーパズル完成見ずに父は逝く

香芝市　山下純子

這ってでも襷手渡す悲壮感
責任の重さに耐えた克己心
スポーツで人間修業心技体
研究も現場を知って実を結ぶ
若者に教えられる国未来あり

奈良県　安福和夫

クラス会名札確かめ話し出す
古レコード時代の息吹が聞こえる
また偽装日本ブランド地に墜ちる
事故せぬよう返すか悩む免許証
古寺再建匠の技が今に生き

奈良県　谷川憲

古都は鐘カウントダウンは若き町
昨年の秘密シュレッダーが手伝う
九輪から塔へ染めゆく初日の出
お水取り火の粉無神論の頭上にも
元号が変われど脱皮できぬだろう

奈良県　中原比呂志

お似合いと言われ耐えてる共白髪
燃えなくちゃ燃えて余生を輝かし
残り火を燃やし明日への虹をかけ
八合目も一度締める靴の紐
虫眼鏡見てるサプリのただし書き

奈良県　長谷川崇明

ひからびたこころへひらり舞う紅葉
結び目をゆるめて夫野に放す
愉快な記事捜すメガネがくもり出す
白い記憶埋める夕陽とウォーキング
ゆっくりと初心を咲かすわたし流

奈良県　渡辺富子

また東京へ相田みつをに逢いに行く
氷上の十六歳は超笑顔
今朝もまた気合いを入れて赤い服
長老のパワーが光る村祭り
京都福岡好きな作家を追いかける

岩国市　上村夢香

休刊に追い打ちかける休肝日
牙のない猪もいる永田町
孫からの手紙肴にワンカップ
娘に送る野菜セッセと老いの汗
妻も娘も亥年めでたい年が明け

宇部市　平田実男

キャベツ剥く深層心理晒すまで
陽だまりでふっくらパンの猫二匹
ウォーキング新しい友みなワンコ
本日は猫と語って日が暮れた
過食分ウォーキングが頼りです

下松市　有海静枝

新顔がひとり混じって活性化
川柳道飽きずに続く勝負好き
特選が特効薬の病いなり
潮騒が昔の記憶呼び戻す
ポケットで温めているあなたの手

防府市　坂本加代

上役に噛みついた果て奈落まで
身代りに石落し己欺く
とぼんと落ちゆっくり浮上池の亀
不注意か蹴落されたか這い上れ
どぼんどぼん遊びの渕を子らが跳ぶ

鳥取市　池澤大鯰

カタログを見たら電話の依存症
スーパーのチラシで揃うお正月
「お祈り」も「ざんげ」もしないクリスマス
税上げて異国支援をくり返す
落葉だけ隣家がくれるお裾わけ

鳥取市　奥田由美

おまけかも知れぬ目覚めにする感謝
さわやかに負けたウサギはホラ吹かず
オハヨーと言えばオッスと反抗期
つい古希を忘れる夢の中の僕
いつまでも忘れて欲しくない謙虚

鳥取市　加藤茶人

寺の鐘秋は寂しい音で鳴り
真っ黒い雲から白い雪が降る
子に尽くし孫に尽くして世は移り
言いづらいことから先に言っておく
カーリング出世レースを思い出す

鳥取市　岸本宏章

気さくな家だいつでも門が開けてある
大きな声嘘のつけない人だろう
愚痴みんな湯船が吸ってくれてます
一線を越えてはならぬ嫁姑
中味どうあれ大きな財布持ち歩く

鳥取市　岸本孝子

獣まで地震台風くらくらに
中秋の名月見蕩れ飲み忘れ
真夏日も嫌われ好かれ去って行く
世の課題どんと増えるも未解決
人生にリセットもあり肝に入れ

鳥取市　棚田大

縁側の足踏ミシン亡母の音
爺と婆孫に遊ばれ青色吐息
爺と婆護送船団孫の守り
一歩先常に読んでる孫の知恵
以心伝心やっと夫婦になれました

鳥取市　谷口回春子

鳥取市　永原昌鼓

雨上がり小さな庭に笑顔咲く
無免許で結婚すでに六十年
シャボン玉子どもの声に癒やされる
今もなおテストの夢にうなされる
御馳走を作れど一人味気ない

鳥取市　中村金祥

猪も日々の学習怠らぬ
メル友とすれ違っても知らんぷり
通じ合う話の裏を見極める
徘徊の祖父がマッタケ採ってきた
リセットを庶民は願う消費税

鳥取市　夏目一粋

本当を言われ嬉しい時もある
断捨離で欲望の山高くなる
文武両道究めてみたが古すぎた
息抜きをしたい振り子がよく止まる
秋桜みんなやさしくなっている

鳥取市　平尾菜美

三日癖外れますますダイエット
程々の完成文句ない暮らし
もくもくと歩き完成父の背な
逝くまでと出来上がり待つ夢未来
長らえば孤独ますますああ涙

鳥取市　福西茶子

雨の日はプール晴れたら六千歩
聞き役に徹してポテトチップス食べまくる
バタンピシャン私が何かしましたか
ランチしてきますカップ麺置いてます
膝枕された記憶がありません

鳥取市　前田楓花

平成の終わり一人反省会
あっさりした人だ挨拶だけで済む
赤飯を配り幸せお裾分け
冬の雨雪の報せを連れて来る
無いモノをたくさん持ったライバルだ

鳥取市　山下凱柳

老い二人秋の夜長を持て余す
呆けたかなさっさと言葉でてこない
後期高齢リセットできぬ身が悲し
年齢を誤魔化しできぬ歩き方
今日一日の無事に感謝し床に就く

鳥取市　吉田孔美子

キティちゃん並べ車に乗る巨人
眼の青い高校生よ何故ひとり
嫁は形見分けなど見向きもしない
懐メロも歌詞がプツッと消えるんだ
肯定も否定もしない聞き上手

鳥取市　吉田弘子

一つずつ難問解けて行く月日
収穫と種蒔き競う秋の畑
二番ではダメですと言う蟹と梨
あの時の大きなツヅラ今重荷
難民の列いつどこへ消えるのか

鳥取市　両川無限

冷静に見るとゆがんでいるこの世
夢追人のままで終った私小説
弱点に触れるとダンゴ虫になる
拉致の子を待つ身に限りある時間
コンビ解消しました判を押しました

倉吉市　猪川由美子

見聞きせぬ方が気楽な時もある
消費増税いよいよ来るか迎え撃つ
体内時計リズムの良さに感謝する
遺した保険金子の窮状を救う
首相答弁逃げを作って巧みだね

倉吉市　山中康子

川柳は魔物吸引力がある
励みたい欲の欠けらがある限り
穏便に暮らしたいから黙ります
さっぱりと私捨てたら波静か
百五歳姉愛おしや大往生

米子市　後藤宏之

物産展試食はしごし昼済ます
見つけたヘソクリ氷山の一角
薄いのがばれるうつむくのはやめる
開通はまだか山陰新幹線
大笑いがん細胞を追い払う

米子市　竹村紀の治

初恋は見事一本背負い投げ
湿布貼るときは菩薩の顔になる
毎日が切り取り線を綱渡り
プライドを撲るように苺パフェ
ハロウィンの次はジングルベルが鳴る

米子市　中原章子

紅葉狩り平成最後の紅に会う
寂しさを釣瓶落としに重ねてる
筋力を付けて痛みを軽くする
年配に向いている趣味勇気出る
消費税値上げくる日をじっと待つ

米子市　吉田陽子

子守唄うたった頃ぞやさしさは
骨がありそうUターンには耳貸さぬ
篝目は不変父から引き継いだ
終章は薬絡みの物語
アンダーライン死ぬまで引いているだろう

抱きしめておやりやんちゃな子ほど待つ
弱音吐かぬ亡父サンプルに生きている
睨まれているが真実言い通す
ドライフラワー昔の色に戻りたい
天災がズタズタにした未来地図

鳥取県　石谷美恵子

酷暑中ムシが大量発生した
寒肥したキウイぶらぶら髭を振る
温暖化でも立冬に散る紅葉
民心が離れりゃただの道化師だ
道化師になりたかったのはピカソ

鳥取県　竹信照彦

二泊三日都会に酔った万歩計
ほろ酔いのあたりでタイムスリップす
割り勘で仲良く元気分け合って
講演の未来予想にシュンとする
収穫の秋は二人でラブソング

鳥取県　細田裕花

交渉は太っ腹だが後困る
実年齢よりは若いと思いたい
断捨離もリセットもせずブランドだ
復興は急ピッチです冬が来る
ばあちゃんの料理しっかり舌が知る

鳥取県　山下節子

どうしょうもないと知っててごねている
落ち込んでいるのさ背中丸いだろ
凹んでる心に泥水が溜まる
どこまでが事実で果肉甘いとか
追いかけていたのは美しい誤解

松江市　石橋芳山

歯をくいしばって若さを保ってる
二番線ひとりよがりを捨てに行く
手の平にそっと乗せてるヘソ曲がり
安売りのチラシで今日を生きている
オーロラを見るような人生だった

松江市　藤井寿代

風は秋干柿乾くいい気分
秋日和バザーの品を見て回る
ゴーヤーの苦さたまたま合う時代
だまされる事なし呑気金も無し
成り行きに任せてそっと暮らしてる

松江市　松本知恵子

大空を眺め自戒する今日も
大暴れしそうな山を振り返る
乗り越えた人生泥船の吐息
星空に酔い鳥になったあなた
日本列島逃げる所がありません

松江市　松本文子

出雲市　伊藤玲峰

老いたなあすぐに眠たくなる金魚
クラス会寡婦八割の独身に
深追いをし過ぎて戻れないこの世
掛け違いボタンとひと夜悩みぬく
復興の進まぬままに年新た

雲南市　菅田かつ子

ベテランの笑顔はいつも温かい
踵だけ上げてジャンプをしたつもり
この先を歩く尺度は計れない
何時帰る行かぬ内から聞くあなた
へそくりの置場ど忘れしてしまい

島根県　伊藤寿美

辿り着いた終の住み処はケアハウス
夕陽食べた柿とアカネと鰯雲
言いたいこと少し抑えて同じ舟
闇に目が慣れると見えてくるほんと
身の振り方決めた八十路のモノローグ

岡山市　工藤千代子

新聞を拡げ少うし寒くなる
これも運咲かずに散ったバラ一輪
卓袱台に酒が昔を連れてくる
現住所地図で探している真昼
古稀の線越えると凪いできた日記

岡山市　丹下凱夫

備前富士から頂いているパワー
鬼ノ城を一回りする秋日和
コップ酒薬代わりに飲んでいる
飲み過ぎたらしい自転が止まらない
日曜日そして秋晴れ些事もなし

岡山市　永見心咲

正の字を刻むリハビリ消化表
嘘ついた方が哀しい事もある
こころにもアキレスケンがあるみたい
夢つかむ力加減がむつかしい
秋の野はこんなに広い美術館

岡山市　前田恵美子

同じ事しないで好きな風に乗る
重い荷は夫に半分差し上げる
川柳のバトン渡され度胸だけ
四万の電子辞書買い四苦八苦
君の名を尋ねる私認知症

笠岡市　藤井智史

口ずさむ過去はフルーツポンチです
面白く生きて余白を埋めていく
名器へと育つひたすら土ひねり
冒険じゃなくなる冒険のしすぎ
堂々と進もう二回目のはたち

岡山県　髙岡茂子

目覚しが句作りせよと鳴りひびく
アルコール飲めたらいい句作れそう
御近所と子の世話になり日を過す
テントの中頬よせ合って菊の花
何気無く食べてる和食世界遺産

岡山県　田中恵

黄昏のわたしが持っている美学
被災地に希望の花芽付けている
ダンボール箱が一役買って出る
本腰で命を守る割烹着
アンテナは一寸高めに茄子の花

広島市　岸本清

エコ植樹いつかは海の恋人に
野菜市作った人の顔も売り
心臓に障らぬほどの恋心
はき心地夫婦で試す紙おむつ
政界も三手ぐらいは先を読め

竹原市　石原淑子

老いの身の猪突猛進試みる
のみごろのお茶と羊羹そっとおく
大人はうそつき大ブレークに拍手
袋詰め放題チューリップの彩
良薬かも九十五パーセントのカカオ

竹原市　岩本笑子

山また山風また風生きる力をどうか
祈りとは別　影法師が笑う
椿落つそのいさぎよさ見てた
耐えて咲く花になろうと草を抜く
四季あれど三百六十五日薬

三原市　鴨田昭紀

脇役が輝き過ぎている景色
潮満ちて来るドラマチックな出会い
重要な椅子にはＩＡが座る
スマイルスマイル造花の使命感
放物線を描くわたしの余命表

東かがわ市　川崎ひかり

幼から老誰でも似合うＶサイン
耳底に無理はするなと亡夫の声
無農薬虫も一緒に茹であがる
句碑囲み和気藹藹の秋日和
逝って三年首輪未だに捨てられぬ

松山市　古手川光

ロボットは人化　人はロボット化
おめでたい僕が言ってる御目出度う
慰霊先違う政治家両陛下
男尊女卑ここにも有った医学部
渋ちんも孫のためならハイどうぞ

松山市　宮尾　みのり

受験戦争真っ只中の孫と祖母
少年との会話へ記憶呼戻す
現役の日々で余生に遠く居る
食欲はまだある気弱にはなれず
何十年も続く友あり長電話

大洲市　中居善信

人並みに目眩も起こす動悸する
長男の自覚ときどき電話くる
綿入りの防寒コート霜の月
来年の卯月あたりで深呼吸
おでん屋でときどき出会う顔見知り

西予市　黒田茂代

下弦の月ふっと行く末を思う
朝早い分だけ休むのも早い
懐古趣味満たしてくれるわが古家
気兼ねなく何でも書ける友一人
譲られた席へ素直にありがとう

西予市　西田美恵子

プラス志向元来母は強いもの
境界線の向こうに逢いたい人がいる
仕舞風呂これが私の解毒剤
不完全燃焼あなたへの想い
低温火傷段々君が好きになる

高知市　小澤幸泉

「共謀法」世間話もできません
老人は長生きします死にません
父母の許へ帰ろう流れ星
楽しかったあの頃二人若すぎた
好きですと言わせたことが運の尽き

土佐清水市　辻内次根

日向ぼこ生きる理由も考えて
どの様に描いても風のコスモスに
一人分だけでこんなに嵩がある
平凡な生き方庭に菊が咲く
秋冷の顔を洗って朝の山

唐津市　坂本蜂朗

亡父母につくづく感謝妻傘寿
亡き父母の苦労をしのぶ老いの坂
今日もまた度忘れ妻と笑いあう
無我夢中馳け足腰の悲鳴聞く
老化した頭が意味もなく切れる

唐津市　山口高明

黙祷へ鐘鳴り渡る慰霊祭
猿まねの好きな列島ハロウィーン
観光の名所自殺の名所とか
死々々々死書き列ねても無い死ぬ気
傷心を癒やす一刻猫カフェ

思考停止です台風の御前
平成が終る人生八合目
柳川路一人吟行決め込んで
山頂きに我一人天仰ぐ
ピラルクー顔の新幹線に乗る

熊本市　杉野羅天

日進月歩記憶が鈍る昨日今日
クルーズのイルカと競争面白い
半額に惹かれて駄菓子懐かしい
嵐予報老いの終日籠の鳥
秋まつり抱いてる説を夫々に

熊本県　岩切康子

手を抜いた者から暮れるグラウンド
ため息の合間にそっと鳴る背骨
ピリオドを打つスペースに置くコンマ
集まってペットボトルのふたを積む
コンビニのお茶は苦いと思う猫

沖縄県　森山文切

あぁストーブを消したかなひき返す
あの世でも一緒に暮らそ亡夫の文
席暖め待っているよと夫言う
夕焼けのような最期が望みだが
まだ熟女シワも脂肪も気にかかる

北九州市　小松紀子

確実な犠打で繋いだ燻し銀
井土塀の政治家もいたそのむかし
一強の影で若芽が委縮する
無農薬野菜と触れてお裾分け
さあ来いとスタッドレスの神無月

札幌市　小沢淳

そろそろかまだまだか読む鼻メガネ
淋しさは心の若さ出ぬ鏡
清濁をあわせて生きる人の味
撫を抱くぶなの命の音をきく
ポロリひと粒ピエロの泪でかくなる

男鹿市　伊藤のぶよし

年金に期末手当てが出ぬものか
無人駅立てば私に存在感
酒が吐く自分も知らぬ本音ある
十三夜何を悩むかキリギリス
りんごもぐ日暮れ忘れた老夫婦

弘前市　浅田隆樹

この服を買えばモデルになれますか
手招きをする鬼からは遠ざかる
りんごがぶり明日の勇気をもらいます
旅みやげぐい呑みひとつそれでいい
深夜便記憶にないという目覚め

弘前市　稲見則彦

火の用心台所をばＩＨに
そちこちをリフォームしては老い支度
君と行く温泉めぐり旅も良し
釣瓶落とし夜の長さを持て余す
孤独饒舌補聴器すれば直るなり

弘前市　今　愁女

老い方の手本にしたい母百寿
八方美人広げた羽をたためない
犬猿の仲でも義理は人の道
階段上り今朝の元気を確かめる
忖度や一歩違えば敵味方

弘前市　髙橋洋子

古都の四季には修飾語がいらぬ
かな文字の雅がひかる古今和歌
何年磨けば光るのだろうかボク
かすかな風で風葬の後始末
激震が壊した仏像の涙

青森県(故)　松山芳生

念入りにブレーキチェックする亥年
ポチ袋先ず年金の意見聞き
意気込みはいつも変わらぬ多作多捨
本気です内ポケットにある決意
晩成目指し骨身惜しまず

塩竈市　木田比呂朗

生けるもの冬へとそれぞれの覚悟
股関節が膝の痛みをなぐさめる
親子って難しいねと子のせりふ
いつからか子はどちらにも味方せず
文房具並べて老いの日は足らず

東京都　川本真理子

ムチャクチャやがなアチャコなつかし昭和の灯
領事館の絶叫世界一周す
ニュージーランド首相の産休拍手され
とりあえず会議室におむつ替え
「日日是好日」語り終わった希林さん

東京都　まえでとよこ

哲学者にはなれず哲学の道
体調をチェックしている散歩道
降りる時カップルと知るスマホ族
異次元のスマホの群れに迷い込む
甘酸っぱい昭和のリンゴ青春譜

八王子市　川名洋子

風邪ひいて御代りをする卵酒
満天の星を味方に千鳥足
スマートな老いへ気取らぬ自然体
いたわりの言葉はないが優しい目
ふる里の歌へそれぞれある想い

横浜市　菊地政勝

さいたま市　星野育子

優先は原発よりも太陽光
ネクタイをほめて本音は言わぬまま
気がつけばボーと生きてて叱られそう
一番もビリも嫌で微温湯好き
突然にバラがハラハラ昼下り

朝霞市　前田洋子

あの人を遠隔操作してみたい
皆さんの御蔭をたまに忘れます
ペットショップ幼児虐待ふと思う
真っ当で必死に民は生きている
カッパ横丁馴染の店が閉まる報

富山市　島ひかる

「北の道程」秋の夜長を豊かにす
晴れおとこに付いて行きます晴れ女
詫びながら子持ち鮎喰う旅の宿
一対の湯呑が弾む外は雨
まわりから生き甲斐にされ出る元気

可児市　板山まみ子

寝るほどはない風邪ひきを持て余す
夢よりも今日一日をどう生きる
老いて来てガーデニングも面倒に
さりげなくスマホで調べスマートに
ワイドショー見て昼寝して日が暮れる

犬山市　金子美千代

友達のグループ毎に違う色
一番に秋をキャッチの指の荒れ
言われてみれば不思議ボーと生きてきた
私にも出来たヒップホップダンス
重箱の隅つついても句が出来ず

犬山市　関本かつ子

限られた時間を意識し始める
お財布の小銭がどうも出しにくい
ご近所もお久し振りのご挨拶
七十五背筋伸ばせと父の声
お喋りの為にあるのかバスツアー

愛知県　早川遡行

行って見よう何か貰えるかも知れぬ
握手だけでは分からない腹のうち
腕の立つ職人やから頑固なり
今までは飛び越えていた水たまり
曇りのち晴れを信じた握り飯

第170回 大阪川柳の会

日時　**2月5日**（火）午後1時開場・午後2時締切
会場　大阪市北区梅田　駅前第二ビル5階
大阪市立総合生涯学習センター　第一研修室
宿題　（各題2句）
△「猫」　未盛ひかる　選　△「安　心」岩田　明子　選
△「理　由」居谷真理子　選　△「普　通」森中惠美子　選
会費　1000円　**欠席投句**　2月4日まで　会員に限る
会員募集　年会費千円　会報を年6回奇数月にお届けします。
〒532−0025　大阪市淀川区新北野1−3−4−706
本田　智彦　宛

（前月分　小澤幸泉さん、熊代菜月さんの句は61頁にあります。）

自選集

小島蘭幸

振り向いているのは老いた猪だ
癌告知母は聞こえてないようだ
会うたびに小遣いくれる母になる
母笑う癌はすすんでないようだ
オリンピックを見ようよ母よ生きなさい

斉藤劦

子ら集い未来を築く森づくり
哲学の小径だんだん深くなる
薔薇の棘ちくちく野心覗かせる
千の絵馬千のドラマを抱いている
りんご「金星」飾って新春の部屋とする

新家完司

高野山日帰りできるまだ元気
スキヤキで祝う結婚五十年
都会は百ワット里は十ワット
灯を消すと離れ小島になる庵
秋風がパッチを穿けと言っている

高瀬霜石

アウィーナに行きたし大阪は遠し
初陣は鬼遊・正坊ありし頃
飲んで寝て起きたら着いてた夜汽車
今は昔「寝台特急日本海」
弘前↕大阪　一千四、五百キロの旅

竹治ちかし

核ボタン入れた鞄を持ち歩く
良いことは実力悪いことは運
もう駄目と言いつつ集う人元気
まだ酒が飲める程度の忙しさ
五輪まで万博までと生かされる

津守柳伸

念入りの掃除うながす秋の風
整理整頓またいちからの探し物
絵手紙のリンゴ　エールが迸る
ゴミの日は群れるカラスの都市砂漠
一病を抱えて集う趣味仲間

黄菊白菊みんなと逢える一周忌
息切れの上り転びなや下り坂
広大な夜の片隅ひとり寝る
茶柱は立ったが一日なにもなし
あとわずか　なにも起こらぬこと祈る

都倉求芽

宇宙船戻りし冬の月冴えて
埋もれ火に疑うことの悲しくて
師を悼む暖冬異変昨日今日
三尺の雪の下なる大根掘る
寒紅の色鮮やかに嘘をいう

土橋螢

新年も以下同文であればいい
会いたい人ばかりから来る年賀状
正直に傘寿を映す初鏡
傘寿坂ネジ少しずつ捲きながら
初読書山口瞳エッセイ集

西出楓楽

口先で恩師と言うと手を振られ
恩師みな聖人君子でありにしか
恩師だがソリの合わない人もいる
カネ借りに行くと叱ったから恩師
恩師です賀状の返事くれたから

仁部四郎

新元号に余生任せて生きていく
檸檬の字やっと書けます薫風師
早世の母の三倍生きました
生かされたら九十歳のダイヤ婚
天国へこの世続くと皆信じ

前たもつ

故郷を出る春大根に見送られ
身辺を再出発の風が押す
ありがとう支えてもらう老いの椅子
物忘れしながらおんぼらと生きる
日々出逢う小さな乱を呑んでいる

政岡日枝子

それにしてもお詫び会見多すぎる
懸案を詰めると重くなる鞄
見上げると雪はそんなに白くない
飼い主には愛犬他人には猛犬
来賓のリボンは大きすぎないか

三宅保州

マドンナの足もふらつく水溜り
手作りのカバンで花の世を渡る
引き際の美学背中が美しい
謎めいた微笑が謎を深くする
告白ない秋は無言の長い夜

宮西弥生

鶴田遠野さんを悼む

何故急ぐ僕より若い遠野さん
大阪と津軽むすんだ太い糸
天も地も時には酷いことをする
悲しくて涙で詰まる電話口
悔しくて無念で神に八つ当たり

福士慕情

止められても晩酌だけは止められぬ
晩酌と言うてもたった五勺だけ
五勺の酒無いと食欲わいてこぬ
五勺の酒ちびり味わいながら飲む
近頃は五勺の酒でほろほろり

村上玄也

竜巻が通ったような脳回路
ピンと来る事など頓に無くなった
年寄りに枯れ葉は何の意味も無い
北上をすると大きくなる目玉
ちょっぴりの快感カメムシの捕獲

森山盛桜

振替える

忘れ物の多いセーラー服でした
大切なものも忘れて来たような
直そうと思う明日から　いいえ今から
去るときは必ずあとを振返る
当分は死なぬ予定だ　それまでに

八木千代

すご六の上がり近づく我が余生
元旦晴れと書きたいのです初日記
スマホ操る若い若いと暗示かけ
主婦歴は六十年の皿洗う
句読点ばかり打ってる八十路坂

山本希久子

手を洗い武運長久五十鈴川
アッハッハ生きておりますアッハッハ
火葬場へ行って帰って来たカラス
いつも母オールドパーを飲んでいる
おめでとう認知症になりました

板尾岳人

ライオンのたてがみにある孤独感
本棚の隅にぽつんと亡父がいる
蹲いてばかり善人なんだろう
何もせぬ方が案外うまく行く
気付かなかった生真面目という汚点

川上大輪

小春日のちょっとそこまでご一緒に
腕組みをしたまま冬の入口に
刈り取ってくださいキミが蒔いた種
広っぱで母が来るまで待っていた
あほやなあ夢を信じて翔ぶなんて

木本朱夏

句集の森



『われも旅ゆく一人なり』

波多野（はたの）　五楽庵（ごらくあん）

十本の指に火の過去水の過去
月夜には月夜の顔になる佛
そして花火の音が静かになってゆく
目を閉じて無明の闇に耐えている
コーヒーの波に溺れる挫折感
みんな捨てみんな拾って孤独なり
咳はもう止まりましたか冬椿
母の忌も桔梗の色も暮れなずむ
雪しんしん恨みが少しずつ消える
自転車でギーコギーコと帰るのか
冬の絵を破って冬を忘れたい
日は西に祭ばやしは散りぢりに
その母もそのまた母も雪まみれ
いつの日か雪に抱かれて眠りたし
癌告知　われも旅ゆく一人なり

（平成十九年六月三日）

温故知新

川柳集『蕗の薹』小出智子から

（真夜中の振子　昭和45年～55年）

花鋏この一枝に是非もなし
幸せな女にふだん着が似合う
男の隙はバックミラーを覗くとき
晩秋のわが影路を先立てり
豆腐屋に水は冷たきものならず
草を踏む緋の絨緞にまさりけり
祖父の忌に流儀正しく菊活ける
気に入らぬ髪で一日落ち着かず
塩昆布の香りが満ちて母が居る
病床へ足差し入れて子が眠り
退院へ師走俄にやってくる
病以後諦めに似てものを縫う
母の瞳にこの母鳥も苦労性
手乗り文鳥部屋に放して旅帰り
真夜中の振子は遠い日を刻む
空瓶が溜って秋が深くなる
花活けて旅の前夜を整える



西出楓楽選

突然の電話が破る予定表
愛犬に心読まれてあしらわれ
別腹に収めた分でなるメタボ
切れ者と言われた人が黄昏れる
非正規の咎を社会になすりつけ
安住の地は奥方の尻の下

宝塚市　岸田万彩

手探りで生きた命へ手を合わす
のどかだな訛りに溶ける道の駅
振り過ぎた尻尾が笑う身の不覚
注連縄へスズメが春を連れて来る
ちっぽけなプライドを捨て風になる
新元号デビュー待ってる五月風

伊丹市　延寿庵野鶴

母の手にかかると弾む毛糸玉
食欲の秋酒の秋とは言わず
百歳まで使う鍋よく磨き上げ

岡山県　藤澤照代

無冠でも川柳杖に老いを行く
産声を欲しがっている過疎の村
鍋囲む家族の笑顔煮こぼれる

堺市　大和峯二

カジノから見える景色は離婚劇
法治国やってることは無法国
ジュゴンから聞く耳もてよと官邸へ
川柳で生きる力と知恵もらう
口利きと舌禍で透ける傲慢さ
ウソ政治顔をのぞかすもりとかけ

倉吉市　大羽雄大

軽量の服に着替えて検診日
ショーウインドー背の曲がりを気づかせる
酌み交す男楽しいもみじ狩り
もみじ狩り過疎の村では野菜市
ヘッドホン弾むロックが抜いて行く
ゴキブリの一匹に妻呼んでいる

福岡県　本田さくら

おでん煮る野菜ぐつぐつ冬を煮る
バランスボールわたしの体遊ばせる
来る春を桜並木が約束し
青春をさがしにちょっと出かけます
カレンダーやせて冬へと小走りで
青空に飛行機雲が落書し

米子市　黒田紀美江

古希の坂通してくれと神だのみ
雨の音やさしく降って昼寝する
アルバムは終活せずに残しとく
デコボコの顔にファンデを厚く塗り
デコボコの話も通じ老い二人
一枚の紙が人生決めてゆき

和歌山市　佐藤まき

友からの絵手紙怠惰消す魔法
読書好き健康寿命延ばすとか
マンガ禁止守って育ち後遺症
公報にマンガ却って馴染めない
破鍋に綴蓋それも心地良い
餅祭り飛び入る仲間秋あかね

和歌山市　北原昭枝

キラキラと大海原にある未来
わたしにもあった未知への旅心
頼りない自分を信じ闊歩する
じっくりと話をきいて和む酒
マンネリの脳へ効かせる塩胡椒
不器用に生きて一本道があり

和歌山市　定松宏枝

すっきりと目覚めた朝はよくしゃべる
寝食を忘れ読み切るサスペンス
家事終えたわたし癒してくれる月
何時か履くせっせと磨くハイヒール
戻ってもいいから嫁に行けと言う
小数点打って人生立ち止る

篠山市　藤井美智子

孫娘伴侶と結ぶ赤い糸
初孫の結婚式へ感無量
祝福の輪の中二人いい笑顔
ばあちゃんも着物姿で披露宴
家族の和会話へスマホ邪魔をする
秋冷へ夏日恋しい老い気まま

米子市　伊塚美枝子

衣替え秋の衣をまとう山
誘惑に負けて手にした甘い菓子
夜寒には鍋と熱燗出番です
デパートのご当地フェアー旅気分
トリックは無いと言うけど何かある
我が家には諭吉の寝床無いらしい

瀬戸内市　宮宅比佐恵

疲れても夢を捨てたら齢は倍
咲く花に安らぎもらう果報者
摘まないできっと大樹になる芽です
お喋りが好きで扉は開けてます
人間の欲の付けきた温暖化

広島市　松尾信彦

くそ真面目いつしか枠を外れてる
どん底を脱したらしい増す笑顔
均等法ウーマンリブが物足りず
若者が造語で辞書を厚くする
誉められて苦労の汗がすぐ乾く

府中市　岸田武

来た道は通りたくない帰り道
頭下げるつもりだ恐いものはない
「壇蜜」が好きだと妻に言ってある
炎立つ草間彌生の眼が恐い
生き様は好い気なものよ山頭火

三原市　笹重耕三

アナログとデジタル噛み合わぬ会話
机上の議論に説得力がない
栄転の縮図上座へ酌をする
秋のグルメと睨み合うダイエット
フルムーン一緒について来る薬

三次市　伊藤寿子

弁慶のような男が急死した
朝夢に亡き人たちが出た不思議
一寸先はわからないのが人生か
人生に悔いなしと亡姉言ってたな
悔いだらけのわたし生命線なでる

山口市　青木隆子

恋をして女子力上げた良しとする
帰り道彼に会うかも遠回り
マイペース丸く生きてる母卒寿
旅行土産もう奏でないオルゴール
繰り返し見た場所にある捜し物

山口市　中前幸子

ずり落ちそうな仮面で歩く二十五時
切り取り線のあたりで自分見失う
鳩の棲む街こころ渇いた人集う
髪切って明日の風を身にまとう
虚勢疲れ無風地帯で息を吐く

阿南市　小畑定弘

地図のない駅で貴女を待ってます
半径を少し伸ばせば会える人
黒枠の君を口説いたことがある
忖度のできぬ男と呑んでいる
外は雨　今日は活字の虫となる

今治市　渡邊伊津志

育めば答えてくれる花である
揉み手する笑顔の中にある打算
微笑みを忘れていたら四面楚歌
目と耳と春の息吹きを待っている
目と指のビームさながら老い二人

大洲市　花岡順子

カレンダーあと一枚になるさむさ
家長ですチャンネル権は持たぬけど
洗濯も掃除もしない手のモデル
介護不安胸に刻んでウォーキング
真っ直ぐに行くトンネルの深い闇

西予市　井関はるえ

正論を吐いて皮一枚の首
研ぎすます五感あのころ若かった
手鏡へくっきり古希の顔がある
すき焼きの日はぶんぶんと換気扇
宝クジ外れ豪雨の大当り

佐賀県　真島久美子

掴むから離さなければならぬ恋
体温を分かつ小銭の軽さなど
どんぐりは私の胸で冬を越す
凍りつくような理由を投げ返す
ビターチョコやっといい感じの大人

千葉県　廣瀬良磨

暑いのも寒いのもいや春が好き
ハロウィンに日本のお化け負けている
百までは生きてやろうと決めている
痩せたらと体重計に叱られる
ゆるゆるとしている暇に冬が来る

東京都　髙岡弥生

環境で変わってしまう子の育ち
成長し大人への道登ってる
重箱の隅をつついて嫌われる
子供から感動もらう運動会
もうすぐで無くなりそうなかすがいが

名古屋市　山本三樹夫

飛ばない蝶山梔子の葉を食べ尽す
顔見世の新内閣が脆さ見せ
直球で投げた言葉に返事なく
イエスマン重宝がられ捨てられる
9条は避けて通れぬ重い問い

江南市　脇田雅美

吊るし柿百個吊るして日日一個
どこに居ても私を観てるお月さま
太鼓の音腸に響いて活発化
上向きの人生楽し振り向かず
全力を尽くせばきっと良い知らせ

豊橋市　西　郷　紀美代

玄関を掃除して待つ福の神
年上の夫見て危惧する老化
クヨクヨと考えぬよう作る用
一族が良くも悪くも似て困る
運転にイエローカード子から出る

豊橋市　高　柳　閑　雲

忘れたいページあちこち人生譜
こっそりと飲んでも顔に書いてある
三分の遅れ許されない日本
レコードの針が昭和を奏でてる
たっぷりの嘘紙風船で飛ばす

豊橋市　藤　田　千　休

オフタイム人間らしさ取り戻す
否定から妻の話は始まりぬ
イエス・ノーこれが私の語学力
整形の鼻を天狗に嗤われる
壁際のゴミをルンバは見逃さぬ

大阪市　柴　本　ばっは

まずお墓へ断捨離詫びに行きました
断捨離は情けかけては出来ません
娘と嫁に断捨離任せ容赦なく
懐刀が出て来た祖母の古箪笥
隠しごと入れて忘れていた箪笥

大阪市　森　廣　子

明日の風にふわり希望も乗せて見る
台本通り策に嵌まって戻れない
ポケットの底で言い訳澱み出す
玉ネギ炒め幸せになって来る
平成の襞に隠れている涙

大阪市　森　田　遊　子

古希過ぎてばったり母に会う鏡
カラスにもソプラノがいて今朝は晴れ
便利使いされてるうちが華だろう
手の触れる距離には居たい平行線
避難癖あってパズルが埋まらない

泉大津市　助　川　和　美

迷彩服ファッションとして子らが着る
秋刀魚焼き新米を炊き心満つ
父さんの何処が好きなん子が訊ね
買うつもりないのに試食だけはする
孫達は宅配御節よりお肉

貝塚市　吉　道　あかね

小春日に一気に済ます冬支度
また一本歯を失った古稀の顔
力はないが体当りならまだ出来る
人間の匂いがしてる加齢臭
平凡な昨日と同じ今日でした

病床の水より淡き母の笑み
病気など他人事だと秋の天
しあわせな時には出来た逆上がり
親不孝責めることなく母は逝く
トンネルを抜けるとわたしだけの風

門真市　坂本星雨

話し方妙に優しく怖くなる
感心をしながら聞いているイヤミ
目と耳を塞ぎ心の声を聞く
お互いのベスト引き出す好ゲーム
カフェインゼロのゆるい話に眠くなる

河内長野市　原熊知津子

時季来れば蝉は泣きやみ葉は黄ばむ
ガタガタのパーツに薬の餌をやり
キャンセル代惜しんで哀れ雨ゴルフ
酒強い船に酔うとは予想外
今秋も松茸なしで過ぎて行く

堺市　古川光雄

連合いと二人三脚趣味に生き
明日信じ一歩一歩のリハビリに
マイペース呪文のように言い聞かせ
薬飲みやっと維持する骨密度
デザートの薬数える朝の膳

豊中市　荒木郁子

水割りを少し濃くした通夜の席
いそいそと身なり整え病院へ
落込んだ時は聞きたい友の声
少年のように臆病老いの恋
酒カスで母はほろ酔いよく喋る

豊中市　貝塚正子

スイートルーム一人で泊るには不向き
他人に厳しく自分に甘く生きていく
被災地に尾畠春夫は立ち向かう
水たまりの水へこんだ所だけが好き
春夏秋冬やがては死語になる日本

豊中市　木藤こみつ

金木犀香りのシャワー三日ほど
青い目の助っ人担ぐ村神輿
輪をかけて話す話に花が咲く
万歩計持ってる時は遠まわり
落語会時差の笑いが邪魔になる

豊中市　齋藤奈津子

大根は主役脇役酒のあて
パッキング甘くてもれる一人言
夕焼けに反省文を書かされる
丹田に力を込めて深呼吸
月明かり独り占めして急ぎ足

寝屋川市　川本信子

羽曳野市　磯本洋一

喜寿迎え角が取れずに敵つくる
ペーパーレス家族間でも今スマホ
長い坂原発事故に月日経る
78歳これからだよと尾畠さん
つつましい生活なれど妻笑顔

神戸市　大頭としお

川柳塔友の名探しページ繰る
駅弁の米粒拾う戦中派
粗大ゴミ布団の染みの物語
抗癌剤きっぱり拒否はしたけれど
寝たきりを恐れて今朝も足に鞭

神戸市　田本古鈴

人の群れ働く人と遊ぶ人
酒が勝ち私が負けた夜もある
二回落ち下り階段足すくむ
人生の無聊に嘆く時もあり
公園に人待ち顔の鳩がいる

神戸市　敏森廣光

顔洗いさて今日は何しようかな
介護施設母にっこりに救われる
売り切れと聞けばよけいに欲しくなる
最後まで覚えていたいマイホーム
待合室マスク咳から遠ざかる

神戸市　米田利恵子

紅葉寺すこうし派手な靴で行く
元気らし父のスニーカーにも泥
トップの座心地良いのも三日ほど
逆走をしていませんか曲がり角
母のもとに毎日運ぶ良いニュース

尼崎市　清水久美子

天然のキャラが大好き癒される
自家製の三ツ葉が自慢茶碗蒸し
句会日が先に居座る新手帳
去年とは違う抱負を抱く亥年
私の初夢に出たトラのV

加西市　山端なつみ

停電し江戸の暮しで過ごす日々
土瓶蒸し容器買ったがエリンギで
お清めと言って男は酒を飲む
雲間から亡父が見に来る稲の出来
農家の不思議豊作なのに儲からん

篠山市　久保木剛

何しても気分すっきり空の青
肩車子が鈴鳴らす秋まつり
のびのびと育ちどの子も家を出る
なあ妻よ呑めれば会話はずむのに
酒の味知らない妻はかわいそう

篠山市　澤　良子

カーナビが導き一路すいすいと
孫が増え幸せ家族夕の膳
「賛成」と言ってはみたが本音はね
「お粗末で」もらった土産自信作
親の背を見せる程ではないけれど

三田市　大西重男

寝ていたいけれど膀胱我慢せず
縫い糸が針の穴から嫌われる
貸したこと忘れず借りはすぐ忘れ
認知症予備軍入りは断固拒否
ひとり者話し相手を探す日々

三田市　九村義徳

日の丸を英語で言うと何と言う
親父ギャグあははと笑い上司立て
消しゴムで消したい過去がたんとある
消しゴムがいくつあっても消せぬ過去
鉛筆とノートがあればおとなしい

三田市　辻　開子

食の秋あれもこれもと口に入れ
脳トレのクイズ解けたら活気づく
いただいた旬を隣に御裾分け
休日の児の元気声懐かしい
したい事たくさんあるがまず休養

三田市　松本ゆかり

すぐに泣く男はやっぱり駄目ですか
プラン無く波風立たず日々過ぎる
にっこりと顔施で人を癒します
無理強いた手足の悲鳴そっと撫で
私より年下だった希林さん

宝塚市　太田としお

国と国隣り近所は御し難し
久しぶり騒がしくなる消費税
おめでとういぶき2号が成功す
反対の反対なんて見苦しい
お金では解決出来ぬこと多し

奈良市　加藤江里子

人の波孤独をさらに募らせる
何気ない日々の暮らしが思い出に
不思議にもエプロン付けて出る元気
夢の中いつも自分が主人公
肩書きは主婦なんですと胸を張る

和歌山県　森下よりこ

メモ持って一週間の買物に
韓国の歴史認識変らない
どうなってゆくかアメリカトランプ氏
野菜育てて花を育てて秋深む
つわぶきの黄色が秋をつつましく

倉吉市　堀　かずこ

陽がのぼる今日もいい事ありそうだ
咲き誇る花が幸せつれてくる
きらきらと夜空に光る流れ星
窓の外雨がしとしと泣いている
苦労したあとに幸せきっとくる

倉吉市　若松由紀子

未来図を描いた昔に戻れない
線香の煙目にしむ兄が逝く
吉報より訃報の方が多くなり
願い事沢山ありて流れ星
子の進路地図にない道行きたがる

米子市　生田和之

猛暑から秋寒までの早さかな
食って寝て食って寝るうち惚けて来る
旅行より昼寝が好きになる余生
ママチャリと歩きスマホに近寄らず
家を出る暫し思案は杖の有無

米子市　戸田真理子

新米をスズメの群れも食べ比べ
炊きたての新米どうぞお亡母さん
ごめんねが言えて青空澄み渡り
通販のＣＭ電話したくなり
幸せの数だけ増える笑いジワ

米子市　野川宣子

縦結び男料理の割烹着
運まんは努力の人について来る
勝負運守る攻めるの駆け引きだ
くじ運がないのはきっと欲の所為
行きたい場所自由に行けるありがたや

鳥取県　門村幸子

とっておきの時間を持って独り住む
風呂焚きと煙突掃除父母偲ぶ
免許返上すればたちまち困る過疎
挨拶のモデル地区です子等元気
万札が煙のように消える日々

鳥取県　西谷悦子

青空へ心地良さそう白い雲
わたくしの存在を問う席がある
わたくしも海も満ち干きしています
跨いでもいいからどうぞ踏まないで
いたわりの言葉に胸の霧晴れる

鳥取県　橋本整

がむしゃらに生きた昭和が夢にでる
柔らかく弾んで老いを生きている
あの世から早くおいでと妻が呼ぶ
卒寿にもなれば白寿の欲がでる
目の前に転がっている五七五

一粒のめしも残すな親父の目
新米の便り古里近くなる
さあ選挙コメツキバッタ街に立つ
初詣で亥年呼び込む大太鼓

鳥取市　上山一平

人間が好き泉のように愛が沸く
帰る路確かめ回り道をする
蟹じゃなし真っ直ぐ歩くことに決め
ユーモアのひとつふたつを青空へ

鳥取市　大前安子

初対面長所短所を探り合う
天国の手前の駅で途中下車
起きる寝る妻とは違う時間帯
朝ぼらけ追加惰眠の至福感

鳥取市　副井裕

回復の兆しオシャレがしたくなり
私をリセットできるのは貴方
宝船信じて今日も舵握る
ぎりぎりの線まで譲り和解する

鳥取市　田賀八千代

当たり前なんて言えない事ばかり
言い訳の海を泳いで疲れ果て
耕した畑の水はよく浸みる
薄れつつある記憶にも青い春

鳥取市　山野すみれ

あせらずにチャンス待ってて半世紀
思い切り泣いてみたいと一人旅
開発が進み猪ホームレス
産み終えた娘の顔は世界一

倉吉市　岡崎美知江

大山が優雅に見える山陰道
窓を開け今日も元気に四股を踏む
窓全開今日も頑張れ脳と足
招かれて儲け話に花咲かす

倉吉市　田中紀美恵

お隣も二階の窓に柿のれん
霜月の水場仕事に手が引ける
物干しに並び亀虫日向ぼこ
空家増え無断拝借野良の猫

倉吉市　宮田風露

トランプよ下院赤点エリただせ
松葉ガニ二〇〇万とはオッタマゲ
バッグ置きゃ鹿がのぞいて紙を食う
朝霧の奥には今日がかくれてる

境港市　中井虎尾

秋深し夫婦の時間まったりと
孫歌う「たき火」の意味も知らぬまま
達人の今さらに見る底力
大会に出るたび意欲萎えるペン

米子市　池田美穂

美人に見える鏡があれば買いに行く
言う事を聞かぬ五体の機嫌とる
電線で旅の話か渡り鳥
一本の電話で勇気くれた友

米子市　川本美津子

朝御飯まだかと昼寝目をさます
快気祝配って疲れどっと出る
入院中じいは施設へおあずかり
クラス会一人ずつ減る友の顔

米子市　見山温子

細くても親子の糸は強かった
細細と暮して生きて今がある
唱えればぽっかり雲に母が笑む
念仏を唱え逝く日の近くなり

鳥取県　飯野菖子

元号が変わる楽しみ一つある
天皇夫婦仲睦まじさいつ迄も
あの世には行きたくないが亡夫恋う
一人寝の寂しさ寒さどう生きる

鳥取県　下田茂登子

犬散歩毎日つづけ足鍛え
長柄傘杖になるから持ち歩く
寒い朝犬の散歩に泣きたいよ
時間には必ず起きて吠える朝

鳥取県　橋谷静江

過去の恩いまにまとめて返します
未婚者の香りプンプン罪なひと
写真にはにこやかな顔写している
弥生びと恋の狼煙も上げていた

松江市　相見柳歩

越えられぬ悲しみじっと抱いている
朝ドラが無くてつまらぬ日曜日
投資信託不調か社員顔見せぬ
元号はああだこうだと飲んでいる

松江市　中筋弘充

俎板に庖丁使えありがたい
傘寿過ぎ薬のいらぬありがたさ
朝晩に自分に感謝言ってます
この皺は亡母に似てると鏡見て

松江市　山根邦代

夢のせて夜明けの海に陽が昇る
夢追って心の振り子揺るがない
咲かせたい世直しの花日本中
タツノリが古巣に戻り指揮をとる

出雲市　黒目ひでお

どっこいしょ一緒に言ってまた会おう
空見上げ里の昔を思い出し
とれたての幸はまっすぐ仏様
あちこちで姑が残した花が咲き

雲南市　永見安子

日本海白い牙剥く冬の貌
物忘れしてもどうにかなるあした
俺よりも疲れた影が先に寝る
なまはげがセクハラになる錯誤感

島根県　原　徳利

吊し柿祖母を偲んだ秋すだれ
私と稲穂を包む秋の風
単語だけつないで話す老夫婦
飽食の限りをつくす秋味覚

岡山市　大石洋子

本物だ亀の歩きで追うている
動かない山にいらいら押してみる
星も出て眠りについたオモチャ箱
振り向くと前へ進めと夢が押す

笠岡市　小野美那子

君だけと入る墓碑なら建てました
三つ編みの君と出会って半世紀
怖いのは時々はずす角隠し
三年は先に逝きたい賽河原

岡山県　大杉敏夫

日だまりを探して歩く散歩道
曇天の朝はなんにもやる気出ず
ままならぬ目方増えぬと嘆く人
鯉跳ねず来季に持ち越す日本一

広島市　田桑恵子

美男美女より味のある人が好き
五十年満足妻の味加減
傘寿前粗大ゴミだと言わせない
川柳や新聞声を出して読み

尾道市　小畑宣之

ぎこちない恋歯車の軋む音
あやふやな恋シーソーのやじろべえ
許されぬ恋逆光のカメラアイ
さわやかな恋青空に白い雲

尾道市　日谷寛

大暴れの夏を包んで秋静か
ピーヒャララ被災地へ戻って来た絆
眼下の紅葉日本の平和染めあげる
老化です医師と鏡に告げられる

竹原市　若年幸子

築二十五そしてピンチは始まった
冷蔵庫続いてテレビ写らない
友と旅これが一番薬です
ガイド嬢の人柄に触れ錦帯橋

竹原市　土井輝恵

条件は窓から風が入ること
天むすのまた食べたいというサイズ
こんな日は小菊ひと枝摘んでくる
スマートにさよなら言えた気がします

松山市　郷田みや

高知市　三谷松太郎

夢で会うそれがダメなら竜宮で
わがままも筋を通せば生一本
ごく普通それで文句はなかろうに
ガラケーをやめてはみたが指震え

沖縄県　禱モモト

ばあちゃんと呼ぶ片言にハイタッチ
秋深し菊の花園姉は逝く
芸術の秋の祭典文化の日
募金箱五円軽いよ札入れて

沖縄県　宮すみれ

地平線でかい夕日が半覗き
風呂上がりチャイム鳴る鳴る2分待て
島バナナ自慢の美味と空と海
光線が重ねカーテン戸惑わす

黒石市　北山まみどり

忘れよう眠ろう何も考えず
知っている思い通りにいかぬこと
あれこれと身構えるから狙われる
身を任すことも秘策のひとつかも

弘前市　髙森一呑

妻の留守やけに晩酌捗って
紅葉狩り痛い膝でもお供する
後期高齢免許返納思案する
見栄張ってちょっと高めの赤ワイン

仙台市　月波与生

前世から来世乳酸菌を飲む
先生と呼ばれ似合わぬことをやる
自己流の生き方だから語らない
わたくしの涙はあまり辛くない

白河市　鈴木たけし

狂い咲きしたサクラには華がない
茅葺きの縁側で見た十三夜
お月見は田舎ハロウィーンは都会
据え炬燵みかんリンゴの味の良さ

富士見市　中島通則

趣味嗜好異なる妻と四十年
旧姓と君付けで呼ぶクラス会
俳優で犯人当てる妻の知恵
安眠を邪魔するトイレ五回起き

横浜市　川島良子

施設倒産全身に電気が走る
空っぽの施設に思い出が詰まる
泣くよりも次の一手を考える
大臣の資質笑い事では済まされぬ

横浜市　長島亜希子

健康に良いから今日もサバ缶よ
民意どうあれ耳を貸さない永田町
若い娘だけど寝て凭れられうっとうし
老人ホームの資料もらったクラス会

静岡市　渡辺芳子

案じるよ娘も手提げ置き忘れ
友達が次から次とホーム入り
替え歌のボケナイ音頭でみな笑顔
頑張れど自然の老いには追いつけず

名古屋市　冨田末男

毎日が学びになったマスメディア
末席に居ては自力を溜めている
良い方へ個性変えたく始発駅
問題を逆の方から見てみたい

舞鶴市　伊藤恒

素うどんは通が食べると負け惜しみ
議員ともなれば空から下界見る
只感謝妻の工夫とやりくりに
この国は死ぬまで人をこき使い

大阪市　中島栄子

人それぞれ許し合わねば付き合えぬ
得手勝手言えば八十路の知恵が泣く
九十五歳なんぱされてのお友達
曽孫は宝何時の頃まで見れるやら

大阪市　樋口眞

もう立冬カモ飛来する忙しなさ
酒をのむ友減り続け秋寂し
九人いる学友二人杖を持つ
雑吟を読めば本音が見えて来る

大阪市　前川善之

卒寿迄生きた喜び母感謝
平成去り朝日も昇る新時代
生きるのもあの世の旅も一人です
人生の登り坂でも敵がある

大阪市　松田聰

投句さぼり当然ながら無い氏名
祝日の意味あい少しずつ薄れ
バラマキが外交だとは思えない
マイナンバー妻にへそくりバレました

大阪市　横山里子

上出来と姑が初めて誉めた寿司
同期会元気貰いに急ぐ足
不揃いな訳あり探す道の駅
頑固だが芯は曲げない友ばかり

池田市　上山堅坊

大抵のことは笑って済ませてる
趣味の森へボクをまるごと投げ入れる
ポケットに金ないときの孤独感
人生の節目節目にいた女神

池田市　太田省三

今日もまた喪中はがきの定型句
神様も守りきれない不用心
だんじりは町がこぞってラテン系
南瓜がはみ出す葉書ハロウィーン

河内長野市　中島一彌

機嫌取り甘い力で揉む背中
生きている証拠と妻が言う鼾
少しずつ老いる手つきで爪を切る
水飲んでスイッチ入れる朝の癖

河内長野市　穂口正子

子にエール宅配便にてんこ盛り
面倒で本音かくして笑ってる
インスタの「見て見て私幸せよ」
どんなに焦っても行き先は同じ

河内長野市　渡邊修

捜し物今さら言えぬあった場所
階下から食事出来たとメール便
過ちをフェイクニュースと逃げるボス
トランプにヒトラー風の臭いする

堺市　梅木澄空

出て行けと言うのは何時も妻の方
いないいないばぁあやした筈が余計泣き
和洋中おせちを囲む三世代
食べ急ぐ小商い時の癖抜けず

堺市　楠井輝子

高血糖あれこれダメで酒は飲む
遺言を書き終えて未だ逝けません
千鳥足ニコニコ帰宅妻仁王
骨密度スカスカ煮干しで埋めちゃえ

堺市　羽田野洋介

生きてたかなんて言い合うクラス会
ぜいたくは敵と言われた遠い日々
メールでなく電話かかると何かある
生きる知恵八十年の蓄積が

吹田市　岩口のぞみ

食欲の秋と戦うダイエット
衣替えやせる捨てると決めかねる
受験生カウントダウンの始まりだ
ジム通いご褒美おやつはローカロリー

高槻市　三谷白黒

爺婆はどうして優しくなるのかな
店番の婆さん元気多いです
欲しいもの何も無いので貯金する
ひらめきが少なくなって句が出来ず

豊中市　源田啓生

サザエさん思わずくすり世は楽し
ダメ虎に矢野さんならと期待する
右肩に触れて秋風通り過ぎ
石庭の石が抱いてる孤独感

寝屋川市　岡本勲

外では主人内では下僕になるおやじ
古女房まだかくしてる底力
夕立ちのような女房のお説教
年ごとに生と死の字が怖くなり

寝屋川市　坂本ミヨノ

高層の窓下眺め目が廻る
マツタケ飯食べ過ぎ太る夢の中
今日明日もカレーの鍋が待っている
特売服似合い自慢で街散歩

枚方市　谷　英也

将来が透けて見えると味気ない
せかせかと下界を笑いトンビ舞う
孫の姿見送る度に目が潤む
震災で別れた人を偲ぶ夜

箕面市　寺井柳童

えんえんと続く坂道老いの坂
思い出を沢山平成に感謝
悪いくせ人の話の腰を折る
平成を超える元号きっとある

八尾市　田邊浩三

大相撲場外戦が面白い
ロボットが少子化の世を救うとは
有名人年下ばかりの訃報みる
美味しいが柔いに変わる抜歯あと

八尾市　前田紀雄

新元号より十連休が待ち遠しい
ゆっくりと歩いたつもりもう八十路
うっかりが日常茶飯増えて来た
爪と髪伸びても背丈減るばかり

大阪府　小栢こずえ

見える目で見えない物を見ています
日々進むＡＩ進化に乗り遅れ
時代から遅れ優雅に生きている
お利口な若者はなし通じない

大阪府　髙木道子

晩婚化ママかパーパかどっちやろ
喜びも優しさも遥かや紅葉舞う
流行りなど度外視亡母の服を着る
涙腺も体のパーツも弛みがち

大阪府　中内孚彦

災害でテレビに映るうちの家
土砂崩れ水田だけは許せない
ルートには山岳ガイドの墓標あり
本当の味方数えるのは怖い

大阪府　畑中節子

一人立ち出来た曾孫の笑顔好し
菜園が生き甲斐となる老いの鍬
剪定で落した枝が床飾る
生活のリズムが狂う痛い腰

神戸市　玄番美恵子

点滴でつないだ命ひかり出す
背すじピン今は自分に言い聞かす
満点の妻になろうとした昔
痛む膝杖に守られ一歩ずつ

神戸市　輿水　弘

あしたから始めてみようよく噛もう
脳年齢判っています聞かないで
生きていますそうやすやすと逝きません
酔眼の奥で残り火煽ぐ意地

神戸市　近藤　勝正

水害も流せなかった人の情
儚さに心ひかれる明けの月
感謝して残った命使い切る
終章は景色愛でつつ鈍行で

神戸市　斎藤　隆浩

句会場お隣りさんと馬が合う
サプリより元気に句会はしごする
おめでとう昭和基地より来るメール
百歳まで年金もらい生きてやる

神戸市　山根　弘華

無印で生きてきました女坂
祝杯にひと花そえる武勇伝
命ある今日に感謝の米をとぐ
残り火を消さないように生きる智恵

伊丹市　平井　富夫

孫ハワイ妻は温泉俺自宅
タバコ止め酒代減らし医者通い
喜寿迎え炊事洗濯教えられ
神頼み仏に縋るまだ欲が

篠山市　長谷川　善輔

窓ぎわで外見る猫が看板です
猫のトイレそうじで始まる日々平和
夜が明けて猫待らせて日が暮れる
友逝きていよよ寂しくスマホ見る

三田市　幸田　厚子

五キロ減今年もたてて未完成
授乳時に交わすにっこり無限愛
嫌がる子無理やり稽古親のエゴ
風疹の下火を願う若夫婦

三田市　住吉　美和子

秋深し今宵は隣も鍋料理
草もみじ色とりどりに衣替え
老い二人入れ歯外しておちょぼ口
旅ごころそそるパンフが日々届く

三田市　東内　美智子

出来ちゃった住む家よりも燃えた恋
M寸を試着するのにLすすめ
義理チョコを渡し続けた君が好き
イケメンより軍手長靴似合う人

奈良市　尾畑　なを江

迷ったら亡母ならなんて言うやろか
嘘つきは猫相手でも嘘を言う
うたた寝で亡母に会えたはもうけもの
振り向けば過去の想い出遠ざかる

初秋とはいえもう君の温み恋う
この汚点消せど消せども消えやせぬ
火があるから煙るんですよ火を断とう
指の傷あの日あの時走馬灯

奈良県　中堀　優

たらればを過去に奉納しての初春
同窓がまた星になる風になる
一年の点検消火器と暮し
おいおまえ猫は名前で呼ばれてる

和歌山市　倉橋悦子

秋日和身体まったり日なたぼこ
庭の草雨に伸びすぎおじぎする
外出を旅の予行と笑顔みせ
褞袍縫うこの手やりたい姑は言い

和歌山市　鍋嶋澄子

冥土への旅券を握り呱呱の声
満腹になっても動く欲の箸
御喋りが寡黙になった何かある
留守電のテープ相手にあっかんべ

和歌山市　西川千鶴

花見から紅葉狩りまでテレビジョン
遂にきた食欲だけが生き甲斐に
散歩道一筋変えて新世界
もうおせち気持ち急かせるチラシ類

和歌山市　福島一雄

潮時がわからないまま逢う二人
平凡な私に七味ふりかける
愛された記憶が深いシワになる
迷うから人間らしくなりました

和歌山市　松本雅子

老々介護命尊く送る日々
高齢を誇りに一歩ゆずります
なる程と思う心に切り変える
健康寿命ともに延ばそう夫婦仲

岩出市　村中悦男

川柳塔

（つづき）

東京名古屋高知と長い旅終る
それぞれに異父兄姉にめぐり合う
母二人逝きし静かな秋の暮れ
美しい足だ天使の足だろう
山の駅孫子見送り夏終る

（前月分）高知県　小澤幸泉

旅ドラマ昔の自分思い出す
八十路すぎアップダウンがまだ続く
星になり私見て居る亡夫の声
兄弟の絆が守る麻のれん
川柳をやってて良かった今老後

（前月分）大阪市　熊代菜月

橘高薫風句抄

（『橘高薫風川柳句集』平成十三年発刊）

目に余るものにロビーの登山靴
清しさは秋に衰え冬に死し
西成のシャツステテコは王衣に似
三日月があんなに光るのも勇気
トンネルが遠くに見える秋の恋
鰯雲びっしり僕の歯は抜ける
天来の妙音蔵す白百台は
晩秋に水は一番重くなる
氷嚢の下から見てる好きな人
水の上蛇の長さが長くなる
十二月の粋人奇人物語
新年や男も竜も玉を抱く
花火爆ぜ微塵地獄にいるふたり
裁かれるのに座蒲団が敷いてある
目に見えぬものを支える釈迦の指

ハワイ紀行　五句

ハワイ行GOのランプか月が出る
ハワイまで星を閲して来たりけり
われら迎うオアフは波のレイかけて
枝のない椰子を夕日がすべり落つ
就中ひょろひょろ椰子の親しさよ
偽証する伊藤大久保維新の名
児玉誉士夫の笑い袋や金袋
小佐野児玉の暗い寒山拾得図
勲一等黒き旭日大綬章
エリートの狐が落ちた獄の顔
松本波郎夫人を悼む
おだまきが咲いている紫の涙

鑑真和上像

おん目元さつき明りのし給える
童唄性別死別異ならず

英語 de Senryu㊽

麻生路郎句集『旅　人』

英 訳　吉村　侑久代　Kim Horne

裸の外に　うらやまれるものを　持たず

I have nothing
for them to envy
except my naked body

本復して辛辣な口をきき

after recovering
his conversation
becomes bitter

---

nothing 何もない　*envy* うらやむ　*except* 以外には　*naked body* 裸の体
recover 回復する　*conversation* (うちとけた)会話　*become* ～になる　*bitter* 辛辣な

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句㉕日本から発信

英語で詩を書く日本女性、*Yoko Danno*

Yoko Danno さんは、日本人であるが英語のみで詩を書く詩人として知られ、神戸で出版社 *Ikuta Press* を率いています。*Yoko* さんに出会ったのは 2012 年 10 月、京都で催されたリンドレイ・ウィリアムズ・ハブル（*Lindley Williams Hubbell* 林秋石）先生の詩を読む集いでした。その時に *Yoko* さんがハブル先生の弟子であることに気付きました。その後、*Yoko* さんを中心に「英語四行連詩」を捲く仲間や、英詩の朗読会に誘われました。日本語で書かれた *Yoko* さんの詩を読んだことはありません。そして彼女になぜ英語で詩を書くのかと質問したところ、彼女の中では英語で書くことにあまり抵抗もなく，今に至っているとのことです。初めての詩作が英語であり、彼女の詩を見出した教員の激励、そしてハブル先生の詩作の手伝いなどから *Yoko* さんにとって、英語で詩を書くことが当たり前になったようです。今では英語で詩を書く日本人は多々ありますが、英語でしか書かない（書けない）日本人詩人は *Yoko* さんをおいて他には見当たらないと思います。東大寺の「お水取り」に、名前ではなく「青衣女人」と読み上げられる女性についての詩 *Woman in a Blue Robe* の出だしは容易な英語で始まります。*Who are you?/ Why are you here?/ Where are you from?/ Who are your parents? / May I have your name, Ma'am? Yoko Danno: Woman In A Blue Robe (Isobar Press, http://isobarpress.com)* や、*Amazon* で購入できます。

誹風柳多留一二篇研究 67

細井龍夫・伊吹和男
山田昭夫・石川道子
小栗清吾
清博美

565 **にわか雨四ツ手に乗ツておたでられ**

細井 俄雨にあって四つ手駕篭に乗ったら、駕篭舁に吉原行きがおすすめとおだてまくられる。

俄雨四ツ手にのつて出来心　二八13

伊吹 賛。雨宿りしたり菰をかぶったりするより、駕篭に乗るほうがよっぽどいいとおだてられるともとれるが。

山田 右説もあり得るがやはり礎ではないか。

小栗 伊吹説賛。「雨宿りしたり傘借りたり、ありゃ銭のねェ貧乏人のすることでござんすよねェ。旦那」。

清 小栗氏の駕篭舁のセリフの通り。

566 **けふ切りの屋ねや柳をといて行**

細井 屋根屋が仕事をするのに邪魔になるので柳の枝を括っておいたが、今日で仕上がりなので、括りを解いて元通りに枝を垂らして帰って行った。

ふきかゝるやね屋柳をむすび上ケ　二四33

山田 賛。こんな心優しい者も居れば、次のような者も居る。

おしい木をやね屋ハずつか〳〵きり　一七22

清 主題句いいですね。こういう句好きです。

567 **がさつなはあふひのうへのとねりせ**

細井 光源氏の室・葵の上と源氏に捨てられた六条御息女との牛車同志が賀茂の祭の見物をする場所争いをしたことがあるが、葵の上の舎人の言動が粗暴だったのを、謡曲『野宮』で、旅の僧と妄執一杯の六条御息女の霊とのやりとりで描写している。

うしよをひけなど、葵の上の供　二六22
足を引ㇵれたとあふひの仕丁い、　安八礼12
ふがいないみやすところのとねりとも　九40

伊吹 賛。騒動の原因は舎人にあると。

清 賛。

568 **紫の仲間いまたにたゞのつえ**

伊吹 この場合の紫は、紫衣を着ることが許されるので、検校をあらわす語である。検校になれば、紫衣を着て、両撞木の杖を持つ。座頭のうちの一人が検校に出世したのだが、もとの仲間たちは、盲人がつく普通の杖のままである。

座頭のつへにはなれたかずおふへい　三一15

清 賛。

569 **横に見てたてかけて置くかゝみとぎ**

伊吹 鏡を横から見て、研ぎ具合を確かめ、仕上がった鏡を並べて立てかけて置く、鏡研ぎの描写句である。

かゝミとき田ごとのやうにならべ立テ　安八礼5

我つらでこゝろミをする鏡とぎ　筥四11

清 賛。

570 **むこに行そうだんむこがちやゝをつけ**

伊吹「ちゃや」を万句合にならって、「ちゃちゃ」と訂正する。茶々を付けるは、茶々を入れると同じで、水をさす。男を婿にやる相談をしていたら、すでに入婿になっている人物が、苦労させることになるから止めておけと、自分の経験から否定的な意見を述べた。

入聟ハ小糠交りの愚痴をいゝ　一四五15

山田 賛。「小糠三合あれば聟に行くな」の実体験者なればこそ。

清 賛。

571 **うふやからすぐにかぢやの手に渡り**

伊吹 雨譚注に、「干将莫耶（バクヤ）」とある。楚王の夫人が暑さのため鉄柱に寄りかかったら身ごもってしまい、出産した鉄の玉で干将・莫耶という二振りの名剣が造られた、という中国の故事から。楚王の夫人の産室から鉄丸をすぐに鍛冶屋へ手渡したであろう、という想像句である。

御安ざん御子ハかぢやへ遣ハされ　安二智3

清 賛。

572 **いゝつぶれやうさとごぜを手なつける**

伊吹 目の潰れ方に、いいも悪いもないと思うが、うまい潰れ方だとおだてて、瞽女と近づきになる。

能ィつぶれやうさとごぜハほめられる　九11

山田 賛。ものは言いよう、誉め所もあればあるもの。

清 賛。

573 **かけとりのいゝわけ川瀬喜内する**

伊吹 川瀬喜内は、為替来ないの人名化。

作兵衛様ハ御宿かと大晦日　傍一5

山田 賛。本句、川瀬喜内と洒落たかっただけ。

清 賛。

574 **なまなかに片目見へると無芸也**

伊吹 生半には、多く中途半端のため具合が悪いという気持ちで、かえって、なまじっか、といった意。片目が見えるために、座頭となって琵琶・琴（箏）・三味線（・按摩・鍼治・金貸し）をするわけでもなく、かえって取柄のない存在である。

両かんか二度につふれてけいかなし　明二松6

小栗 賛。ではあるが、この句「無芸」にひっかかっている。礎稿は「金貸し」を三味線などと同列にしておられるように読めるが、川柳では、「無芸」は、「金貸座頭」の意である。

げいの無ィ座頭ハ玄関から上り　三3

芸の無ィ座頭袴をはいて来る　一三七34

外聞ンをかゝせる座頭げいかなし　明三梅5

清 無芸＝金貸しと考えているが、さて、片目の見える金貸しがいたかどうか。いずれにしても、芸か金貸しかで生きて行かなければならぬはず。

通巻一一〇〇号記念特集

今月のことば

中島生々庵

実はまだ哺育室で静かに生活を送っている未熟児である。

未熟児といっても、早産児でもなく奇形児でもない。四肢五臓六腑完全に整い生活力も旺盛である。ただ体重が2.5キロ以下であるために医学上国際的約束で未熟児と呼ばれるわけである。

未熟児というかよわい生命力をどう護ってゆくかに就いて小児科医者にはきびしく申し渡されている心構えの条件がある。その中の二つ三つをあげて見る。

○弱いともしびに、いろいろ処置をすれば却ってともしびが弱くなったり時とすると消えることがあり、栄養も過剰に与えることは意味のないばかりでなく栄養不足よりも危険なことがある。

○「生命を救うこと」の方が「急速な体重増加」を考えるよりも、より重要である。

○いそいで大きく育てようとか自分のてがらにしようとか、そうしたあせりや功名心を出してはいけない。

「川柳塔」を逞しく明るく育ててゆく上に示唆される点が多々あるように思う。

宿命におろがみながら子を育て

生々庵

「川柳塔」社が生まれた。



（大正13年2月15日　発行）

（昭和40年10月1日　発行）

一一〇〇号に寄せて

川柳塔萬歳

仁部四郎

終活という言葉を知ったので、真似事をしてみようと、先ずは本棚に手を出したら、立派な装丁の写真が出てきた。

「川柳塔唐津支部結成三周年記念川柳大会（S60・10・13）」である。

上田佳秋、山本規不風、神谷凡九郎、園田文子、樫谷寿馬、野村太茂津、板尾岳人、田中正坊、黒川紫香、橘高薫風、高杉鬼遊、岩本雀踊子、藤村〆女の皆さんで、写真に入っている唐津組と同数の十三人である。写真に入っていない佐賀県の人が数名あるが、今にして思えば圧巻の応援団である。

佐賀県は、〈番傘〉の人が殆どで、唐津の新岡回天子さんが、〈川柳塔〉の人であることは知らずに、唐津にある川柳会だからということで入会したのであった。写真に入っている岩崎實、浜本久仁於、浜本義美の三人さんが先輩であるが、新岡回天子さんと袂を分かって、〈川柳塔唐津支部〉となっての三周年であった。それにしても、佐賀番傘の人からよくうらやましがられる応援団である。

唐津組では、浜本久仁於、浜本義美、浜本千代、相葉あき、筒井朴竜、それに代表であった田口虹汀さんらが亡くなられたが、平成三十年は昭和九十三年なのである。

写真には、「いたずら・真島清弘」の懸垂が写っているが、第七回春の川柳塔まつりでは、〈番傘川柳本社〉として選者をつとめる真島久美子さんのお父さんである。

実は、というと大仰だが、本棚に『川柳番傘』が二冊あって、二〇〇四（平成十六）年の十二月号（第九十三巻・第十二号）がある。真島清弘さんのことは、「巻頭作家プロフィル」で紹介されているのだが、私が、リレー放論「迷い道」で出ている。川柳塔副主幹の肩書がついている。佐賀番傘の代表であった菖蒲正明さんからの依頼であったのだが、十月号には、川柳噴煙吟社の中川さんが出ていて、なかなか面白い企画に参加させてもらったことであった。

大阪へはよく行った。

西尾栞先生、橘高薫風先生の御葬儀にも参列したが、川柳塔まつりの懇親会で、山門幸夫、タミの御夫妻と〝唐津くんちの唄〟を歌ったこともある。同人の池田純子さんの御両親である。

昭和五十七年に同人になり、副主幹にされたり相談役にされたりする間に「目次下」もいくたびか書いたし、執行部へ意見具申の手紙を書いたこともある。

そのハズのつもりでいた高野山の川柳塔の碑の会費をあわてて払ったのは一昨年のことであったか。

平成の最後のお正月に『川柳塔』は一一〇〇号を迎える。私の側には『川柳塔』が四十年在る。記念すべきときに一文を求められて思い出すままを書いたが〝川柳塔萬歳〟である。

特別寄稿

人間陶治の旗

梅崎流青

高砂や

光陰はひょっとしたら矢よりも早いのではないかと思う年代になった。

年が明けて「川柳塔」は１１００号を迎えるという。まことにおめでたいことだ。

高濱虚子は去年と今年は「貫く棒のごときもの」と言ったが、誰しも新年は新しい空気の中で気持ち新たに迎えたいもの。

年を迎える行事はいくつかあるが我が家ではその一つに床の間の掛け軸を掛けかえることから始まる。

この床の間には人間国宝・井上萬二の白磁、瓜形壷と「花發多風雨人生足別離」の軸を掛けている。

これは中国唐の時代の詩人、干 武陵によるもの。詩のタイトルは「酒勧（酒を勧む）」の一節を書いたものである。

この漢詩は井伏鱒二の名訳によって人に知られるようになった。

それは「花に嵐のたとえもあるぞ。さよならだけが人生だ」。

そんな思い入れの軸だが正月に「さよならだけが人生でもあるまい」、という家人の忠告を聞き入れ「高砂」に変えるのだ。

寿福と安穏を願うという能楽の一つでもある高砂。世阿弥の作である。

今はもう少なくなったが時代劇の祝言で「高砂やこの浦船に帆を上げて」はこの中で謡われる。

娘の婚儀の使者を迎えたのもこの軸を背にしていた。瓜形壷とともに、我が家の唯一の小さな文化的空間である。

庭 箒

「川柳塔」の始祖、麻生路郎は「川柳は人間陶治の文学」「いのちある句を作れ」を標榜した。この二つの旗、高々と翻る。なかんずく「人間陶治」の旗の何と高邁なこと。

「陶冶」とは陶器と鋳物のことであるが転じて人の性質や才能を鍛えて練りあげること、をいう。

そういえば仕事を通じてこの「人間陶治」に近いことを経験、直面したことがある。

先に書いた佐賀県有田町在住の井上萬二を講師として陶芸教室を開いたのは今から18年前。当時、私は西日本新聞の関連組織「西日本文化サークル佐賀教室」に在籍。「陶芸」は10年間続いた。

全国にカルチャーセンターはあったが単発は別として人間国宝を講師とする教室は聞いたことがなかった。

佐賀県有田町。陶磁器の町である。始まりはあの朝鮮出兵による文禄慶長の役で豊臣秀吉は何人かの陶工を連れ帰る。

陶土にも恵まれ有田焼はそれから400年の歴史を刻む。鹿児島の薩摩焼、山口の萩焼なども同じ軌跡を描いている。

この有田に当時二人の人間国宝がいた。それも隣同士。第14代酒井田柿右衛門と井上萬二。二人は第13代柿右衛門の兄弟弟子。

萬二は修行時代のことをぽつりと語ったことがある。朝まだき、人が眠っている頃水を汲み、火を熾して先輩職人たちの朝を待った無給時代。人が寝てから轆轤技術を学んだこと、などである。

教室は午後1時から2時間、月2回とした。会員は遠く兵庫県芦屋市から新幹線を乗り継いでくる人もいた。

場所は先生の自宅工房とは別の小さな山の中腹にある。工房も焼成施設も備えてあった。当時、アメリカ、ニューメキシコ州の大学客員教授の肩書もあり留学生を受け入れるための施設でもあった。

まず庭の掃除から始まる。私は先生と会員の連絡、そして備品の調達や時には庭箒や雑巾なども準備する「兵站」係。

月2回、佐賀から有田まで片道2時間を10年間通った。

会員の掃除は熱心だった。とにかく箒の摩耗度がめっぽう早い。終了時刻にはその日の当番が先生への感謝と成果、反省点などを述べる。日頃見かけない光景だ。

会員30人。どんな育ちや肩書きかは知らなかった。それでも小さな窯元、会社の社長、自営、会社員など少しずつ分かりかけたが先生や私にとってはどこまでも会員の一人だった。

この教室を通じて色々な企画をした。教室は当初6カ月の予定だった。人間国宝の多忙さと技術の重要性を考慮すればサークルでの長期間の拘束など考えられなかった。

だがあらゆる面で他の教室と比較してカロリーの高い教室、1カ月でも長く、というのが私の本音だった。そのため教室を通じて色々な企画もした。「人間国宝と行くアメリカ文化探訪の旅」「人間国宝とその弟子たち展」などである。「弟子たち展」は集客力や発信力を考え福岡都市圏の催し物会場で行った。

出品作品にはそれぞれ売り値を付けた。尻込みする会員もいたが、先生の「自作を人に買って貰うことがいかに厳しいものか体験しよう」との一声で会員は前を向いた。

それぞれの展示物は見事なものだった。それもそうだろう。今だから言えるが成形、削り、釉薬、焼成まで含めどこかに先生の指導があった。市価より高い設定だったがすぐに売り切れた。

俗っぽい話になるが、井上萬二作品展は毎年東京銀座「和光」で開かれる。その他地方都市、デパートなどでも。

作品展を覗いて驚いた。壷一つに高級車一台の値段。それも売約済みの表示。因みに私の「瓜形壷」は特別価格のもの。

いのちある句

作って楽しむ、からそれを売って生活をという途方もない距離を有田の町を覗いて感じることがある。有田に限らず陶磁器を生業としている職人は昔ほどではないが何人もいる。毎年GWの陶器市には100万人以上の人が集まる。しかし、それはあくまで一時的なもの。売る、の対語は買うである。

人はどんな陶磁器を買うのか。湯のみ、茶碗、皿など日用品は別として茶器、壷、香炉などは作品よりも誰の作か、に重点を置く。まさに「人間的に鍛えられて練れ、薫陶養成された人か」の「陶冶」が物差しになっているのだ。

あの頃、陶芸教室のいつもの景として限られた轆轤の順番を待ちながら土を捏ねる人、庭箒を手放さない人が出てきた。

そんな時萬二先生は「僕が本当に教えたいのはあのような会員」と土捏ねや庭箒の人を目で追った。今思うと私は仕事を通じて「人間陶冶」に触れていた。

現在、川柳作品に値段を付けて売る、という行為は句集発刊などが例に上げられるがこの売上げで生活を支えなければならない、という厳しさはない。

さればこそ麻生路郎が提唱したもう一つの旗、「いのちある句を作れ」は常に川柳人として心に留めておきたいと思っている。

（敬称略）

川柳葦群主宰

川柳塔の川柳讃歌

番外編

上方芸能評論家　木津川計

行末はどうあろうとも火の如し

麻生路郎

烈々の闘志である。「専門家なき世界は発達せず」と断じ「職業川柳人」を宣言した最初の川柳人の気迫である。

「川柳雑誌」を創刊し、一統を率いた路郎の偉さは次のことばを残したことで断然光った。即ち、「川柳とは人の肺腑を衝く一七音字中心の人間陶冶の詩である」。この言によって川柳は文学たり得たのである。さらに「一句を遺し得ぬ作家こそ、永久に柳壇から追放されるべきである」と。偉大で恐い指導者だった。

一生に自分の部屋というが欲しい

麻生蔑乃

イギリスの女流作家ヴァージニア・ウルフは名著『私だけの部屋』で「女性が小説なり詩なりを書こうとするなら、年に５００ポンドの収入とドアに鍵のかかる部屋を持つ必要がある」と述べた。〝日本のヴァージニア・ウルフ〟麻生蔑乃は相愛高女からプール女学院で英語を更に学んだ才媛にして賢夫人だった。「浴槽へずらり立ったはみなわが子」四男五女を育てた。路郎を悼み、「霹靂の火もシュンとなり雨続く」、路郎よ、以て冥すべし。

葬式で会いぼろいことおまへんか

須崎豆秋

利に聡い大阪人を描いて出色。「早よいかな消えてしまうと火事見舞い」はその計算高さを、「骨立てたまま二次会へついて行き」で大阪人の卑しさを剔出して比類ない冴えをみせた。香川県の出身だが大阪に暮してよくこの欲望都市の一面を証言した。川柳人は住む地を詠み残さねばならない。岸本水府は多く大阪を詠んだが豆秋とはま逆で、この大阪の古き良き伝統を称え、その情緒をいとおしんだ。作家の個性が作品に表れ大阪を彩る。

放送局に握られている命綱

不二田一三夫

ある日、秋田実先生に「君、不二田一三夫を知っているか」と聞かれた。?と思うと、秋田先生は「僕の元で漫才書いとるんやが、標語作家でもあって、戦争中えろうはやった標語をこしらえよったんや」「どんな標語ですか」「うん〝鬼畜米英〟という標語や」。ええーっ⁉　戦中の小学生だった僕はこの標語の氾濫に洗脳され、軍国少年に育った。一度だけ一三夫さんと話し合ったが息子ほどの僕に終始敬語を使われた。戦争に歪められた紳士だった。

名案へ妻はフフンと言っただけ

中島生々庵

路郎亡きあと同志と共に昭和四十年、川柳塔を創刊、推されて主幹、理事長に。小石夫人は小川流の舞踊家、毎年の懇親会で僕は生々庵さんと隣り合わせに座った。大阪府の内科小児科医の会長をも務めた方だったが穏やかなお人柄に感服した。「世間の言葉に良妻賢母があるが、私は良妻より賢妻、賢母よりも良母が望ましく思う」と。その賢妻にフフンと鼻であしらわれ、中島医学博士は形なしだった。日本画や小唄にも長けた夫人だった。

牛の瞳に人間何をあわてとる

西尾栞

「栞さんは常に柔和で、人づきあいもよく、ついぞ不機嫌な顔を見せたことのない人である」と麻生蔑乃は評した。一度だけ

取材でお会いした。大きな躯、まさに牛の瞳のような方だった。であって「意見する儂がまだまだ遊びたし」「この期におよんで人参だにんにくだ」「さりながら痴漢の心少し持ち」とあけすけに正直だったから誰にも好かれた。菓子製造の会社を経営しながら川柳塔の主幹で理事長。男を蹴散らす古今堂蕉子の父だった。

人の世や嗚呼に始まる広辞苑

橘　高　薫　風

人生とは何かを明かして間然するところがない。田辺聖子をして感嘆、唸らしめた名句である。薫風の柳号がいい。だからでもあろう、句柄が高かった。「初光ここに人間陶冶の詩」。「胃半分肺半分の湯呑かな」で病弱、細い躯で主幹を務め、川柳塔の評価を高めた。「僕の富レモン一個を棺に入れよ」を遺して平成十七年、七十九歳で逝去。葬儀に参列した僕は「レモンは？」と朱夏さんに問うと「入れました」。薫風さん、満足されましたか。

悩みみな喋らされてから欠伸され

河　内　天　笑

堂々たる体躯、この方にまかせば万事収まると薫風さんも考えたのだろう。後継主幹を天笑さんに託した。夫人河内月子も柳人で「時々は叫んで自分たしかめる」こともあったが、川柳塔まつりではハワイアンの演奏に乗って毎度フラダンスを踊って楽しませてくれた。右の選出句に見る如く天笑さんの人間観察眼は自らにも向かい「ヴァイキングゆっくり食べたことがない」と包み隠さなかった。小島蘭幸を主幹に推して引退。天笑さん、息災を念じます。

菊活けてひとゝき欲を忘れたり

清　水　白　柳

「自分の修めた善事善行の功徳を他人の為めにふりむけるのが菩薩の回向だとすれば、白柳さんは川柳済度の目的でこの世に仮の姿を現した権化だったと、私はうけとりたい」と中島生々庵は『白柳遺句集』の序文に書いた。救いの権化は温容で温顔だった。昭和四十年、川柳塔常任理事、編集責任者になった。その繁雑と多忙だが、宮大工を職業として神仏に尽くした。阿倍野神社に昭和五十七年、句碑が建立された。その碑に刻まれたのが選出句だ。

流れにはもうさからわぬ余命表

田　中　正　坊

ふり返れば六十年の昔である。僕は正坊さんと同じ団地に住んでいた。十四、五棟並ぶ団地自治会の広報部長を務め、連絡調整に走り回っていた。大新聞をレッドパージで追われた筋金入りが、のち川柳に筆を染め、川柳塔にかかわって編集や校正で経験を活かし、教えた。「今にして思う老いとは病とは」、嗚呼こんなに老いられたのか。余命表を手に往年の闘士も「流れにはもうさからわぬ」と。正坊さん、よく闘ってこられました。合掌。

ひとりには一人の旗よ風に立つ

奥　田　みつ子

番傘の男性パワーに対し川柳塔は今も女性パワーが大きい。いわばその先導役だった。日川協常任理事に選ばれ、川柳塔編集長、副主幹。並みのひとでないのは右の選出句を見てもわかる。凄乎たる気概ではないか。みつ子さんに負けじと僕も『上方芸能』に刻んだ。「遠くに旗の翻っているのが見える／長い間探し続けてきた／ボロボロだが風の中の／河原乞食の旗の／へんぽんたるはためきである」（30号、73年7月）こんな雑誌でありたいと。

幸せと同じ重さの足枷よ

西　出　楓　楽

功罪相半ばするに似て、足枷も幸せの重量と同じだというのである。世の辛酸と無縁な境涯を思わせて人生の深淵を見透す非凡なる力量。それ故に朝日新聞の「なにわ柳壇」、山陽新聞柳壇の選者をつとめる。その根底が第一回川柳文学賞受賞作の『天

秤座』である。川柳塔社相談役の重責にあって事の軽量をよく天秤にかけ危なげない運営。宮沢賢治の「我はこれ塔建つるもの」の気構えで川柳塔を同志と共に文字通り川柳の塔に築き上げた。

目の前の人とかなしいほどの距離

新家完司

「渥美（清）さんの中に寅さんの原型がはっきり潜んでいる。照れ屋で、はにかみ屋で、しかもプライドが高く、優しいけれども、それを表面に出すのが苦手」と山田洋次は渥美清の実像を語っている。朱夏さんは「貝殻節を歌い、踊り、奔放に語り、振る舞っても完司さんほどシャイな人はいない」といつも。寅さんに似た理事長は蘭幸、楓楽さんらを支え、励ますために月二回、鳥取から車を駆って大阪へ来る。川柳塔の安泰を思わす存在感が大きい。

足りてます愛のささやき以外なら

安土理恵

川柳塔同人句の曠野にぽっと灯るこのひとの句を僕は毎号楽しむ。なべて句には色がある。灰色に赤も。が、理恵さんはアトリエをもじった柳号で句を艶色に染める。艶色とはどんな色か。「愛のささやき」を求め続ける色だ。フラメンコの踊り子が情熱的にカスタネットを打つのは「愛のささやき」をくださいのアピールなのだ。理恵さんも呼びかけるから男がその気になると、フラメンコ嬢が肘鉄を食らわすように理恵さんも。だからこのひとは怖い。

雑兵の涙を社史は語らない

穴吹尚士

惜しむべき人物を川柳塔は喪った。数年前だ。鳥取での日川協大会に参加しての不慮の死である。その時、編集長で在任七ヵ月だった。享年七十。十年も生き急いだ。現役時はシャープ全盛期のモーレツ社員。正義派の頑固者だったが自身の栄達より部下の出世をよろこんだ。採り上げた句がこの人の人柄を伝える。まさに社史の多くは「雑兵の涙」を語らないのである。実に万骨は枯れて一将の功は成るのだ。語られざる雑兵に捧げる右の句だ。

男にも女にもある古戦場

山岡冨美子

かつて中山千夏はこう云った。「スポンサーは出したくもない金を出し、制作者はつくりたくもない番組をつくり、タレントはやりたくもないことをやり、視聴者は見たくもないものをみて、テレビの世界ができあがる」と。冨美子さんは若い頃、東京は丸の内の商社で三十年、戦いたくもない商社で戦い、勝気を養った。「多分八十は出ておいで」と仄聞したが忙しい川柳塔事務局をてきぱきとさばく。はるかな古戦場を新戦場に移している。

おふたりという日本語のあたたかさ

山本希久子

慶応で言語学を講じていた西脇順三郎は突然前に座る学生に訊いた。「よく公園で飲ませる、あの白くて温い飲料、あれ何といいましたかね」「甘酒ですか」、先生は照れて「日本語はむずかしくて」。そんな日本語に希久子さんはあたたかさを見出す言葉の狩人。お人柄がまたはんなりとしておやかなのも本物の京おんな故。そのやわらかさで川柳塔前々編集長を務め、この柳誌を親しみやすいやわらか色に染めてなお芯を通したからえらい。

言い聞かす猫の両手を握りしめ

乗原道夫

先年、道夫さんが教壇に立つ帝塚山学院付属高校に僕は招かれ、PTAや教職員に講演した。学院には庄野英二、庄野潤三、阪田寛夫、杉山平一など、上質でヒューマンな作品を生み出した文人が教員や卒業生だった。それら一群の文人を「帝塚山派」と捉えてはどうか、と僕は提言したのだ。それが実り、「帝塚山派文学学会」が三年前、設立されたのがうれしい。道夫さんは無類

の猫好き。加えて薫風を敬愛して研究。朱夏さんが後継と恃む逸材。

崩れ落ちそうなところにある誇り

森山文切

川柳塔若手三羽烏、森山文切・藤井智史・栃尾奏子の中の一羽、いや一人。三十代で三児の父。鳥取生まれだが、奥さんの里の沖縄に住む。WEB句会を立ち上げ、沖縄から全国に川柳を発信。父は自選集の盛山盛桜。「崩れ落ちそうなところ」とはどこか。日本にある米軍基地の七割の面積が沖縄にあり、今また辺野古に基地建設が強行される。知事共どもウチナンチューの「誇り」を失うまいとするのであろうか。沖縄を守り川柳塔を支える。

婚活パーティー 生死のサバイバル

藤井智史

川柳塔期待の三羽烏の内の二人目。後継者のいない組織に希望はない。智史さんは三十代後半、四十になったか。藤井家の後継者を養成すべく只今婚活中。それが「生死のサバイバル」というのだ。それほど悲壮にならず、「生」に向けて軽快にいこう。そうではないか。あなたはいつも塔まつりで「高原列車は行くよ」を歌って会場を盛り上げる。あの軽快さで「婚活パーティー」に臨もう。遠からずの朗報を僕は無論、だれもが待っている。

美しくなって言いたいことがある

栃尾奏子

百貨店の一階はどうして女性の装飾品ばかりなのか。僕の近くの商店街は女性のファッション店ばかりが目立つ。男よりはるかに女性は着飾りたい。美しくなりたい。だが、三羽烏の三人目、栃尾奏子さんは既に美しい。それに明るくて行動的。聞けば郵便局に勤める夫君を川柳の道に引き入れた。いまは「言いたいこと」を言い、やりたいことをやっている、婦唱夫随の共同だ。川柳塔からは有能な女流が次々育つ。そんな女性がいるから男も育つ。

人並みに育ててくれた父母の愛

久保田千代

蘭幸主幹は広島は竹原川柳会で鍛えられた。その川柳会を中央から指導していたのが清水白柳と菊沢小松園だった。千代さんは主幹を育てた小松園の娘である。娘時代は丸紅に勤め、夫君の勤務でサウジアラビアに住んだ日もある。麻薬、強姦、殺人、それに同性愛が死刑、窃盗は手首を切断する国で何かを学んだ筈だ。いまは住む地域で民生委員として親身の相談に乗る。世話役活動が苦にならない奉仕的精神の持ち主。その精神が川柳塔に生きる。

おもいきり顔を洗ってあれは 夢

木本朱夏

結社の運営は民主主義だが、柳誌の編集は編集長主権でなければならない。すべて雑誌の編集は集団合議の民主制になった途端、個性を失う。だから編集長の役割は大きく、責任は重い。生かすも殺すも編集長の采配と力量にかかっている。「朝日ジャーナル」かつての無惨は次々代る編集長の無能故であった。文芸誌の編集長に求められる資質は何か。文学がわかるか否か、これに尽きる。朱夏さんは文学に通じた名編集長だ。頑張れ頑張れ。

そんなに僕はマンボウに似てますか

小島蘭幸

似ています、蘭幸さん。サメやクラゲでないのですから、むしろ喜びましょう。どっしりとしてやさしく、おっとりとして無口で、いつも静かに笑っている。「おうちでも無口ですか?」に「そうです」。いつ口を利かれるのだろう。「恐ろしい人がいっぱいいた昭和」と詠んだら薫風さんが評した。「他人に敵対するという表層でなく、蘭幸にもまた『恐ろしい川柳人』になってほしい」と。川柳塔主幹としてもの言わぬ泰山の如き存在だ。

通巻一一〇〇号記念

同人特集 私の一句

（順不同）

踏んではならぬ踏んではならぬ塔の影　竹原市　小島蘭幸

としよりになりましたねと言う桜　鳥取県　新家完司

断捨離の先ず手始めはあんたから　和歌山市　川上大輪

食事会みんな幸せ色になる　三田市　足立つな子

おばちゃんは何でも少し盛って言う　奈良市　阿部紀子

おんなの時間まだありそうで紅買いに　桜井市　安土理恵

本日はまんまる平和ねこねむる　下松市　有海静枝

シャープにはなれぬ母性という形　豊中市　池田純子

病んでから一途に燃やす命の火　橋本市　石田隆彦

背泳ぎのままで探している明日　松江市　石橋芳山

美しい人だ菖蒲の葉のような　橿原市　居谷真理子

ドボルザーク聴けばまだまだ血がたぎる　弘前市　稲見則彦

改元を機に年賀状拝辞する　神戸市　井上じろう

原発いらぬソーラーパネル屋根に乗せ　弘前市　今　愁女

無茶をした父もこの世にもういない　八幡市　今井万紗子

兄弟の優しさ偲ぶ幸せ感　熊本県　岩切康子

日本を好きな外人好きになる　神戸市　上田和宏

終活が済むまで行かぬポックリ寺　羽曳野市　宇都宮ちづる

鮮やかな花のお礼は水でよし　八尾市　内海幸生

帰ろうかもう五時間も喋ったよ　大阪市　江島谷勝弘

太陽の平等誰も勝てません　大阪市　榎本日の出

落穂拾い農家の親を偲んでる　大阪市　榎本舞夢

最高の笑顔で配る内祝　香芝市　大内朝子

避けられぬ老いを受け入れあるがまま　箕面市　大浦初音

おばあさんは今も発展途上です　奈良市　大久保眞澄

言うた言わん聞いた聞かんで日が暮れる　河内長野市　大島ともこ

コップから湯呑みに替り心凪ぐ　西宮市　緒方美津子

逝くまでのオペは終えたと思う今　鳥取市　奥田由美

簡素化のブームに乗って逝く仏　三田市　尾﨑一子

欲望を抑える蓋は甘いまま　大阪市　小野雅美

お月様かて毎日メイクしています　尼崎市　加川靖鬼

ハッピーエンドのドラマが好きなお人好し　堺市　柿花和夫

欲抜けたおだやかな顔ちょっと好き　大阪市　笠嶋恵美

命とは抜いても生えてくるハコベ　堺市　加島由一

母に会うただそれだけの里帰り　高槻市　片山かずお

幸せの方程式は私流　犬山市　金子美千代

貪ってみても命はお思し召し　西宮市　亀岡哲子

揺れている方が明日へ渡る橋　藤井寺市　鴨谷瑠美子

諦めてなるか飛ぶ日へスクワット　東かがわ市　川崎ひかり

めずらしく真ん中にある今日のへそ　八王子市　川名洋子

針金に負けるもんかと松の意地　大阪市　川端一歩

ずっと未来　どこか私に似てる人　東京都　川本真理子

頬っぺたを叩き気合いを入れる朝　広島市　岸本清

国民は忘れていない「モリ」と「カケ」　鳥取市　岸本宏章

八十路など序の口先はまだ長い　鳥取市　岸本孝子

くり返すことより知らぬ歳の数　篠山市　北澤稠民

守るべきものがまだ有る生きなけりゃ　東大阪市　北村賢子

ただいまの弾んだ声に今日の無事　　河内長野市　木見谷　孝代

人生の午後を楽しむ自由席　　和歌山市　木本　朱夏

子が育つ私も育てられていた　　三田市　久保田　千代

わたくしの絵には大きな窓を描く　　鳥取市　倉益　一瑤

幸せの種ふところに実らせる　　西予市　黒田　茂代

謎解けてやっと眠りにつく栞　　明石市　糀谷　和郎

渡れない橋の向こうに君が待つ　　枚方市　小林　わこ

エンディングノート天使になると書く　　鳥取県　斉尾　くにこ

身の丈にあった暮らしだ背伸びせず　　堺市　齋藤　さくら

逆転の夢を描いて辞書を繰る　　箕面市　酒井　紀華

しゃぼん玉とばしつづけているいのち　　篠山市　酒井　真由

人生はこんなものだと母が逝く　　防府市　坂本　加代

人とひと和む笑顔という魔法　　東大阪市　佐々木　満作

いまが旬五感キラキラさあ八十路　　堺市　澤井　敏治

平成を一足跳びにさせた趣味　　富山市　島　ひかる

とき卵のような起き抜けのわたし　　高槻市　初代　正彦

ビール麦揺れて平成白く終る　　熊本市　杉野　羅天

仮の世というがこんなに素晴しい
春浅く笑い袋の紐を解く
日本が案山子のようになる気配
ぎんなんが転がる頃だ風が吹く
三角も丸も四角も手を繋ぐ
吐き出してしまえば風が柔らかい
骨のない労組トップ会談する
平凡を幸せと読む笑い皺
おばあさんの隣におばあさんが坐る
ぼんやりとしているうちに八十となり
日本語の雅在来種の挽歌
卒寿万才これから先はミステリー
どん底のいまを出発点とする
東風吹いて天地が纏う春衣
充実感ないまま平成が終る
切り札があるのでモナリザは微笑
膝痛む古稀への誤算どっこいしょ

藤井寺市　鈴木いさお
吹田市　須磨活恵
犬山市　関本かつ子
藤井寺市　髙田美代子
出雲市　多久和敬子
米子市　竹内紀の治
鳥取県　竹信照彦
寝屋川市　伊達郁夫
大阪市　谷口義
岡山市　丹下凱夫
土佐清水市　辻内次根
大阪市　津村志華子
堺市　遠山唯教
羽曳野市　徳山みつこ
京都市　都倉求芽
大阪市　栃尾奏子
生駒市　飛永ふりこ

デコポンの出べそに深い意味は無い
かけがえのない財産は家族です
楽しいこともまたあるさ二人なら
会釈だけお互い様の物忘れ
ブランコは優しく揺することにする
カタカナで書けば酸っぱくなる檸檬
バカだなあと一緒に泣いてくれた人
棚引く雲に教えてもらう春の距離
ストレスを流してくれた郷の海
小春日へ老いに歯止めのウォーキング
計画はできたか川を渡る旅
花の頃ＳＬ撮りに来ませんか
急がねば昨日迷った道のまま
西郷どんも美しい花好きでした
健康がお誘い受けて友と旅
用も無いのに長生きをしてしまう
ＡＩに程よく距離をおいて生き

神戸市　冨永恭子
寝屋川市　冨山ルイ子
堺市　内藤憲彦
羽曳野市　中川ひろ介
上尾市　中村伸子
箕面市　中山春代
西予市　西田美恵子
大阪市　西出楓楽
枚方市　二宮山久
枚方市　二宮紫鳳
唐津市　仁部四郎
日高市　根岸方子
三田市　野口真桜子
吹田市　野下之男
南あわじ市　萩原狸月
愛知県　早川遡行
高槻市　原洋志

力にはなれぬ自分を持て余す　大阪市　原田すみ子
畳めない命どっかり腰据える　鳥取市　平尾菜美
熟年にも元気をくれる鯉のぼり　大阪市　平賀国和
抜き足で私へ老いが忍び寄る　宇部市　平田実男
健康寿命ラジオ体操して延ばす　寝屋川市　平松かすみ
北斎の波にのまれて酔い痴れる　箕面市　広島巴子
おじいちゃんも三人寄れば姦しい　尼崎市　藤井宏造
フルスロットルにて恋へ立ち向かう　笠岡市　藤井智史
独り居に羽化登仙の酔い心地　豊中市　藤井則彦
ふり出しに戻れば見える分岐点　大阪市　藤田武人
涼しい眼拾った財布届ける児童　大阪市　藤原千恵子
本屋閉店街が乾いてきたようだ　和歌山市　古久保和子
そして不祥事は嗤い話になる　さいたま市　星野育子
終活はやめた恋人募集する　神戸市　細川花門
こう見えても必死で生きているのです　大阪市　前たもつ
事情さまざま少子化の世に捨て子あり　東京都　まえでとよこ
少しずつ育って森になってゆく　米子市　政岡日枝子

海に陽が落ちきるまでの万華鏡

主人公のつもり童話の中にいる

ふるさとの訛背負った影法師

おくすりがとてもおいしくなりました

大宇宙ヒト科の棲める星ひとつ

出席に○と返信さくら咲く

立枯れの覚悟を風に試される

配られた温いスープに救われる

傘たたみしばらく思い出し笑い

飯粒のかけらに燃えた昭和の記

口噤む社会は痩せて死んでゆく

無駄すべてなくせば味気ない暮し

マイナスをプラスにかえるありがとう

墨痕の余白に問うている無常

悪友と呼べるうれしい友がいる

呼び水をして青春を引き戻す

枯れ果てた野にも産まれるものはある

豊中市　松尾美智代

和歌山市　松原寿子

松江市　松本文子

青森県(放)　松山芳生

札幌市　三浦強一

豊中市　水野黒兎

松山市　宮尾みのり

京都市　三宅満子

八尾市　宮崎シマ子

八尾市　宮西弥生

羽曳野市　三好専平

堺市　村上玄也

八尾市　村上ミツ子

寝屋川市　森茜

松原市　森松まつお

鳥取市　森山盛桜

米子市　八木千代

ソプラノになった吹っ切れたのですね　松山市　柳田かおる
男にも女にもある古戦場　河内長野市　山岡冨美子
四万キロ挑んで地球好きになる　枚方市　山口弘委智
仲の良い二人の声は響き合う　神戸市　山口光久
老い二人あいこばかりで笑い合う　鳥取県　山下節子
人生のイフ追いかけている枕　尼崎市　山田耕治
年齢だけでトップになってうろたえる　長岡京市　山田葉子
立ち居振舞ちゃんと見ているひ孫　倉吉市　山中康子
不足言えぬ立場で雨に濡れている　吹田市　山本希久子
さ迷うて探しあぐねる着地点　奈良市　山本昌代
やり直しきかぬ齢でも夢はある　岸和田市　雪本珠子
今日も終る心の鍵をいまはずす　四條畷市　吉岡修
真っすぐに駐車するのも心意気　米子市　吉田陽子
結婚式化石の置物と並ぶ　鳥取市　吉田孔美子
勝ち負けのこだわり捨てて碁と遊ぶ　羽曳野市　吉村久仁雄
少し頭下げれば心地よい風に　大阪府　米澤俶子
平成を名残り惜しむか天狂う　奈良市　米田恭昌
私の夢極彩色に塗ってみる　奈良県　渡辺富子



追悼

遠野さんを偲んで

坂　裕之

「川柳塔すみよし」初代の会長・鶴田遠野さんが平成三十年十月二十一日、七十歳で旅立たれました。川柳がなんだか全く解らなかった私に、住吉区民センターの勉強会で「難しく考えないで、今思っていることを自分の言葉で表現して、その中にちょっと笑える事が有れば良いですね」と教えて頂きました。

その後「すみよし川柳会」から「川柳塔すみよし」を立ち上げる時も「明るく元気で常に笑いのある句会にしたい」を掲げて発足しました。五年目の区切りには会員全員の合同句集を発刊。十周年は川柳塔本社と同じ会場で記念句会を催したいと、二年以上前から遠野さんが段取りをされて私たちを引っ張って頂きました。大会当日はガン治療で失った頭髪を隠すことなく、堂々と開会の挨拶をされたのに心打たれました。

記念句会は盛大に行われ、懇親宴も多くの方に参加していただき、満足されている様子でした。その後会長が古今堂蕉子さんに代わりましたが、句会場の確保や句報作成にご尽力頂きなくてはならない方でした。

川柳を愛し、川柳塔を冠に頂いた「川柳塔すみよし」を愛し続けてこられた遠野さんの早すぎるご逝去に、心からご冥福をお祈り申し上げます。

遠野さんの句

ジャンケンで今日も病魔に勝ちました
突然に出家をさせたガン治療
酒の力借りても妻に逆らえず
良妻に今宵も背く千鳥足
倅を叱る妻の言葉が突き刺さる
妻だけにまだくらくらと病んでます
紆余曲折あって笑顔の五十年
大人への階段上る十八歳
奉制球時々投げる妻の勘
賽銭の諭吉は願い知っている

追悼の句

遠野さんタオル見るたび涙する　日の出
ありがとうお疲れさまと遠野氏へ　福貴子
最前列そこに貴方はいつもいた　志津子
遠の字に思い馳せます遠野さん　満知子
残念無念ボクより四つ若いのに　勝弘
名句数多遺し飛び立つ鶴一羽　いさお
お人柄大歓迎の黄泉の国　舞夢
面影が未だそこにある秋の風　重信
空見上げ遠野さんへとVサイン　雅美
遠野さん優しい笑顔目に浮かぶ　廣子
瞬いたあれは師の星冬銀河　ゆみ子
戒名も遠野川柳に夢くれた人　ひろ介
津軽三味ご一緒でした冥福を　ふりこ
遠野さん淋しいですよサヨウナラ　(矢)五月
大鶴が住吉っさんから飛び立った　宏造
遠野弘前吹き流れ来る千の風　久仁雄
遠野さん今まで本当にありがとう　芳香
合唱で遠く旅立つ人惜しむ　妙子
天国は遠い切符買えたか遠野さん　シマ子
川柳の奥義あの世でひとくさり　満作
もう鶴の声は聞こえぬ雲は行く　冨美子
極楽のお酒の味も美味しそう　楓楽
師を学ぶ大義で飲んだ真の友　一歩
納得がいかない弥陀の差配でも　美籠
精一杯頑張ったよな遠野さん　まつお
燃え尽きて遠い国へと旅立った　裕之
天国の句座盛り上げる遠野さん　蕉子

愛染帖

新家 完司 選

（投句277名）

埋め合わせ一度で足りぬフルムーン

（評）安月給を遣り繰りして家庭を守ってくれた妻。苦労ばかりかけた妻。一度や二度の旅行ぐらいでは埋め合わせがつかない。

尼崎市　山田　耕治

生きているだけでポイントつくらしい

（評）そう、一日1ポイント。生きているだけで加算されてゆく。それは、その人の心を美しく豊かにしてゆく年輪というポイント。

大阪市　平井美智子

わたくしは出会った人でできている

（評）Aさんからは音楽の楽しさを、Bさんからは読書を、Cさんからは思い遣りを、そしてDさんからは川柳を。皆さん有り難う！

鳥取県　斉尾くにこ

金木犀香りトイレが近くなる

（評）十月の中旬ともなれば朝晩が涼しくなることに加え、金木犀の香りがトイレの芳香剤を連想させるので…。ということか？

三田市　谷口　修平

りんごが知っていた美しいサプリ

（評）艶々と輝いている林檎。それは、大地が濾過した水と降り注ぐ光をサプリメントとしているおかげ。私達と同じではないか。

青森県　(故)松山　芳生

こんなにも小菊は可愛かったのか

（評）これまで気にも留めなかったことだが、ある日突然「おっ！」と感動する瞬間がある。目ではなく「心の鱗」が剥がれたのだ。

神戸市　冨永　恭子

聞く耳を持っているかを先ずチェック

（評）最初から「反論してやろう」という挑戦的な人や、「聞く態度だけ」という人がいる。頑張って喋るのはエネルギーの無駄。

奈良県　安福　和夫

老母のため付けた手摺りが役に立つ

（評）足元が危うくなった母のために階段や廊下やトイレに取り付けてもらった手すり。今ではそれが「有り難い」歳になってきた。

神戸市　能勢　利子

IPSもGPSも役に立つ

（評）アイピーエスは医学。ジーピーエスは工学。いずれも現代社会では欠かせないものになった。「I」と「G」の違いの見つけ。

米子市　池田　美穂

百にでもなれば終活考える

（評）遺言書作成や希望する葬儀など、やっていると気分が滅入って寿命が縮む。と言っても、百歳までボケずにおれるかどうか…。

岡山市　丹下　凱夫

一人旅かつて左遷の勤務地へ

三田市　北野　哲男

味のある顔にはならず老けただけ

河内長野市　大島ともこ

気に入られ猫のトイレになった庭

倉吉市　大羽　雄大

リズム感よすぎてじっとしてられぬ

黒石市　北山まみどり

日向ぼこ猿とおんなじ事をする

土佐清水市　辻内　次根

ハズキルーペ見たくないもの見てしまう

寝屋川市　籠島　恵子

休日は警察犬もだれている

紀の川市　山東日出男

留守電に何やら怖いアンケート

寝屋川市　平松かすみ

赤ちゃんのだと思ってた紙オムツ

塩竈市　木田比呂朗

頑張ろうともうあかんわのやじろべえ

長岡京市　山田　葉子

赤信号だったと通過して気付く

神戸市　奥澤洋次郎

結論はダイエットよりカツカレー

三田市　上田ひとみ

わろてんか夫婦揃ってトドである

大阪市　江島谷勝弘

河内長野市　渡邊　修
ママランチ子は学食でパパ社食
朝霞市　前田　洋子
事故現場とっても派手な手信号
神戸市　山口　光久
姿見に噛われている朝寝坊
西予市　黒田　茂代
見栄張ったわたしをマンゴーが笑う
松江市　石橋　芳山
チューインガムみたいに犬が付いてくる
八王子市　川名　洋子
あかんべいしながら逃げて行く若さ
京都市　都倉　求芽
オレオレにワタシワタシと返事する
豊中市　松尾美智代
メスはまだ入れたことないけど老いた
弘前市　高瀬　霜石
入れ過ぎてとても持てない非常袋
佐賀県　真島久美子
鮮やかな記憶幼い日のまつり
神戸市　細川　花門
あやふやな記憶昨日の夕ご飯
岡山県　紫　しめの
目歯胃耳腰肩足だけが痛い
沖縄県　森山　文切
シンデレラ実はキッチン・ドリンカー
桜井市　安土　理恵
ディズニーをデズニーと言う人と逢う
大阪市　津守　柳伸
核ボタンいいえ炊飯器のボタン
鳥取県　細田　裕花
尻尾の太さ年収に比例する
池田市　太田　省三
血圧は高めフツーの高齢者
大阪府　高木　道子
明石市　糀谷　和郎
タバコとはコンビ解消して元気
防府市　坂本　加代
太陽へ投げ込めばいい核のゴミ
三田市　福田　好文
使命終え石切り現場湖となれり
大阪府　高木　道子
いくばくの命なりけり眠りつく
松山市　栗田　忠士
松茸の匂い忘れた換気扇
大阪市　津守　柳伸
黄落や隣の柿の頭が高い
鳥取県　細田　裕花
完熟はカラスのほうが知っている
池田市　太田　省三
親友が先に逝きそうススキの穂
大阪市　宇都満知子
道端のアワダチソウがかしましい
仙台市　月波　与生
朝からの場所取り要らぬ紅葉狩り
桜井市　安土　理恵
爪先に夏の名残りのペディキュアが
沖縄県　森山　文切
お薬手帳に書き込む生きる意味
弘前市　高瀬　霜石
もう誰も尻尾をふってくれません
岡山県　紫　しめの
弁解の余地にみかんを置いておく
貝塚市　石田ひろ子
お見事と褒めてつかわす　騙された
橿原市　居谷真理子
一回も開かぬ美術大全集
大阪市　平賀　国和
サイパンの悲劇ありありフジタの絵
沖縄県　禱　モモト
悩まずに見ざる聞かざる脳ぼかす
三原市　笹重　耕三
谷折りの底に隠しておくしこり
鳥取県　西谷　悦子
ご交誼を感謝してますお月様
高槻市　片山かずお
優しいと案外女性にはモテる
和歌山市　古久保和子
衝動買いの按摩機でかい顔をする
羽曳野市　吉村久仁雄
陽明門も僕も変わらず未完成
松山市　柳田かおる
私の収支決算ややプラス
堺　市　梅木　澄空
早寝したきっちり早く目が覚めた
下松市　有海　静枝
やらかしてくれる愚息が居て多忙
大阪市　高杉　力
脳味噌は軽くなったが目方増え
貝塚市　石田ひろ子
咳の出るように感性出て欲しい
鳥取市　夏目　一粋
ポケットに「ノー」を仕舞ったまま帰る

枚方市　山口弘委智
雑踏で見て聞き触れて人を詠む
岡山市　大石　洋子
カレーライスうまくできた日句もうまい
高槻市　松岡　篤
趣味川柳財なし特技物忘れ
大阪市　小野　雅美
川柳より褒められている飲みっぷり
岡山県　山縣のぶ子
てにをはの一つの思案夢の中
河内長野市　原熊知津子
小難しさを前衛的と勘ちがい
東大阪市　佐々木満作
重ね字の「々」の字漢字でないらしい
神戸市　上田　和宏
僕の名は和して宏しと読んで欲し
奈良県　渡辺　富子
とみこですおばあさんとは呼ばないで
鳥取市　前田　楓花
モノ忘れの神が背中に貼り付いた
府中市　岸田　武
強がりを言うとたいてい咳が出る
箕面市　広島　巴子
吸って吐くだめだボタンが外れそう
松江市　中筋　弘充
百越えても婿を忘れぬ偉い義母
笠岡市　小野美那子
後戻りしても黄昏攻めてくる

豊橋市　高柳　閑雲
偽装した理由はみんな自己保身
奈良市　大久保眞澄
建前の全員野球して負ける
八尾市　前田　紀雄
流行語政治不信が多過ぎる
奈良市　阿部　紀子
我が国はなにはともあれ幸せだ
鳥取県　竹信　照彦
釣った鯉妻と解体して賞味
岡山県　藤澤　照代
二千円札見かけませんが達者かな
河内長野市　梶原　弘光
嵐去りブルーシートが幅利かす
大阪市　森　廣子
脇腹にそっと隠した空威張り
寝屋川市　岡本　勲
耐えることだけを教えてくれた妻
鳥取県　山野すみれ
一節の雑音ならば聞き流す
弘前市　高森　一呑
ダム底に村の学校生きている
豊中市　木藤こみつ
5分半私の好きなゆで玉子
河内長野市　中島　一彌
引っ越しで築地のネズミ迷ってる
鳥取市　福西　茶子
短足と笑うな回転は速い

大阪市　藤原千恵子
ボツボツと大きいチャリがヤバくなる
倉吉市　岡崎美知江
無理をした遠出がたたり医者通い
堺　市　村上　玄也
十連休医者が休みで困る老い
大阪市　内田志津子
とびっきり緩いルールで孫の守り
鳥取県　山下　節子
ばあちゃんがママのようです現代っ子
高槻市　初代　正彦
ほいほいと爺ちゃん孫とケンケンパ
沖縄県　宮　すみれ
風を切り昭和平成生き抜いて
神戸市　近藤　勝正
もう80まだ80の心意気
大阪市　金川　宣子
若作りしている人も席探す
篠山市　酒井　健二
お互いの余命は知らずまた今度
高槻市　安田　忠子
年下の彼と時々会い元気
伊丹市　延寿庵野鶴
極楽へメールを打って席予約
鳥取県　石谷美恵子
ジョギングは十万億土への助走
弘前市　福士　慕情
仏壇に隠れた人が出て来ない

祝杯は新酒が似合う秋の夜　岩国市　上村　夢香
晩酌力お蔭で越えた卒寿坂　香南市　桑名　孝雄
鍋パーティー二重丸するカレンダー　松山市　郷田　みや
ジョッキから酒燗器への衣替え　三田市　村田　博
古稀過ぎて芋焼酎の味を知る　羽曳野市　宇都宮ちづる
お酒なら決して誤嚥などしない　藤井寺市　鈴木いさお
ウィスキー蒸発したと言う夫　米子市　伊塚美枝子
るんるんと酒で膨らむ肝っ玉　岡山県　田中　恵
先生と社長で客を引く呑み屋　笠岡市　藤井　智史
本日も飲んでいるから惚けてない　尼崎市　清水久美子
古傷が癒えるわずかなコップ酒　大洲市　花岡　順子
頭痛薬よりも良く効く迎え酒　三原市　鴨田　昭紀
もう一曲唄いタクシー乗る羽目に　豊中市　齋藤奈津子
安下宿友と交わした茶碗酒　富士見市　中島　通則

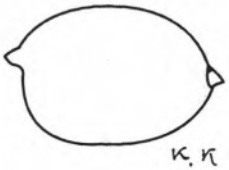
公園で孤老朝から缶ビール　大阪市　樋口　眞
カス汁で真っ赤になるてうらやまし　松原市　森松まつお
下戸ですが唸らす肴たんとある　三田市　足立つな子
酒のアテ隠れた逸品見せどころ　篠山市　澤　良子
ビーマンに罪はないけど食べ残す　岡山市　永見　心咲
鰻屋で軍足見られ蔑まれ　熊本市　杉野　羅天
元号は替わるが変わらないわたし　門真市　坂本　星雨
現金という重宝な贈り物　鳥取市　岸本　宏章
本心の映る鏡を見て化ける　河内長野市　森田　旅人
うきうきで喋り疲れた日が暮れる　西宮市　福田　正彦
ブリっ子をするとその気になってくる　大阪市　森田　遊子
ハイタッチ老人たちは元気です　阿南市　小畑　定弘
おもいきり蹴りかえす力残してる　三田市　野口真桜子
摩訶不思議百歳越えはほぼオンナ　河内長野市　村上　直樹

マイホームローン終われば老いの街　橋本市　石田　隆彦
ポリシーで家族持たない猫のボス　岸和田市　雪本　珠子
夕刊が来るまで猫と睨めっこ　豊中市　藤井　則彦
足かせにならないようにスクワット　香芝市　山下　純子
迷いどき恩師の背なが道しるべ　広島市　岸本　清
クーラーよご苦労だったすぐ冬だ　大阪市　榎本日の出
下町の油塗れが生む特許　富田林市　山野　寿之
クルーズのイルカが迎え高く飛ぶ　熊本県　岩切　康子
ピカソ展みなちぐはぐの貌で見る　札幌市　三浦　強一
若き日に迷った道でまた迷う　山口市　青木　隆子
年毎に水多くする炊飯器　宝塚市　岸田　万彩
この扉開けると青い鳥が待つ　鳥取市　田賀八千代
夜行列車消えて寂れる日本海　三田市　多田　雅尚
孫五歳ピンクの服でチコの真似　寝屋川市　川本　信子

共選欄　檸檬抄

（薫風書、カットとも）

（投句　３４５名）



「鮮やか」　川端一歩　選

あざやかに世相切るペン持っている　奈良県　渡辺　富子
鮮やかに記憶に残る大津波　池田市　上山　堅坊
もみじ一葉添えて白磁を光らせる　桜井市　安土　理恵
鮮やかな赤が何かを訴える　米子市　後藤　宏之
鮮やかな夕陽わたしを締めくくる　岡山県　田中　恵
アルバムを開けば鮮やかな記憶　黒石市　北山まみどり
鮮やかに織り成す紅葉の見事　東大阪市　北村　賢子
鮮やかな笑顔で老いをカバーする　西宮市　亀岡　哲子
アスファルト割ってカンナの朱が燃える　松山市　宮尾みのり
鮮やかに燃えて静かに陽が沈む　大阪市　津村志華子
鮮やかな墨痕誓う今年こそ　男鹿市　伊藤のぶよし
鮮やかに春を寿ぐ実南天　吹田市　須磨　活恵
鮮やかなくれないに染む京の街　京都市　清水　英旺
濃淡のもみじに栄える東福寺　高槻市　初代　正彦
釈迦如来キンピカにした興福寺　奈良県　中堀　優

「鮮やか」　山岡冨美子　選

夕茜いろ鮮やかに返事する　京都市　都倉　求芽
岩木山夕焼け空のシルエット　弘前市　稲見　則彦
八番が打ったさよならホームラン　大洲市　中居　善信
満月に映える銀杏に泣きにゆく　弘前市　高森　一呑
僕の目を貫いたのだ君の瞳が　大阪市　柴本ばっは
ぶっ倒れるまで鮮明に生きる　笠岡市　藤井　智史
鮮やかなウソにホントも舌を巻く　豊中市　藤井　則彦
あざやかな手口に億の金動く　大阪市　津守　柳伸
漆黒のドレスの胸のバラ真紅　堺　市　矢倉　五月
見事な生き様鮮やかな幕引き　藤井寺市　鈴木いさお
鮮やかに二足の草鞋使い分け　大山市　金子美千代
薄れゆく実像鮮やかな影よ　富田林市　中村　恵
鮮やかに咲き競っては手折られる　和歌山市　上田　紀子
西の海燃え立つ夕陽沈みゆく　弘前市　今　愁女
鮮やかな花も茸も毒を持つ　貝塚市　吉道あかね

畝傍山残照鮮やかに夢の中　大阪市　高杉　千歩
岩木山夕焼け空のシルエット　弘前市　稲見　則彦
鮮やかな成果を見たい永田町　四條畷市　吉岡　修
鮮やかに時代きり取る記者のペン　河内長野市　原熊知津子
あれよあれよ藤井聡太の底力　松山市　栗田　忠士
鮮やかに盗塁を阻止ＭＶＰ　神戸市　上田　和宏
いい笑顔だ新人賞と二刀流　松山市　柳田かおる
フェデラーに勝ったストレートで勝った　藤井寺市　鈴木いさお
鮮やかなソフトバンクの下克上　大阪市　樋口　眞
褒められて紅ズワイガニ燃えている　倉吉市　山中　康子
初漁の蟹鮮やかに茹で上がる　三田市　北野　哲男
鮮やかに燃えていたくて黄葉紅葉　寝屋川市　森　茜
青い空がのぞくもみじのすき間から　奈良市　大久保眞澄
秋の田に群青の空鮮やかに　八尾市　山根　妙子
鮮やかに弁に油断をするなかれ　鳥取市　倉益　一瑤
鮮やかなバラにもあったトゲの日々　豊中市　水野　黒兎
あざやかに異なる意見手をつなぐ　八尾市　村上ミツ子
鮮やかな一生棒に振る麻薬　橋本市　石田　隆彦
鮮やかになるまで石は磨かれる　寝屋川市　籠島　恵子
鮮やかな手際の良さが味を盛る　大阪市　坂　裕之
60年皇后の任務描き終えて　大阪市　内田志津子
鮮やかに命を救うオプジーボ　寝屋川市　伊達　郁夫
鮮やかに甦る娘の生まれた日　鳥取市　前田　楓花

喋るだけ喋ってさっと席を立つ　鳥取市　池澤　大鯨
鮮やかな負け爽やかに大拍手　香芝市　大内　朝子
虫干しに息吹く鮮やか五つ紋　大阪府　米澤　俶子
往年の女優８Ｋ気にしてる　大阪市　岩崎　玲子
紅葉の山が被った綿帽子　弘前市　福士　慕情
鮮やかな切り口傷は疼かない　松山市　柳田かおる
黄金の稲穂主はもう居ない　奈良市　山本　昌代
鮮やかな手口で心盗まれる　貝塚市　石田ひろ子
巡礼にしては濃すぎるサングラス　堺　市　内藤　憲彦
鮮やかに鶏頭の赤嫉妬の火　熊本市　杉野　羅天
鮮やかなうっちゃり妻の底力　神戸市　山口　光久
勘定の時には消えている上司　寝屋川市　岡本　勲
ヘアピンカーブ越えたら鮮やかなもみじ　豊中市　木藤こみつ
芋畑鍬持つ亡母は若いまま　鳥取県　門村　幸子
生きる物皆鮮やかに朝日浴び　大阪市　田中ゆみ子
鮮やかに舞うて散りたい九十二　大阪市　髙杉　千歩
暗闇を辻井伸行輝かせ　川西市　山口　不動
鮮やかに脱皮人生やりなおし　桜井市　安土　理恵
鮮やかに騙されやっと老いを知る　出雲市　伊藤　玲峰
二千万画素で小皺も鮮やかに　大阪市　髙杉　力
鮮やかを纏えば背筋伸びている　寝屋川市　籠島　恵子
鮮やかな色で魅せます毒キノコ　堺　市　村上　玄也
鮮やかな青空影を寄せつけぬ　堺　市　柿花　和夫

丹頂の鮮やか鶴の舞い姿　弘前市　今　愁女
鮮やかな負け爽やかに大拍手　香芝市　大内　朝子
血の鮮度上げるため飲む赤ワイン　尼崎市　藤井　宏造
火を噴いて真っ赤なバラが咲き誇る　豊橋市　高柳　閑雲
鮮やかに手を振り切ったのは他人　和歌山市　武本　碧
マドンナは立ち去る時も美しい　長岡京市　山田　葉子
僕の目を貫いたのだ君の瞳が　大阪市　柴本ばっは
墨痕鮮やかに平和の書き初め　塩竈市　木田比呂朗
鮮やかにリンゴの歌と空腹と　米子市　竹村紀の治
舌戦に妻鮮やかなフォール勝ち　尾道市　大本　和子
大往生たった一夜で雲の中　河内長野市　村上　直樹
鮮やかな黄色目に入るゴッホの絵　米子市　伊塚美枝子
鮮やかな色の薬だ効くだろう　唐津市　仁部　四郎
鮮やかな一句オノマトペが利いた　大阪市　古今堂蕉子
鮮やかな落暉が明日を予約させ　札幌市　小沢　淳
木守柿帰って来いというように　大阪市　平井美智子
鮮やかにタクト振ってるススキの穂　堺　市　柿花　和夫
まず白に戻ってからの花言葉　佐賀県　真島久美子
町工場の技術が冴えて飛ぶ宇宙　三原市　笹重　耕三

秀　句

鮮やかに変身昨日過去にする　和歌山市　土屋起世子
鮮やかに虹の尻尾を描き終えた　青森県(故)松山　芳生
眼裏のアウシュビッツよ原爆よ　弘前市　高瀬　霜石

グレイヘアも良し素顔で生きてゆく　大阪市　原田すみ子
もらうもんもらっていなくなるハケン　沖縄県　森山　文切
鮮やかに手を振り切ったのは他人　和歌山市　武本　碧
ショッキングピンクになろう恋しよう　佐賀県　真島久美子
大空を従えている銀杏の黄　橿原市　居谷真理子
マドンナは立ち去る時も美しい　長岡京市　山田　葉子
夕焼けの中で始まるエピローグ　大阪市　森田　遊子
鮮やかなメールだ句読点がない　藤井寺市　鴨谷瑠美子
むらさきの鮮やかな日もあるのです　岡山市　永見　心咲
毛穴まで映すテレビは要りません　三田市　村田　博
鮮明に覚えて居ます焼夷弾　大阪市　森　廣子
鮮やかな一句オノマトペが利いた　大阪市　古今堂蕉子
眼裏に永久に鮮明キノコ雲　札幌市　三浦　強一
鮮やかな紅葉になって落ちる嘘　鳥取県　竹信　照彦
手品師が節穴にしたわたしの目　南あわじ市　萩原　狸月
4Kの画像が暴く元の顔　米子市　竹村紀の治
手品師の一割ほどは魔法使い　仙台市　月波　与生
鮮やかな想い出だけを貯金する　鳥取市　夏目　一粋
鮮やかに虹の尻尾を描き終えた　青森県(故)松山　芳生

秀　句

眼裏のアウシュビッツよ原爆よ　弘前市　高瀬　霜石
神さまの色に染まった茜空　大阪市　平井美智子
鮮やかな私の彩で立ち上がる　松江市　藤井　寿代

97 長寿の秘訣

長寿については本欄のNo.63とNo.64でも書いていますが、その内容は「幸せを感じる機会が多い人ほど長寿」という京大教授の研究を元にしました。今回は中国メディア「東方網」の記事をご紹介します。以下はその記事の要約です。

【約20年に渡り、日本は平均寿命世界一を保ち続けてきた。近ごろ、日本のアンチエイジングの専門家が長寿に関する6大秘密を発表したが、我々がよく知っている運動は4番目であり、第1位に挙げられたのはなかなか思いつかないことだった。これらの6つの秘訣は、寿命を伸ばすのに有益であるばかりでなく生活の質の向上、身体の健康にも役立つ】

その秘訣の6位から順に挙げているのは次の通りです。

6位は「魚を多く食べること」
5位は「ポジティブな精神」
4位は「適度な運動」
3位は「食事の量を腹八分目に抑えること」
2位は「ゆっくり食事をすること」そして、
1位は「目標を持つこと」。すなわち「自分の趣味や目標を持つことが、高齢者が生きる活力を保つ重要な秘訣。明確な目標は生活に潤いを与える他、未来や生きることに対する希望に満ちることが健康長寿にいい影響を与える」。

右の記事は、「食事や運動も大切だが、それ以上に生き甲斐という心理的なものが生命力に大きく作用している」と、理解できます。その点、「川柳」という大きな目標を持っている私たちには嬉しいエールです。

明日あると信じて明日の予定表　津村志華子
さて今日の楽しみ探す朝が来た　尾畑なを江
一日を楽しく生きるのが仕事　平井美智子
爺さんになりきらせない好奇心　北野　哲男
ちょい悪を決めて出てきた生きる欲　三浦　強一
食べる人あって頑張るおさんどん　倉益　一瑤

川柳に予定表は欠かせません。川柳塔誌は毎月15日必着ですから、編集部に迷惑をかけないためにも予定表の12日～13日には必ず「塔へ投句」と記入しておきます。

楽しく生きる原動力は「好奇心」と「若い心」と「目標」です。海外旅行などという大きな目標でなくても、「今夜のご馳走は何にしよう」というのも立派な目標です。

ランチして歌って今日はパラダイス　谷　久美子
フラダンス今日が一番若いから　北村　賢子
免許証返して若いスニーカー　岡村水無月
デパ地下のこのうろちょろが堪らない　伊達　郁夫
車椅子デビュー逢いたくて会いたくて　髙杉　千歩
人間に飽きがくるまで生きてみる　片岡智恵子

楽しいことも人それぞれ、ランチして歌って、フラダンスして、軽やかなスニーカーでデパ地下をうろちょろ。退屈する暇がないということはボケる暇がないということ。車椅子が必要になっても人との接触を避けると心が衰えてきます。人間に飽きるまでこの世に飽きるまで長生きしましょう。

「重　宝」

（投句　222名）

佐藤古拙選



悪役もやってくれそうペアを組む　長岡京市　山田　葉子
雑巾の最期を誰も見ていない　佐賀県　真島久美子
悪人づらが色々役に立っている　羽曳野市　吉村久仁雄
取り敢えずどうもどうもと御辞儀する　大阪市　森田　遊子
メンバーが足りないからと呼びにくる　大阪市　平井美智子
嫁入りの手鍋まだまだ使えます　弘前市　稲見　則彦
北窓を塞ぐ亡父の道具箱　池田市　太田　省三
引出しに子には子なりの宝物　奈良市　米田　恭昌
重宝ですぐゴミになる紙コップ　鳥取市　岸本　宏章
無住寺が増えて子供の遊び場に　高槻市　富田　美義
冷蔵庫欠かしたことのない卵　土佐清水市　辻内　次根
ハイキング重宝してる紙コップ　池田市　上山　堅坊
主婦という名刺を配り歩いてる　富田林市　中村　恵
アナログ夫にデジタル妻がいる　羽曳野市　中川ひろ介
上役の消耗品であったのか　堺　市　奥　時雄
重宝な耳だ悪口聞こえない　倉吉市　山中　康子
忘れるという重宝な武器を持つ　奈良県　渡辺　富子
脇役でいて重宝なきざみ葱　大阪市　津村志華子
花の名も鳥も漢字も電子辞書　松原市　森松まつお
小器用で小走りのきく男だよ　大洲市　中居　善信

サークルにパソコン上手が居てくれる　藤井寺市　太田扶美代
重宝に使われ丸くなった背な　吹田市　木下　敏子
一言が多くてずっと平社員　岡山県　紫　しめの
ハズキルーペ重宝してる秋夜長　高槻市　原　洋志
重宝な言葉が隠れ蓑になる　神戸市　山口　光久
重宝な八重歯を抜歯されてから　青森市　守田　啓子
八〇〇〇歩あるける脚を撫でている　羽曳野市　徳山みつこ
それぞれの得意分野で渡る橋　大阪市　内田志津子
終章も腰の軽さで受けている　塩竈市　木田比呂朗
重宝な想定外と第三者　堺　市　澤井　敏治
重宝にされて正座が崩せない　弘前市　福士　慕情
こじれたら美味しい酒で中和する　堺　市　内藤　憲彦

佳　句

美しい水が流れる村は過疎　篠山市　酒井　健二
LP盤で聴いているイヴ・モンタン　尼崎市　清水久美子
役に立ちます筆入れに肥後守　札幌市　三浦　強一
立っているだけで魔よけにされている　黒石市　北山まみどり
わが部屋に手垢のついた広辞苑　札幌市　小沢　淳

人

重宝な舌だ嘘に砂糖もまぶします　松山市　栗田　忠士

地

鈍感な頭脳敏感な胃腸　弘前市　髙瀬　霜石

天

重宝な満天の星ひとつ拉致　鳥取市　夏目　一粋

軸

ゆき催いむかしはあった掘炬燵

「ロマン」

（投句　223名）

小河柳女選



読了に余韻ふくいく目を閉じる　鳥取県　門村　幸子
愛を照らしたロマンを語る火焔土器　門真市　坂本　星雨
修復の埴輪ロマンを語りだす　高槻市　富田　美義
行間から男のロマン香る文　奈良県　渡辺　富子
せめてもとロマン彩る和紙を選る　倉吉市　山中　康子
遠い日のロマンが眠る小抽出し　大阪府　米澤　俶子
転んで掴む石の欠片が持つロマン　大阪市　森　廣子
生きる糧ロマンポッケに忍ばせる　明石市　糀谷　和郎
パンの耳かじって男夢を追う　松山市　栗田　忠士
新緑のロマンも今は散るもみじ　池田市　奥園　敏昭
ロマンより石ころだらけだった月　高槻市　松岡　篤
男にはドンキホーテの夢がある　札幌市　三浦　強一
指切りの指が抱き続けるロマン　大阪市　平井美智子
縄文のロマンを語る埴輪の目　弘前市　福士　慕情
大正のロマンに会いに夢二展　山口市　青木　隆子
恐竜の骨が語ってくるロマン　河内長野市　中島　一彌
銀河系宇宙のロマン駆り立てる　河内長野市　藤原　克三
懐メロが昭和のロマン呼び戻す　堺　市　村上　玄也
ボク5歳火星の子等と遊びたい　西宮市　緒方美津子
マグロ釣り捌く男にあるロマン　河内長野市　木見谷孝代

夢を抱き無人駅から発ったきり　三田市　堀　正和
アルバムを捲ればロマン立ちあがる　羽曳野市　徳山みつこ
近づけば遠くへ逃げてゆくロマン　鳥取市　夏目　一粋
町工場のネジは宇宙をかけめぐる　松山市　柳田かおる
四畳半ロマンが詰まるボクの城　横浜市　川島　良子
ロマンでは食えず男の貌になる　堺　市　遠山　唯教
ロマンの字握る拳が震えてる　西宮市　福田　正彦
現実に戻れば消えてゆくロマン　三田市　谷口　修平
深い皺たっぷりロマン残ってる　倉吉市　岡崎美知江
一花を咲かせる為に着るピンク　鳥取市　福西　茶子
一人っ子夢ふくらます壁野球　神戸市　上田　和宏
空想をひろげる本を閉じてから　黒石市　北山まみどり

佳　句

手のひらの小さなロマン温める　和歌山市　北原　昭枝
はやぶさはロマンを秘めて天駆ける　大阪市　田中　廣子
琥珀の香夜のロマンを掻き立てる　島根県　原　徳利
酸欠の街で男が追うロマン　和歌山市　上田　紀子
風の吹く木のてっぺんにあるロマン　江南市　脇田　雅美

人

お月様ロマンチックになりたいの　大阪市　笠嶋　恵美

地

女は実　男はロマン線路道　大阪市　藤原千恵子

天

経は海緯にはロマン　岡山市　永見　心咲

軸

卑弥呼の里ロマンあふれる町である

初歩教室

題 ― 姫

居谷 真理子

この初歩教室は課題が出ていますが、誌友の投句欄「水煙抄」は自由吟を8句投句できますね。自由吟（雑詠）と課題吟、皆さんはどちらが得意でしょう。課題吟ばかり作っていたら自由吟が苦手になった、というのはわりとよく聞く話です。何かテーマを与えられ、それに添って発想を広げていくのは作句しやすい一方法です。まったくの「自由」というのは案外難しいことかもしれません。

私の場合も句会や柳誌への投句などで課題吟作りに追れています。けれど初心の頃に先輩に言われたこの言葉を忘れないよう心掛けています。「文芸としての川柳は自由吟にある。課題吟はより良い自由吟を作るための技術を磨く場です」。

さて、今月のお題は「姫」。華やかな題で新年が始まります。

（原は原句　参は参考句）

原 旅に出る時々姫になりたくて　由紀子

古い映画を思い出しました。句が変わりますがお許し下さい。

参 休日はローマで姫になってます

原 万葉の姫に合婚好きを見る　(高)道　子

合婚？合同結婚式ではありませんよね。合同コンパなら合コンです。

参 万葉の姫も合コン好きだった

原 乙姫も陸に上ればヒール履く　徳　利

参 乙姫がヒールで闊歩する陸地

原 「姫様」「殿様」君と分かれて温泉地　こみつ

参 「姫」と「殿」ふたり分かれて掛流し

原 お姫様のポーズを取っている写真　よしお

参 お姫様ポーズで決めている写真

原 姫リンゴ赤く熟して鳥の餌　(伊)美枝子

参 姫リンゴ赤くなる日を鳥が待つ

原 姫という渾名の通りきれいな子　紀美代

参 姫という渾名がついた奇麗な子

原 姫として生まれ農婦で生終える　こずえ

前向きな句に

参 姫として生まれ農婦として生きた

原 月あかりかぐやの姫に盃を　(貝)正　子

参 月あかり乾杯しましょかぐや姫

原 加剰包装姫の動きは窮屈だ　雄　大

過剰包装ですね。この言葉を生かすために説明は控えましょう。

参 お姫様育ちで過剰包装で

原 男児五人いつまでも姫である母　(大)洋　子

参 男五人育てて母はお姫様

原 一姫二太郎願った父の舌打が　(東)美智子

「舌打ち」まで言うとつらくなります

参 一姫二太郎父の願いは叶わずに

原 姫ばかり太郎が欲しい家系です　隆　子

参 姫ばかり太郎が欲しいなどと欲

原 シンデレラサイズだったの若い頃　奈津子

参 シンデレラサイズだったの靴だけは

原 おばたりも姫に変身アラエッサッサ　(澤)良　子

「おばたり」はオバタリアンの略ですか、下五に整えましょう。

参 おばちゃんも姫に変身してワルツ

原 一姫の次も姫姫我が子供　重　男

参 一姫の次も姫姫花盛り

原 姫ですが秋ともなれば男の子です　(大)安　子

五七七になりました

参 姫ですが秋の食欲男なみ

原 鏡には姫と呼ばれた顔がある　三樹夫

参 姫様と呼ばれた頃を知る鏡

原 初孫の姫にメロメロ困る爺　厚子

参 初孫は爺メロメロにさせた姫

原 毎日を姫の気分で本浸り　(門)幸子

参 本読んでいれば私はお姫様

原 掃き留に鶴と言うより姫が合う　光雄

参 掃き溜めに片付け知らぬお姫様

原 温泉の姫の暖簾を潜る婆　恒

「婆」はきつく感じます

参 温泉の姫の暖簾は歳不問

原 できるなら姫を支える付き人に　(高)弥生

参 似合うのは姫を支える役どころ

原 「つや姫」が売り出し中の新品種　ひでお

参 つや姫がお米売場にお出ましだ

原 姫誕生祖父が抱っ子し愛猫放置　洋一

いろんなことを詰め込みすぎました

参 姫誕生猫はほったらかしにされ

原 お姫様だっこ憧れていた時もあり　亜希子

参 憧れで終わったお姫様だっこ

原 清姫の探す安珍鐘の中

参 清姫の愛が追い込む鐘の中　なつみ

原 シンデレラ情報過多でふみ出せぬ　まさる

参 情報を集めすぎてるシンデレラ

原 お姫様抱っこに備え減量中　澄空

愉快な句です。下六が残念

参 お姫様抱っこに備えダイエット

原 楊貴妃のような美人の夢を見た　風露

参 楊貴妃に昨日の夢で会いました

原 赤いべべ姫とわかって待ってるよ　ミヨノ

参 赤いべべ姫の生まれる日を待って

原 50年妻に似てきた姫だるま　勝正

参 50年妻はだんだん姫だるま

原 僕だって銀河で逢いたいかぐや姫　一平

参 かぐや姫いずれ銀河で逢いましょう

原 姫だけ原点とする入試策　(中)優

着眼はいいのに上四になりました

参 姫だけを原点とする入試策

原 人生を捨てたつもりで姫貰う　浮彦

参 人生を賭けて姫様妻とする

原 初めての姫鏡台で今の顔　開子

「初めての」は初めて買ったという意味でしょうか?

参 古ぼけた姫鏡台に映す顔

原 姫ひとり産んで良かった世話をかけ　剛

参 姫ひとり産んで育てて世話になる

原 御侠だが親馬鹿姫に見えている　里子

参 親馬鹿の目にはおきゃんも姫に見え

ゆきさん、課題を間違えられたようです。掲載できませんが悪しからず。

【佳　句】

屋台店姫と呼ばれて50年　不二夫

姫ですよ我が児を抱いた遥かな日　善輔

戦国の歴史の裏に姫の綾　通則

一姫の苦労太郎はわからない　(松)雅子

姫姫とはやされさらに美しく　(立)和子

わが姫は後期高齢紅を差す　和之

僕の妻表が姫で裏が魔女　(川)信子

お姫様だっこも出来る介護ロボ　(池)美穂

【今月の推せん句】

織姫もたまに会うからいいんだよ　岩口のぞみ

紅葉のありったけ着る竜田姫　藤澤　照代

かぐや姫月に還らず僕の傍　敏森　廣光

お知らせ

12月15日締切分「小さい」（担当・高瀬霜石）の発表は、都合により3月号になります。そのために2月号初歩教室は休載となります。ご了承下さい。　（編集部）

川柳塔鑑賞

同人吟　石橋芳山

―12月号から

青のときと出会うBSシネマ館

斉尾　くにこ

青色のイメージは、二面性を感じる。開放感や爽快感、それとは反対に、哀しみや悲壮感ではないでしょうか。このどちらの時に、波長の合ったシネマとの出会いがあったのでしょうか。

キャベツザクザク自衛権など考える

工藤　千代子

難しい政治の事を、料理をしながら考えておられるのか。はたまた、国会の煮え切らない答弁が、腹立たしくてキャベツに当たっているのか。指を切らないように、注意してください。

夕焼けの向こうにあった立ち話

丹下　凱夫

渡辺美里の「すき」の歌詞に「夕焼けの向こうに、優しさが見える。君が好きとても好き～～」だとしたら立ち話は、ロマンチックな回想かも知れません。

世の中の負負負負負負句を作る

藤井　智史

世の中のと、大きく出ましたね。7連敗の傷口はまだ癒えていないようです。最低でも七句はできます。多分その句は自虐的な重苦しい、句になりがちでしょうが、頑張ってください。

姿見の前で若さの稽古する

坂本　蜂朗

知らず知らずに、年寄りの仕草にある日気が付く。せめてもの抵抗に、若さの稽古とは恐れ入りました。ダンディーな年寄りになりたい。

だとしても上から目線消費税

木田　比呂朗

消費税のアップは、仕方ない事は知っている。それで「だとしても」なのです。議員削減、無駄使い、などには知らん顔しておきながら、威圧的に消費税を語るのは、おかしいんですよね・・・

義理と見栄ぎゅっと詰まったのし袋

菊地　政勝

おっしゃる通りです。世間とのお付き合いは全く持って面倒で窮屈なもの。お互いが感じていても、知らん顔はできない。そして厄介なのが見栄。隣近所や会社の同僚が包む金額より、低いようではプライドが傷つく。さてさてどこで折り合いを、付けるかが大問題です。

弥次さんと喜多さんが居る一つ屋根

島　ひかる

年中笑いが止まらない、楽しい家庭が連想されます。長年二人で暮らしていると、話すこともなくなり同居人または、家庭内別居と、世間的には言われがちです。しかし、弥次さん喜多さんとの生活なら、毎日が楽しい事でしょう。

運転免許まずは夜の部返納に

髙橋　敬子

昼と夜では、運転の疲労度注意力など違いがあり過ぎです。そう考えるとこのような指摘も、ごもっともと納得してしまいます。問題は、どのような管理と、遂行ですが、やっぱり無理ですか。いい案だと思いましたが残念です。

詳しくはホームページと素っ気なく

三宅満子

興味ある物などを調べて行くと、突然この案内に出会って、興味が一瞬で冷める。音声ガイダンスも同じで、感情のない音声に途中からどうでもよくなる。人間的な温もりが欲しい。

ときどきは私逆ギレしますから

江島谷勝弘

この手があったかと感心させられた。前もってこのように公表しておけば、「逆ギレ」した時に、「おーそうだったな」と理解してくれそうですが・・無理かな?

感動して観てたら何んやコマーシャル

大川桃花

多種多様な表現で情報が、私達に流れ込んできます。ボーっとして見ていたら置いてきぼりになります。歳を取るとそれを感じることがあり、それが怖い。

塩辛いおかずが増えてきた不思議

藤田武人

歳を重ねて来ると、高血圧・肝臓などに影響があるので、控えるのが当たり前のように思っています。それなに・・オイオイ大丈夫かい??

仏さま今日も戦闘開始です

加島由一

一読した時には、元気にフル回転の忙しい一日のスタートを思い浮かべた。その後で思ったのが、病床にあって病魔との闘いが思い浮かんだ。どちらかは分かりませんが、戦闘と言われるほどの戦いがあるようです。頑張ってください。

何の日か朝の散歩で日章旗

上出修

祝日には各家庭の玄関先に、日章旗が飾られていました。子供の頃には当たりまえの光景だったように思えます。今頃は見かけることが無くなりました。本来は祝日を「めでたい日」として祝っていたようです。今のように何の日か分からない休日も、寂しいものです。

夏去りて急に冷たくなる便座

吉田喜代子

夏場には便座の冷たさが、心地よかった。そして秋になり、朝夕の冷え込みに、便座の冷たさが不快になりだす。笑いと親近感を妙に感じるのは、皆さんも私と同じような体験をしているという、問題の共有性のせいだろうか?

私を嫌う人が居るとは知らなんだ

宮崎シマ子

これまた大胆な句です。普通の人は、私は嫌われていると、考えがちですが、上から目線の高飛車的な発言が、イヤミでなくユーモアのように、聞こえるのも確かで、私としては好きですね。

ふわりふわふわふわと三次会

山崎武彦

心地よく酔っているさまの「ふわりふわふわ」の表現がいいですね、このような酔い方をしたいものです。泥酔ではなくて、酒を楽しんで、今のこの状況を楽しんでいるのが伝わってきます。ですが、三次会で終わってください、それ以上は悪酔いになります。

補聴器を外しカラオケ止まらない

村田博

ノリノリの様子がはっきりと分かります。多分お酒が入ってお気に入りの歌を、マイクを独占して歌っておられる。あげくの果てには、補聴器を外して伴奏を無視して歌い始める。周りの人も同じように、熱狂的に歌って踊り始める。カラオケは終わることなく続く。

水煙抄鑑賞

―12月号から

古今堂　蕉子

見ぬふりをした悔恨が疼き出す

西川千鶴

誰でも一度や二度経験のある事をうまく句になさいました。私も駅でどなられ蹴られている八歳位の子に、飛んでいって抱きしめてやりたかったのに足がすくんで出来ず、あの子はどうしたろうと気になって時々思い出します。

深読みの男に少しある苦味

花岡順子

どんな深読みかどんな苦味か想像をかきたてたられます。しかし男はどんと構えて細かい事に拘らない人が私は好き。

天災は忘れる間なくやってくる

馬場貴美江

天災は忘れた頃にやってくるから備えおこたりなくと思っていたが今や忘れるどころかどんどんやってくる。

若い人は若い若いと言いません

田中けいこ

本当にその通り。老境に入って若さに憧れ少しでも若く見せようと焦り、若いと言われるのが嬉しい歳になって。川柳界では六十代はまだ若い。

鼻歌で歩けば犬もリズム足

澤良子

賢い犬ですね。以心伝心とても良い関係のペットとあなた、楽しくお散歩を！

松茸と今年も店で顔合わせ

池田美穂

同居人の要望で中国産とカナダ産の松茸を買って土瓶蒸しをしました。遠い国から薬をふりかけられてやってきた松茸は味も香りも致しません。国産のはもう何年も店で見るだけです。御愁傷様。

てにをはで行き先変わる一行詩

北山まみどり

おっしゃる通り。だからてにをはに神経を使って頭を悩まします。使い間違うと折角の句が迷い子になります。

二年後の夏が気になる酷暑なり

岸田武

誰もが思ってます。一気に日本の格下がるかも。

月旅行ボクなら被災地義援金

川島良子

ZOZOTOWNの前沢社長の言葉ですね。庶民感覚からずれたこういう発言を聞くと虫酸が走ります。おっしゃる通り義援金にして欲しいですがこういう人は無理です。そして気になる人はお金が無いああ。

今日の気分うす紫のスニーカー

郷田みや

素敵です。にこっとさせてくれます。こんな日の多くありますように

塔誌を待ち望んで喜んで下さる嬉しい句2句

ありがとう夢を運んで来る柳誌

橋本整

明日あたり柳誌届くと待つポスト

若年幸子

毎月の柳誌発刊に当っては、事務の方、編集の皆さんの並々ならぬ努力の出来上がった誌を発送して下さる発送部の方々など、多くの方々の手を煩わしています。どうぞ端から端までじっくりお読み下さい。

エッセー

香川県おっぱこ吟社を訪れて

古今堂　蕉子

十月十三日十四日十五日岡山弓削川柳社の大会に参加したのち、香川県おっぱこ吟社を訪れた。岡山―高松―三本松で下車。改札から「いらっしゃーい」の声、三台の自家用車で会員総出のお出迎えを頂き、姉（中南杏子）と柳友（山根妙子）私はほっとした。

三本松から結構な距離を走って白鳥温泉へ。

そこには懐かしい父の「温泉や座るらかんに寝る羅漢」の句碑がまだ建った時そのままの姿で立っていた。記念撮影ののち昔大会をした宿で昼食をいただく。「今はもう私一人が同人で小さな句会になりましたが」とひかりさんのお話だが、自己紹介をして頂いたら、九五歳の弘さんはバイクで、八五歳のいさむさんはタクシーで句会場までいらっしゃるとのこと。放任さん、はつえさん、よしみさん、ひかりさんと全く息の合った、この上なく川柳を愛する仲間のいることを知ってとても嬉しい気持ちになった。

続いて薫風先生の句碑が立つ海の見える高台に。



「島一つ買って暮らせば涼しかろ」の句碑に会う。海が良く見えたと思っていたが、その後の木の育ちでちょっと遠くなった感じがした。続く高台の「川柳の径」にはおっぱこの方々の句碑がずらりと並ぶ。中には「自画像に少し笑顔を書き足そう」木村あきら「身の丈の幸せでよし福寿草」ひかりの句碑なども建つ。

平成五年記念式には二台のバスに乗って沢山の柳友が関西から出向いてくださった。その頃まだ川柳をしていなかった私はおっぱこの皆さんの飲迎にも、バスから降りられた沢山の方々にも驚いた。今はあの時の写真を見てマーこの方もこの方もと、感謝でいっぱいだ。蘭幸先生もお嬢さんを連れて参加して下さったということだ。

そしてあの世に行かれた先輩の多いこと。主役の二人もあの世。

句碑訪問はもうこれで最後と思い、あちらの皆様に無理を言ってお願いした。

高速バスは二時間余で大阪まで運んでくれた。



（207名）

新年おめでとうございます。

昭和生まれにとっては二度目の改元ですが、私のような庶民にとって、日常にそれほどの差し支えは無いように思えるのですが、どうでしょうか。

それより、消費税のアップなどの身近なことの方がこたえます。

政治はますます民から離れ、格差はさらに広がる…新年からすみません。

今年もナビよろしくお願い致します。

箕面市　出口セツ子

面倒な男一匹飼っている

（評）うんうんと頷いている人、いっぱいありそう。でも、その面倒さが魅力のひとつなのでしょう、きっと。

佐賀県　真島久美子

次の方どうぞと春のドアの前

（評）順番にドアの中、つまり春という季節へ案内してくれるのでしょうか。ドアの向こうで起こるドラマにご期待あれ。

堺　市　大島ともこ

AもBもCもなんて無理でした

（評）二兎追うもの、の教訓はよく知られていますが、こちらは何と三兎を追っていたのですね。すごい。

横浜市　菊地　政勝

馬鹿に効く薬と言われ試飲する

（評）飲みたい飲みたい、本当にこんな薬があれば。でも、世の中、馬鹿が居なくなると面白くなくなるかも、ね。

香芝市　山下　純子

新元号三者密談ではまずい

（評）元号って、誰が何処で何時決めているのでしょうか。もうちょっと早めに教えてくれたってよさそうなのに。

富田林市　関　よしみ

まろやかな味にいつかはなるカレー

（評）出来立てのうちは尖った味でも、トロトロと時間をかけて煮込むうち、まろやかになるのです。カレーも人間も。

尼崎市　永田　紀恵

衣食住足りて余命が足りません

（評）全ての物が満ち足りて、それをさらに満喫するにはどう考えても時間が足りないみたい。たとえ百歳まで生きても。

青森県(旅)松山　芳生

趣味多彩中途半端の見せどころ

（評）中途半端にも見せどころがあったんだ、目からウロコです。趣味の多さは好奇心の多さ、素晴らしい。

河内長野市　大島ともこ

同窓会先ずは褒め合うのがルール

（評）ちょっとコワイですが、女同士、さもありなんですよね。笑顔の陰でお互いのスルドイ目が値踏みしています。

仙台市　月並　与生

印籠を忘れ動揺する正義

（評）アハハ、あの印籠があるからこそ、大見得も切れるのですね。手ぶらではそれこそカッコつきません。

香芝市　大内　朝子

僕達も平和願っているんだよ
和歌山市　古久保和子

肋骨のすき間で鬼ごっこしましょ
大阪市　藤田　武人

呪文解けメダルの正体がバレる
松山市　栗田　忠士

森の気をたっぷり吸ってカフェオーレ
八王子市　川名　洋子

丸くなりとんがったりし生きている
弘前市　髙瀬　霜石

うさんくさい奴の力強い握手
寝屋川市　籠島　恵子

もう一人来るまでカンパイは出来ぬ
池田市　上山　堅坊

葉っぱくんボクを春まで匿って
黒石市　北山まみどり

個性って鍋に入ってからわかる

蝋梅の寒気に遠い人を恋う　大阪市　寺井　弘子
迷わずに進んで僕は凡打主義　三田市　久保田千代
粋だねェ甘酒付きの冬ランチ　横浜市　川島　良子
文殊の知恵か烏合の衆かまだヒヨコ　羽曳野市　吉村久仁雄
冷凍庫から直行のメニューです　米子市　八木　千代
お飾りにするには少し彩がない　和歌山市　上田　紀子
勝手でしょうどうせこの世は個人主義　唐津市　仁部　四郎
山海をグラスに入れてぐいっと飲む　鳥取市　池澤　大鯰
突破口見つけましたと嬉しそう　奈良市　山本　昌代
アウトドア男料理を見るカップ　弘前市　福士　慕情
幸せはやっぱり金の外に有り　河内長野市　穂口　正子
マグカップ他人のために涙する　鳥取県　斉尾くにこ
素足には素足ライバル本気だな　男鹿市　伊藤のぶよし
人恋し一緒に食事でもいかが　吹田市　山本希久子
象形文字の詩を諳んじている駱駝　西宮市　亀岡　哲子

真実を語れば愛がにげて行く　神戸市　山根　弘華
飲み放題もう勝てそうな歳じゃない　四條畷市　吉岡　修
ゆり組の頃から赤いベレー好き　橿原市　居谷真理子
風船は針一本で萎んじゃう　鳥取市　夏目　一粋
年金日ごちそう食べに梅田まで　大阪市　笠嶋　恵美
この冬の灯油の値段どないなる　神戸市　奥澤洋次郎
それぞれの個性信じてみませんか　三原市　笹重　耕三
好きな物食べて長生きするつもり　吹田市　木下　敏子
二百三高地明治生れの母でした　大阪市　柴本ばっは
キッチンが何やら落着かんのです　藤井寺市　太田扶美代
それぞれが思いを秘めて平成史　豊中市　水野　黒兎
炊き出しに人の情が身にしみる　西宮市　髙橋千賀子
結婚します永い春抜けました　羽曳野市　徳山みつこ
カフェテリアきのこ頭は不倫中　沖縄県　森山　文切
家庭にも活火山やら休火山　三田市　北野　哲男

起立礼さあ飛びましょう腕組んで　大阪市　内田志津子
私も干されています日向ぼこ　下松市　有海　静枝
温室で育った息子ですどうぞ　笠岡市　藤井　智史
好きな服好きなもの食べ輝くぞ　三田市　足立つな子
熱燗におでん恋しい空っ風　札幌市　三浦　強一
午後三時ちょっと一服しませんか　藤井寺市　鈴木いさお
あったかいシチューにとても合うビール　東大阪市　北村　賢子
一般に優しい方は無口です　松江市　相見　柳歩
過疎も良しのんびり冬を越そうかな　宝塚市　岸田　万彩
お茶よりもやっぱり酒を待っている　大阪市　原田すみ子
アイドルも笑顔忘れて冬休み　和歌山市　松本　雅子

3月号発表
(1月15日締切)



(平本　勝彦　画)
柳箋に2句

本社 十二月句会

◇十二月七日（月）午後一時
アウィーナ大阪

クリスマスツリーが迎えるホテルで、七日、十二月句会は百三十三名（内投句者八名）の参加で開催された。初出席は和歌山市の福島一雄さん、佐藤まきさん、定松宏枝さん、西川千鶴さんの四名。句会に先立ち、先月亡くなられた同人松山芳生さん（青森県）に黙祷を捧げた。

今月のお話は村上直樹さん。題は「２１００年」。百歳以上の方が約七万人、人生百年と言われる今、百年後を想像してみよう。科学の進歩は、安全安心な環境で、老いず、病まない暮らしをもたらし、人間が神を越える時がくるかも知れない。一方、無用者階級が増え、肝心のお金の調達は難しく、倫理上の課題も予想される。２１００年は、私達には遠いが曾孫の世代を思えば他人事ではない。さて、その頃、川柳は？と楽しく興味深いお話を聞かせていただいた。（眞澄）

月間賞は新家完司さん（鳥取県）

（司会―真理子・隆彦）（脇取―扶美代・勝弘）
（受付―篤・ひろ子）（懸垂幕墨書―耕治）
（清記―憲彦・勝弘）

席題「新　聞」　原田すみ子　選

新聞の隅 真実がうずくまる　鈴木　かこ
ほっとする川柳添えてあるコラム　木本　朱夏
新聞が死んでしまった開戦日　柿花　和夫
何が起こったのか新聞が遅い　中岡千代美
期待した取材に記事が見あたらぬ　能勢　良子
旅先で見る地方紙の郷土愛　坂上　淳司
株式欄今日の機嫌を左右する　西出　楓楽
休刊日何か忘れているような　田中ゆみ子
雨の中新聞ママよありがとう　川端　一歩
右左こうも違うか社の主張　中島　一彌
使い道たくさんあった新聞紙　横山　里子
古新聞協力します子供会　宇都満知子
新聞をやめ恋しくてまた取った　宮崎シマ子
新聞のわが身あしたは資源ゴミ　水野　黒兎
地方紙が郷土力士に熱視線　村上　玄也
笑みこぼし子ども新聞読んでいる　山本　昌代
新聞が未知の世界を連れて来る　鈴木　かこ
新聞を疑いながら読んでいる　片山かずお
新聞の切り抜き集めそのまんま　鈴木いさお
正月の新聞だけは買いに行く　木嶋　盛隆
そだねーに決まりほっこりしてしまう　山崎　武彦
束ねるの待ってよせめて一週間　安土　理恵
古新聞ほどの存在感わたし　西出　楓楽
見出しだけカンニングするスポーツ紙　山田　葉子
娘を生んだ日を記念する新聞よ　大内　朝子
ヒマなのにいつも夕刊斜め読み　初代　正彦
怖いです活字になれば信じます　西川　千鶴
阪神勝ったぞ早く来い朝刊　能勢　良子
埋草に四苦八苦です編集部　柴本ばっは
自宅まで配る文化よいい日本　川端　一歩
なんとなく淋しい日です休刊日　江島谷勝弘
新聞に乗るのはやめてくれ三毛よ　山田　耕治
一番に天声人語から夜明け　平松かすみ
声の欄共感してる独り言　上山　堅坊
一冊の点字新聞から光　木本　朱夏
朝刊に故郷の天気見る安堵　森田　旅人
新聞を父に手渡す初仕事　山下　純子
佳

新聞のコラムに胸のトゲ抜ける　荻野　浩子
新聞を拾い読みして爪を切る　山東日出男
新聞の投書でやっと信号機　渡辺　富子
大掃除畳の下に見た歴史　萩原　狸月
新聞の見出し楽しみ新元号　石田　隆彦
人

生存確認新聞屋が頼り　横山　里子
地

新聞が私の朝を立ち上げる　山岡冨美子
天

新聞は私の長いお友だち　上田ひとみ
軸

新聞からオンリーワンをスクラップ

兼題「破　る」　今井万紗子　選

しきたりを破ると浮かび出るヒント　藤井　則彦

冷ややかな視線破ったまま孤独　小野　雅美
破天荒なトランプ流が嵐呼ぶ　村上　玄也
常識外れネコに相続するという　太田としお
破り捨てた外れ馬券が風に舞う　坂上　淳司
孫三人帰って障子貼り替える　油谷　克己
静寂を破るくしゃみの二連発　森松まつお
古日記破って空気入れ替える　内藤　憲彦
アスリート記録を破るのが使命　大浦　初音
壁破る覚悟の一歩踏みしめる　松原　寿子
真っ直ぐな子の眼に約束破れない　山崎　武彦
わたくしの弱さを破るのは自分　飛永ふりこ
古日記破いたあとの深い闇　内田志津子
自らを破門にしたか貴乃花　上田　和宏
ジーパンの破れに若さ覗かせる　升成　好
赤ちゃんは紙破る音好きらしい　佐藤　まき
頁繰る自分の殻を破るため　山岡冨美子
門限を破る思春期ど真ん中　飛永ふりこ
輪の外へ出てから古い殻破る　藤田　雪菜
破られぬ殻が背中にへばり付く　西川　千鶴
喜寿過ぎてなお老いの殻破る意気　水野　黒兎
破れたら母は器用にアップリケ　平松かすみ
約束を破る決意にある打算　柿花　和夫
貼り替える障子を遠慮なく破る　新家　完司
半歩でも進んで殻を破りたい　鈴木　栄子
破れジーンズ履くと足取り軽くなる　能勢　良子
しきたりを破れば変る風の色　初代　正彦
常識を破ると見えぬものが見え　升成　好
袋とじこっそり破る喫茶店　中島　一彌

だんじりの屋根で父ちゃん破れてる　柴本ばっは
言い訳は全て見破る母の耳　米澤　俶子
歩数計記録を破る今日の汗　平尾　定昭
命の殻破って雛はふ化をする　前　たもつ
しがらみを破ると見えて来た明日　小川賀世子
難産の静けさ破る呱呱の声　平賀　国和
暴風雨家路に急ぐ破れ傘　山東日出男
門限を破り大人に成って行く　青木　公輔
佳
青春の爆走靴下の破れ　山岡冨美子
やぶられるために生まれる新記録　澤井　敏治
日めくりを破り私の朝にする　田中ゆみ子
一本の傘が二本になる破局　山野　寿之
日めくりを破る余生の音がする　居谷真理子
人
殻破り次の生命が弾み出る　上田　和宏
地
バリケード破ってパリは燃えている　木本　朱夏
天
誓っては破るヒト科の愁嘆史　島田　誠一
軸
愚痴小言破るつもりで書く日記

兼題「らしい」　佐々木満作　選

秋深し古都らしく鳴る寺の鐘　矢倉　五月
それ以上それ以下でないのが僕らしい　清水　英旺
自立心「らしく」生きろと父の檄　米田　恭昌
失恋らしい黙っていよう冬木立　酒井　紀華

母になるらしいレモンを丸齧り　米澤　俶子
きっと恋少女のようなあの仕草　山下　純子
憎らしい言葉覚えた愛らしさ　宇賀　史郎
子供らしい遊びが消えたポケットよ　山本希久子
遅すぎたらしい萎れた花の色　木本　朱夏
本物より本物らしい食見本　藤井　宏造
夫婦らしい愛の形になって凪　渡辺　富子
落ちつきのない目が泳ぐ嘘らしい　木本　朱夏
妻らしく三歩さがって舵を取る　田中ゆみ子
万博とセットらしいぞ都構想　内藤　憲彦
嫁に似て憎らしいこと孫も言う　丹後屋　肇
男らしく育てたはずがニューハーフ　木嶋　盛隆
自分らしい笑顔でゆるり幕を引く　村上　直樹
日本らしさギュっと詰まった五七五　上田　和宏
ボーッとして知らぬらしいなチコちゃんを　内藤　憲彦
母らしい文が添えられ栗や柿　山本　昌代
好きにせいもう許してる父の背　山崎　武彦
ときどきはよそ見したっていいんだよ　上田ひとみ
逝く時もあの人らしい樹木希林　石田　隆彦
らしいからほんまになってゆく噂　大内　朝子
それらしい口説き文句は聞き飽きた　山岡冨美子
わざとらしいお世辞耳を擦り抜ける　中村　恵
京ことば女らしさをアップする　大浦　初音
ご機嫌らしいもう掃除機が踊ってる　村上　直樹
日本人らしさ無くした日本人　西川　千鶴
帝塚山のご婦人らしい値切らない　細川　花門
生涯を旧仮名づかい母の文字　定松　宏枝
馬鹿らしいがまだ憧れる老いの恋　水野　黒兎

母らしいパッチワークのよい針目　平松かすみ
匙加減効いたらしいぞ痺れだす　柴本ばっは
フィクションと言うがほんとの事らしい　米澤　俶子
書道展もっともらしい顔で読む　澤井　敏治
離婚して卒婚なんて言うらしい　荻野　浩子

佳

ポイ捨てを拾う神様らしき人　新家　完司
わたくしのらしさは絶やさない笑顔　大内　朝子
親らしいことはしないが子は育つ　斎藤　隆浩
私がわたくしらしくなるお酒　山野　寿之
らしいらしいで真相誰も確かめぬ　安土　理恵

人

画家らしさ醸し出してるベレー帽　藤井　宏造

地

私らしく生きる泣いたり笑ったり　渡辺　富子

天

あなたらしい言葉で紡ぐ愛の糸　松尾美智代

軸

奔放に生きてるらしい噂聞く

兼題「向　く」　三宅　保州　選

新元号へすでに猪向いている　松原　寿子
前向きに検討すると言ったまま　堀　正和
園遊会にはやはり和服が向いている　木藤こみつ
裏切らぬお金の音に顔が向く　小野　雅美
振り向けばアッカンベーをされていた　村上　玄也
若者の特権すべて明日へ向く　油谷　克己
右向け右左の景色見えません　緒方美津子
あっち向いてホイには負けた事がない　森松まつお
こっち向かないでって念押したのに　島田　握夢
声かけてもそっぽ向いてる反抗期　大浦　初音
花で飾られ戦場へ向かう道　新家　完司
追い抜いてそれが美女でも振り向かぬ　川端　六点
前向きの男が問わぬ風の向き　升成　好
前を向く涙がこぼれたっていい　居谷真理子
南向きの部屋は家賃が高くなる　片山かずお
どっち向こうか風が読めない風見鶏　森　廣子
気が向くままの寅さんになりたいな　江島谷勝弘
一年生いろは覚えて前を向く　前田　紀雄
右向け右知覧の闇に舞う蛍　澤井　敏治
愛あれば犬猫だってこちら向く　福島　一雄
前向きに生きて闇魔は寄せつけず　村上　直樹
そだねーと向き合うほどに座は弾む　藤井　則彦
どんとこい冬の嵐に立ち向かう　飛永ふりこ
前を向き走るしかない十二月　山岡冨美子
テレビよりラジオ向きだとほめられる　敏森　廣光
向き少し変えると糸口が見える　山岡冨美子
向きあえば見えないものも見えてくる　米澤　俶子
逸れた矢がやがて私へ向けられる　小野　雅美
スパイスの笑顔で風向きまで変る　山本希久子
向き合えば胸のしこりもとけてくる　荻野　浩子
行く先は決めずぶらりのボヘミアン　指宿千枝子
ふり向くと母の笑顔と鉢合わせ　山本　昌代
自信家の鼻がだんだん上を向く　森松まつお
野仏に手向けた花の名も知らず　木本　朱夏
向き合って違う景色を見る夫婦　藤田　雪菜
羅針盤は明日に向けて舵を切る　木本　朱夏
ペシミズム楽な方へと足が向く　西出　楓楽
向き合うと我を忘れる阿修羅像　藤井　則彦

佳

振り向けばカルテをにらむ医師の顔　能勢　良子
失意の日里の山河へ足が向く　渡辺　富子
振り向くとわたしの影に角がある　石田ひろ子
形状記憶した靴が向くけものみち　澤井　敏治
振り向くな明日はきっと花開く　斎藤　隆浩

人

右向け右そんな時代がこぬように　上野多恵子

地

人の顔前向くように出来ている　原田すみ子

天

補陀落へ一方杉の固い意志　吉村久仁雄

軸

私を鍛えてくれた向かい風

兼題「若　手」　木本　朱夏　選

青春はＶＡＮで揃えた良き時代　村田　博
ロボットと若手に託す近未来　伏見　雅明
武器は若さドクターヘリは今日も飛ぶ　緒方美津子
真っすぐな十五の青い自己主張　升成　好
地図にない道を真っ直ぐ行く若さ　山﨑　武彦
奔放に振る舞う青い力こぶ　中村　恵
時給千円では寄ってこぬ若手　上野多恵子
風呂屋では爺さん句会では若手　内藤　憲彦
子や孫に死んでも負けたとは言わん　細川　花門

年移り若手はいないニュータウン　米澤　俶子
定年が里の若手になる帰郷　萩原　狸月
過疎の村若手の腰も曲がってる　吉村久仁雄
町内会若手が杖をついて来る　堀　正和
蘖を切るか伸ばすか人の道　中島　一彌
ヤングマン西城秀樹若かった　三宅　保州
若者は平和九条無関心　細川　花門
つけまつげ若手と言われ五枚貼る　小野　雅美
まだ傘寿若手ホープの自負に生き　村上　直樹
既に喜寿若手のホープだった過去　北野　哲男
ハズキルーペ掛けておしゃれという若手　澤井　敏治
甘えとこ今は若手が燃えてはる　山本　昌代
シニアには眩しい時がある若手　森松まつお
若手の意見を聞く耳持ってくださいな　上野多恵子
老骨も心は若手恋もする　水野　黒兎
若手ぶっても背のまあるい影法師　澤井　敏治
年の差はあるけど若い輪に入る　安土　理恵
シニアの中若手が空気変えれるか　立蔵　信子
悔しかったらし上がって来い若手　中岡千代美
酒だけは若手どもにはまだ負けぬ　新家　完司
君たちが主役平成後の若手　水野　黒兎
川柳界五十代なら超若手　江島谷勝弘
発案は若手にまかす会議室　立蔵　信子
若手若手と言われてちょっと無理をする　太田扶美代
若いのね白眼も白い歯も白い　居谷真理子
スマホさえあれば彼女も飯も要りません　島田　握夢
二回り若い妻です疲れます　太田としお

もたついてきたが気分はまだ若手　新家　完司
佳
出世より家族大事という若手　西出　楓楽
悩みなさいそれが若さだ今のうち　柴本ばっは
きれいなあ手柄若手に譲ってる　松岡　篤
ポジションを譲る若手に期待して　久保田千代
若手だと言われた頃は虹のなか　黒岩　靖博
人
祭り笛みんな若手にしてしまう　山岡冨美子
地
枯草の中に新芽の準備中　森　廣子
天
バトン渡す若手が待ってくれている　山田　葉子
軸
殴られて殴り返して伸びてきた　新家　完司

兼題「永遠」　小島　蘭幸　選

永遠の命をつなぐ術はない　大杉　敏夫
永遠にあの世の地図は作れない　奥村　五月
四季の歌永遠の恵みが降り注ぎ　山根　妙子
火葬場のけむり永遠の言霊　小野　雅美
戦闘帽父は凍土に眠ってる　田中ゆみ子
ガリレオの振り子はずっと揺れている　山東日出男
永遠を信じ磨いてきた小石　太田扶美代
永遠の愛を求めてまだ独り　能勢　利子
永遠の若さ575と共に　油谷　克己
流暢な関西弁は不滅です　升成　好

永遠にお酒はボクの友である　川端　一歩
永遠に枯れない花が淋しそう　田中ゆみ子
爺ちゃんの枕の下の原節子　平井美智子
親の愛だけは永遠 星月夜　森田　旅人
永遠に歩く未完成のわたし　石田ひろ子
永遠というとりとめのない時間　片山かずお
煩悩が鳴らし続ける除夜の鐘　平賀　国和
永遠と言うから誰も信じない　伊達　郁夫
永遠の命琥珀に閉じ込める　西出　楓楽
永遠の愛などないと冬鴉　横山　里子
引き続きあの世で句会やりましょう　太田としお
永遠はなくても明日はありそうだ　山本希久子
永遠が夢ポックリはもっと夢　吉村久仁雄
永遠に続くだろ男女の神秘　米澤　俶子
永遠という字を描くと母になる　山岡冨美子
男らが愛する「永遠に不滅」　居谷真理子
若い日の錯覚でした「永遠の愛」　鈴木いさお
元気です死ねないのではないかしら　片山かずお
マンモスの眠り覚ましたのは誰だ　山田　耕治
果しなく続く喜怒哀楽の叫び　山﨑　武彦
生き様を永久に残した樹木希林　長谷川崇明
あの世でもまだ終らない円周率　藤井　則彦
永遠と信じたくなる青い空　宇都満知子
ずっとこのまま泥臭く青臭く　大久保眞澄
永遠に人は争いつづけるか　森　菊江
永遠の翼を持って極楽へ　降幡　弘美
永遠に二十九歳 鶴彬　鈴木いさお

佳

マリアテレサの美しさは色あせぬ　小川賀世子
永遠にしよう路郎忌合祀祭　清水久美子
封印しました二人の風景画　鈴木　かこ
君と居ることがぼくには永久の春　水野　黒兎
ガウディの窓には永遠が見える　鴨谷瑠美子
人
永遠を見た夕焼けの向こう側　木本　朱夏
地
永遠に生きたいようでないようで　柿花　和夫
天
不滅だと叫ぶセイタカアワダチソウ　新家　完司
軸
句碑句集我が生き様は不滅です

平成30年本社句会皆出席者　（37名）
（1月～12月）　（順不同）
油谷克己　上山堅坊　榎本舞夢　磯島福貴子
小野雅美　坂　裕之　澤井敏治　居谷真理子
島田誠一　初代正彦　鈴木栄子　内田志津子
立蔵信子　伊達郁夫　内藤憲彦　宇都満知子
中村　恵　西出楓楽　能勢良子　江島谷勝弘
藤井宏造　前たもつ　松岡　篤　太田扶美代
水野黒兎　森　廣子　前田紀雄　大久保眞澄
山野寿之　山田耕治　片山かずお
木藤こみつ　鈴木いさお　松尾美智代
森松まつお　山岡冨美子　吉村久仁雄
（記載漏れの方はご連絡ください）

句会燦燦

十一月句会を読む　弘津　秋の子

助手席の孫に黄だよとにらまれる　矢倉　五月
鬱の字はハズキルーペで見てからね　矢倉　五月

席題の「正しい」というキッパリとした言葉を二句とも感覚で受け止めた句で面白い。孫は大人より正しい。ハズキルーペは拡大眼鏡の商品名であるが今や巷を席捲する勢いである。流行の言葉は二番煎じになるとハードルが高くなるから要注意となる。

朝毎に飲んでる薬名がいえぬ　緒方美津子

ジェネリックの薬の名は覚えにくい。例えばリーゼという優しいネームがクロチアゼパムという怪獣のような名になる。なぜこうなるんだろう。ハテナから句が生まれてくる。

澄んだ目になって出てくる美術館　藤井　宏造
洗いざらい喋る覚悟の深呼吸　升成　好

「美術館」「深呼吸」の止め方が上手い。人物像がパッと浮かんできて自分と一体化する。いい気持ちである。

洗濯機に入れてやりたいヤツが居る　江田島勝弘
丸洗いしたい男と住んでいる　山崎　武彦

川柳で留飲を下げるのも心の健康保持になる。男が女になって読むのもオーケーである。両方とも女性の句かと思ったのでビックリです。

太っても安心できる服ばかり　酒井　紀華

紀華さんの幸せな顔が見える。安心は幸せのお薬。

平成の何を伝える長い列　鴨谷瑠美子

具体的な事柄を問われると誰も答えない。長い列はそんな時代の列である。瑠美子さんの眼は冷静である。

五十年妻を一度も褒めてない　福田　好文

ラストは絶句の句を選ぶ。不器用な男の愛の一句と読む。

川柳塔WEB句会　兼題「　金　」

＊平抜きは到着順
＊webサイトと内容に齟齬がある場合、webサイトが正

11月例会入選句　投句数448句（232名）樋口由紀子　高瀬霜石　共選

樋口由紀子　選

やけくそだなぁと金魚に見抜かれる	雨　径
キャッシュレス言うてもちゃんと金はいる	吉岡　修
金曜日カフカが空をとんでいた	たぶん
中学のバザーで金字塔を買う	たぶん
満腹になると貧乏忘れてる	乙川　初音
卓袱台でウインク豚の貯金箱	絹田　あさ
ストローの中を流れていく金庫	絹田　あさ
キンとかね響きに変な格差ある	くみ
赤飯の粒がついてる金一封	咲山　敬
フライパンで焦げ目をつけて金曜日	鷹匠みどり
グーチョキパー財布の金がなくなった	小池　徹
ブレ金も花金と共死語となる	ひろパパ
残金を二度いや三度見て夕日	甘　酢
五円玉の穴からのぞくハリセンボン	細田　陽三
甘納豆食べて算盤はじいてる	姫野　恵理
ぬかるみに金の草鞋がはまりこむ	十六夜
この列はきっとお金を配ってる	森野　ハナ
黄金虫くらいの色気なら放つ	心　咲
百年後のために緑の羽つける	岡田　菊三
おみせやさんに「ひゃくまんえん」を渡す	森山　文切
ポケットでサンバルンバを踊る音	太田アキラ
忖度がパクパクしてる金魚鉢	澤井　敏治
浴室にあふれ返っているお金	東　たか恵
チャリンといえば振り向いてくれる人	みかん
お値段と不足金とがほぼ同じ	森下　博史
５００円でまさかりを売る金太郎	真鍋　博秋
延べ棒は欲しいが仕舞う場所がない	佐藤　彰宏
銀銅も金が上だと思ってる	アズスン安須
金箔のふわふわ笑い上戸です	田村ひろ子
金メッキ剥がれて丸出しの昭和	藤井　智史
平凡な余生でいいが金は要る	上山　堅坊
お金など無いけど庭に柿がなる	饗庭　元子
佳５　代々の山椒擂粉木金盥	岩根　彰子
佳４　金魚は幸せか俺は幸せか	尾崎　良仁
佳３　最後まで鶴になれない金の紙	西沢　葉火
佳２　金太郎でも金次郎でもない息子	立花　穂香
佳１　金閣寺ちょっと揺らしてみたくなる	朝妻久美子
人　中尊寺ですねその目のかがやきは	柴田比呂志
地　丸－るくて軽－るい金曜日のパン	雨森　茂喜
天　お金持ちになるにはとても低い鼻	山田　哲男

高瀬　霜石　選

満腹になると貧乏忘れてる	乙川　初音
閻魔様これが有り金全部です	丘　きらら
妻の顔ちらつきながら給料日	近石ひとし
逆風の中でお金を数えてる	細田　陽三
銀行が粗品をくれる年金日	柴崎　幸風
お金持ちといしょに行ってみたい月	根元ゆかり
金策に走ると出会う水たまり	心　咲
金冠と裸がとても似合う王	糀谷　和郎
金メダルあげたい人が側にいる	やっこ
忖度がパクパクしてる金魚鉢	澤井　敏治
ガンに安心金に心配オポジーボ	岸田　万彩
銀メダルじゃダメなんですか蓮舫は	昌　紀
お値段と不足金とがほぼ同じ	森下　博史
美しく生きるためには金が要り	光畑　勝弘
年金はお金じゃなくて生存費	寺川　弘一
へそくりの在り処遺影が知っている	藤田　武人
被災地の田にも黄金の穂が実る	坜　山　繁
金箔のふわふわ笑い上戸です	田村ひろ子
金曜のネオンが僕をはなさない	山岸　健二
お金など無いけど庭に柿がなる	饗庭　元子
金魚は幸せか俺は幸せか	尾崎　良仁
立て替えた金はしっかり覚えてる	山中あきひこ
金閣寺ちょっと揺らしてみたくなる	朝妻久美子
引き金を引こうか街はクリスマス	石橋　芳山
懐が暖かいのでもう一杯	月日　備人
借金はしない年金は足りない	広瀬　宏和
お金には縁がないけど金庫番	岸井ふさゑ
借金を言えぬ故郷の青い空	伊藤　良一
フリーター時給換算速くなる	由　美
金魚にも尻向けられている私	菊池　文徳
子が巣立つ金の心配もうしない	やひろ
迷路から抜けられぬまま金曜日	美馬りゅうこ
佳５　振り上げた拳下ろせぬドルと元	木田比呂朗
佳４　冬の蟻お金の話ばかりする	くみくみ
佳３　沈黙が金なら恋は進まない	はぐれ雲
佳２　教頭の口元ゆるむ金曜日	甘　酢
佳１　今週の自分を褒める金曜日	葵
人　横綱が休み金星もらえない	藤井　康信
地　幸せの絶頂だった金屏風	坂本　星雨
天　お金より大事なものが咲いている	ナッツ池本

投句方法　【川柳塔】を検索→【川柳塔 WEB 句会】をクリック

senryutou.net　（サイト管理　森山文切）



毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。
編集部

川柳塔すみよし　森松まつお報

ありがとうお疲れ様と遠野氏へ　福貴子
おしらさまに逢いに逝かれた遠野さん　ばっは
合掌で遠く旅立つ人惜しむ　妙子
継ぎ接ぎもお古も穿いた戦後っ子　久美子
遠まわりした幸せをかみしめる　舞夢
遠花火あの日は夢の中に住む　克己
ノーベル賞も癌撲滅はまだ遠い　たかこ
色恋に泣いた笑った遠い日々　志津子
かぐや姫あなたの出生は問わぬ　勝弘
筒の中何が出るかと夢がある　廣子
筒っぽの野良着八人子を育て　里子
異次元の世界をのぞく万華鏡　直子
あやかりたいモデルの美貌富と財　ひろ介
生き方のモデル示した樹木希林　公平
モデルの服やがてやがては雑巾に　シマ子
ニューモデルばかりを追って闇に落ち　大輔
反戦を説いたモデルに鶴彬　隆昭
赤ひげをモデルにしてる町の医者　まつお
人生の狭間にひそむ甘い罠　満作
喜怒哀楽隠し切れない狭い家　久仁雄
こせこせと悩めば秋天が笑う　満知子
写経から自分の狭さふと気付く　ふりこ
ワンルーム鈴虫鳴いて寝つかれず　日の出
二人なら狭くはないさ傘の中　雅美
狭き門目指す娘が誇らしい　民子
頑固一徹眉間の狭いお爺ちゃん　ゆみ子
狭い家少しすこしと物減らす　美世子
夕焼けがきれいに見える狭い部屋　芳香

和歌山三幸川柳会　楠原　富香報

うみんちゅが守る辺野古の青い海　日出男
旨い物食えばケンカも丸く済み　准一
的の後ろに誰かかくれていませんか　弘子
もやもやを吐いて心に風通す　俶子
的はずれそんな話に場が和む　よしこ
いよいよの際に繁昌店じまい　起世子
免許証の返納子等が急き立てる　義雄
人間がにんげん的にする戦　純子
停電に成すすべもなく横になる　宏枝
的を射たジョークで風が丸くなる　ひろ子
走り切りふたり静かな日々送る　当代
少年に一直線の白い道　幹子
両側に言い分があるやじろべえ　澄夫
米びつの底を覗いてから決める　和子
的を決め揺れる心の楯とする　一歩
天災は想定外と諦める　一雄
急ぐとも走って行けぬもどかしさ　まき
お見事にバランスとって山車の上　康則
目的があれば何でもない苦労　富香
御喋りな母と寡黙な父が添い　千鶴
修練を積んで大きくなった的　次根
人指し指を自分に向けるナルシズム　宏夫
触れ合って心の的を掴んでる　昭枝
標的にされてた頃が華だった　保州
人生百年いのちのバランスがきれい　明子
的少しずらせば見えてくる明日　美羽
思惑をじっくり煮込む鍋の底　碧
踏ん切りがつかず助走が止まらない　知香
的を射るそんな姿に憧れる　絹子
利に走り後日悔みが押し寄せる　敏照
頼られて男気だけが先走る　智三
凛とした恩師みんなの的だった　美枝子
いよいよとなれば蛙も井戸を出る　昇
バランスのよい秋の音符に癒される　あき子
その時は一枚岩になる絆　菜摘

川柳塔唐津（佐賀）　仁部　四郎報

あふれ出す皇后様の胸の内　蜂朗
被災地の民を憂える両陛下　高明
法律の長い名前にある奇策　四郎

東京の曽孫を抱いて見つめ合い　實

川柳塔みちのく（青森）　稲見　則彦報

少年の汗が実った野球帽　劦
りんごもぎ道たずねると一ツくれ　小とみ
肖像画ずれても追ってくる視線　風来坊
いざとなれば後ろの正面お見せする　則彦
冗舌な詐欺師が語る上手い罠　重虎
地元から見えるお山が正面だ　美鈴
断捨離に過去の微罪が絡みつく　慕情
口車乗ってみようか孫ならば　隆樹
向かい風素直に受けて奮い立つ　洋子
ペン胼胝をかざして浴びる紙吹雪　黙人
一人だけ脇見の写真反抗期　初枝
喜寿過ぎし悩みだんだん深くなる　一呑
赤ちゃんはぐずって泣くけど悩まない　京子
終章の案がなかなか実らない　柳子
税金でわずかな実りとられます　孝子
チョット待て乗ったら最後くちぐるま　のぶよし
あの人のつぶやき世界中を悩ませる　英子
口車そんなにうまい話なし　真由美
あなただけ今だけ利息が10万円　吹喜
振り向けばいつも亡父がいた正面　芳生
正面から入る事ない秘密基地　ひとし
川柳は選者と僕の喧嘩です　龍馬
腹の虫抑えストレス溜めている　ふさゑ
酒煙草好きで禁止の誓いたて　花峯
バーゲンセールまだまだ血湧き肉躍る　霜石
口車にまんまと嵌まる虚栄心　呑舟
しみじみと津軽の四季をかみしめて夜　和香子
幸せは待つものじゃなく掴むもの　規子

はびきの市民川柳会（大阪）中川ひろ介報

わがままを許した頃は惚れていた　まつお
けじめつけねばカレンダーあと二枚　みつこ
蟠りを捨てて許した過去の罪　壽峰
ふだんは枯木同窓会で花咲かす　ちづる
許す気の先に求めに行く握手　欣之
ケンカは許すがいじめは許さない　いさお
許さない許す花占いで決め　冬のト
ごめんねの一言あって子を許し　久仁雄
許し合い夫婦それから五十年　髙鷲
お花お茶免許持参でお嫁入り　かつ美
あの時の夫の寝言許そうか　瑠美子
消費税上げたら枯れてゆくニホン　専平
風に身を任せて暮れる枯尾花　久仁子
心では許しながらの痴話喧嘩　シルク
恋心枯らしてなるかいつ迄も　千鶴子
言の葉を届けてくれた風の便　雄太
汗かけど稼ぎ追い越す消費税　紀雄
あれそれで互いに許す老い二人　一文
許したらあの日の我慢嘘になる　さくら
人生の栄枯盛衰かみしめる　フジ
名優の円熟美増す枯れた芸　喜久子

佳句地十選　（12月号から）

谷口　義　選

安心して話せる人のそばにいる　辰雄
王様はハダカさて君はどうします　眞澄
早起きをするから早く眠くなる　いさお
ここまでは無事にきましたあと着地　美津子
ゴジラにも看なけりゃならぬ親が居る　弘充
新規ゼロまた減っていく年賀状　時雄
そば打ちは趣味でするから褒められる　すみ子
古典的医者でまず診る爪の色　雨奇
もう一杯頼むと飯を出してくる　郁夫
5円拾い今年の運を使い切る　信二

両川無限選

ベットロス旦那の時はどうだろか　英子
納得をしたのか穏がよく弾む　國治
愛が何か詩集を読んでみましょうか　れい子
やさしさを忘れ乾いてゆく私　一瑤
芽ばえたら愛も欲しがるだろきっと　多津子
何事も気にならなくて老いを知る　治代
風の彩楽しむようになりました　恵
無印の中にキラリと光るもの　利子
愚痴るのは止めたきれいな虹が出た　天翔
秋の空ほんまに僕は小さいなあ　ダン吉

枯れた供花に無沙汰を詫びる墓参り　泰子
長生きと健康寿命大違い　ひろ介

竹原川柳会（広島）　**古田　太虚報**

格子戸にしの笛もれる町に住む　輝恵
祭笛孫が手を引くおどりの輪　規代
笛吹けば踊ってしまう永田町　夢香
町並みから笛の音聞こゆ憧憬美　千代美
産土の杜に絆の祭り笛　寛
赤トンボ整列ですよ笛を吹く　比呂子
風車音を下さい風の笛　鬼焼
父の大太鼓と母の横笛と　蘭幸
花の笛一緒に配る思いやり　栄香
気配りの不足時には命とり　宣之
譜面配られ歌う笑顔の花は咲く　弘子
若い気へ老人会の案内書　白狐
ヨチヨチが周りへ配ってる笑顔　幸子
神さまが勝手に配る運不運　昭紀
健康寿命百歳時代に気を配る　節生
五線譜をはみだすピアノシニアの部　敬子
雨の日のピアノは雨のよう響く　笑子
重く聞く被曝に耐えて鳴るピアノ　慶子
大切な思い出ピアノ売りません　半徳
サンマ焼く孫のピアノ聴きながら　淑子
想像の翼広げて宇宙まで　歩美
熱中症で一泊高級ホテル並み　初音
ウオーキング初秋の音を聴きながら　厚子
あの雲を追い越せ僕は風になる　史子

わかあゆ川柳会（島根）　**松本はるみ報**

短いがしびれる程の名台詞　恵美子
隠しても隠しきれないきずのあと　安子
へそくりを隠し忘れて今も出ず　ハル子
夫婦とて小さい隠しの二つ三つ　かつ子
さようならよろしく言ってと右ひだり　はるみ
本音ポロリ酒の力で引出した　昌

南大阪川柳会　**松岡　篤報**

幸せと書けばゴールも近くなる　更紗
人生のゴールまだまだ先らしい　紀乃
未練ありゴールに出来ぬこの世です　あや子
人生のゴールエリアを丸くいる　楓楽
本心を聞けばほとんど宇宙人　真佐子
顔色をうかがい本音小出しする　恭昌
強引な大国あれが本心か　修
亡くなった後で本心知った悔い　いさお
只酒に酔って本心透けて見え　昌紀
本心を言えぬ時代がありました　国和
同好の仲間集うていやされる　柳右子
癒すのは酒より言葉よりお金　東風
赤ちゃんの笑顔で和むエレベーター　篤
ペン持つと心のもやが晴れてくる　一歩
逝く時はりりしく皆に礼言おう　ルイ子
猛暑にもめげずりりしいボランティア　なぎさ
不動尊りりしい姿手を合わす　峰子
すくと立つハイと返事の瞳燃ゆ　裕子
炎天下りりしい蟻の列に会い　たもつ
幸せな人とは比較せぬゆとり　ひさ乃
記録より記憶に残る深い傷　弘委智
広告で競うおせちはせからしい　志華子
協会のパワハラなのか貴乃花　和雄
リハビリの一歩自信の沸く予感　弘子
一万歩金木犀にさそわれて　直子
生きているだからいろいろとあるんだ　勝弘
突然にタイムスリップさせる友　柳伸
過去形でいつも妻にはほやかれる　実
大阪の土産だ笑い持ち帰れ　克己

川柳茶ばしら（愛知）　**関本かつ子報**

ゆるゆると下ると見えてくる景色　美千代
昭和には夢とロマンが溢れてた　三樹夫
迷ってもスマホがあれば大丈夫　遡行
一年ぶり庭木剪定自慢する　雅美
見栄はってスマホ買っても電話だけ　まみ子
今もって赤毛のアンを読み耽る　かつ子

川柳塔鹿野みか月（鳥取）**福西　茶子報**

カメムシは鮒寿司よりもまだ臭い　好幸
万歳の姿勢でドボンなりました　小鹿
冷凍うどん手打ちに化けて店に出る　実満
睡蓮のふちに落ちたわ酔芙蓉　孔美子
安売りの愛に出合った日のドボン　美ッ千
長靴を持たぬ都会の大混乱　綾子

素麺もうどんもスルリ無抵抗　ゆり子
ひもじさをうどんで凌ぐ終戦時　和子
借景に山の雄姿を見る暮らし　弘子
ぐにゃぐにゃとうどんは本心を見せぬ　盛桜
カメムシに戦い挑む加齢臭　草文
カメムシに認知頭脳を見透かされ　裕
初恋も二度目の恋もドボンした　茶子
ゴム長の悲鳴バックリ口を開け　照彦
ドボンとか沈む夕日は音立てず　すみれ
素うどんに只の天かすたっぷりと　重忠
ふる里へ帰る長靴買いに行く　みさ子
飛び込みはドボンの渦で勝負する　京
車止めドボンと石が川に落ち　かおる
どぼんから泥鰌に出合う新世界　拓庵
長靴を履いた黒猫いたらしい　英子
休耕田長靴無しで歩けない　満
素うどんは通が食べると負け惜しみ　恒
浜一番稼いだ夫と漁に出る　蟹郎

川柳同友会みらい（鳥取）吉田　陽子報

明日知れぬ命にかけるあみだくじ　菜美
カレンダーを埋める予約は無い独り　みち子
忖度が出来ず輪の中入れない　一眸
災害の度に買い溜め腐らせる　美恵子
草木一本産み出す力神と知る　和代
塩ちょっと足しては家族まるくする　安子
夕暮れて今日の重さを計ってる　亜矢
丁寧に生きて時代に乗り遅れ　勢津子
ほどほどの風雨が過ぎて感謝する　章子
調子よい時に調子に乗ってみる　みどり
何気なく引いて慌てるほつれ糸　健二郎
遠くなる昭和が好きになっていく　千恵子
天秤に量った恋は続かない　紫音
惚け防止やっぱり歌うことが良い　知恵子
失礼ながら器を量る初対面　三郎
来るものはくる暮色へとかしこまる　陽子
淡々と生きて何だか物足りず　れい子
目を開けてしっかり見たらどうでしょう　ダン吉
そこかしこ愛はごろりと自然体　心咲
下絵には希望を描いた跡がある　游子
ぜいたくを量る器に底がない　公弘

京都塔の会　山田　葉子報

授乳するママドンナの顔になる　朝子
マドンナの陰で咲いてた君が好き　公子
腹黒いマドンナ男子見抜けない　弥生
卒寿でも認知無ければ叱られる　五月
失敗もアハハと開き直ってる　ふりこ
オプジーボ光を貰う癌患者　ルイ子
自分への褒美静かに縄のれん　光久
普段着の似合う夫婦にある温み　昭
図書館の書棚の間にある世界　福子
夫婦ではないらしいなあ良く喋る　哲子
定年後男は貝になるらしい　文代
女より女になっている女形　欣之
この世にはまだまだ未練の酒である　多津子
世情には疎いが一家を護る母　求芽
世間体少しは気にして生きている　英旺
おまえらしいと言われ無性に腹が立つ　亜成
噂にはいつもらしいがつきまとう　紀乃
痴話げんか聞けば聞くほどアホラシイ　弘之
戦没者強い心の両陛下　保子
夕食にもやしが続く野菜高　宏子
マドンナと勘違いしている女　満子
マドンナもお歳整形外科で会う　美津子
マドンナの頃は笑窪で今はシワ　北舟
平和な世何がなんでも守りたい　泰夫
映る灯もこの世の名残り蜆川　とーな
天皇もやっと停年認められ　元一
目が合ったどうも見られていたらしい　万紗子
やることはすぐやり男らしくする　かずお
言い訳は尤もらしい顔で聞く　則彦
平成を走り抜けてく子が巣立つ　葉子
マドンナもよいしょと座るクラス会　洋志
自分らしく生きる根っこは崩せない　義昭

川柳大阪　山崎　珠生報

のしつけて家電を捨てる馬鹿らしさ　鉄心
そうじロボ棚のホコリは知らんぷり　(矢)五月
便利過ぎ家電操作に遊ばれる　かよこ
釣れましたさあ背開きだ天日干し　和
心の窓時には開けて風通す　福貴子
沖縄に心開かぬ安倍政治　紀雄
毎日のウォシュレットよありがとうな　まつお

民宿の味を守った浜の人　司
退職金よりも嬉しい感謝状　一歩
呆けるな転ぶな余計なお世話ほっといて　蕉子
コンビニが父の暮らしの世話をする　(小)雅美
世話焼きのおばちゃん来た早よ帰ろ　美籠
お世話様この一言に救われる　芳香
お互い様世話は承知で引き受ける　(今)万紗子
嫁ぐ娘が最後の言葉有り難う　珠生

岩美川柳会（鳥取）　**山下　節子報**

恥かいて鍛えてくれた肝っ玉　重忠
米作りもみ殻ワラも貴重品　弘六
花形だった線路眠ってばかりいる　一瑤
悲しみを乗せた線路の軋む音　一粋
山を縫う線路季節の顔をする　一平
戻り道今日はとってもいい疲れ　美恵子
米止めた荒れ田に鹿が住み着いた　たぬ
晩秋の線路を走る汽車の音　菖子
一粒の米にいのちを注ぐ親父　幸安
瑞風も鈍行も行くこの線路　敏子
米びつの底に匿してある内緒　茶子
子に戻り老母の小さな手を握る　雅女
鼻の下線路があった昭和の子　真理子
廃線のレール切り売りされている　振作
レトロ調昭和が走る若桜線　彰夫
人生の線路は無限今朝の夢　千代
青春の香り残して山陰線　公子
栄枯盛衰歴史を残す線路跡　凱柳
一粒がもったいないと拾われ　蟹郎
銘柄はいろいろあるが米は米　節子

富柳会（大阪）　**関　よしみ報**

外は雨鉛筆回して句をひねる　新
包装紙集めて千羽折り祈る　文重
胸の内そっと包んで一行詩　田鶴子
懸命な命包んだ蝉の殻　澄子
前向きになったら見えて来た世界　よりこ
大正昭和平成次は何時代　清
古希過ぎてまさかの時の遺言書　壽峰
真実は包み隠して闇の中　高鷲
孫が来て優しく面倒見てくれる　一文
ゴール前ろくろっ首の競馬馬　常男
声掛けた美人まさかのニューハーフ　武人
飛ばされた首が探した着地点　恵
何もかも包む男の広い胸　寿之
稲刈りで村洗われて灯が点る　よしみ
平成の二字有終の美へ正座　欣之
立ち直るまさかの夢を握りしめ　森子

八尾市民川柳会（大阪）　**中薗　清報**

昭和から平成まだまだまだ傘寿　欣之
ぴったりの鞍で大空駆け巡る　恵
父の背に宿る人生道標　壽峰
存分に生きた平成力瘤　あかり
癌健診速達で来た再診査　高鷲
水風呂も彬のペンは揺るがない　ダン吉
硝煙のない九条にある平和　寿之
夫婦もう一周の観覧車　常男
寒いだろ掛けたコートは加齢臭　卓郎
うふふうふふと空から枯葉嬉しそう　かこ
生産性無くし妻から疎まれる　紀雄
年号を新たに私を生きる　森子
ありのまま生きてやさしい風になる　華
晩酌の二合で気分盛り上がる　一文
三食をきっちり食べて今日の晴　妙
ブランコと天の高さとスニーカー　みどり
あの世は快適と先着の亡夫　信子
芒野の迷路に潜むやばい明日　涼子

城北川柳会（大阪）　**近藤　正報**

適当に歳を重ねたわけでなし　志華子
やさしさが厭とはっきり言わせない　賢子
折り曲げたページに深い意味がある　郁夫
羅針盤意のまま変えるトランプ氏　堅坊
適当な刺激と金が生きる術　榮子
適当にと言ったらトロとウニが出る　義昭
人肌の酒にこころが満ちてくる　朝子
常習の子適当に詫び朝ご飯　麗
少々の針はこたえぬ齢になる　寛昭
生返事適当すぎて渦を巻く　縣祚
適当に絵馬に願いを罰当たり　弘委智
白黒を言えば絆にひびが入り　俊雄
呆けたのか妙に素直なヘソ曲がり　北舟
夢だって酒でもないと育たない　修

地獄でも僕の座席は針の山　高志
新元号余生あんじょう頼みます　たもつ
激励に向上心が湧いてくる　満作
曲がり角ときめく方を進みたい　杁香
はっきりと癌と告げられ遺書を書く　克己
深いわけ知らんが涙拭いてやる　捷二
原色を纏って生きてゆく老後　星雨
膝を折り語りかけてる人間味　和
黒白をはっきりさせて爪弾く　千恵子
ケセラセラあとの寿命は風まかせ　和夫
歩の駒に無限の道を教えられ　一歩
振り返りゃあいまいもこで生きてきた　勝弘
ご指摘はあたらないのに傷疼く　正

川柳塔さかい（大阪）　**内藤　憲彦報**

抱いてきた夢は柩に敷いて寝る　時雄
抱いてきた炎で胸を火傷する　扶美代
抱き飽きて部屋に転がるお人形　雅美
抱く母が介護のたびに軽くなる　唯教
不治の眼に明日の虹を抱いている　進
抱き枕目覚めはいつも足枕　妙子
はったりとはったり握手する政治　敏治
幸せにすると根拠の無い科白　誠一
はったりが過ぎて風呂敷たためない　佳子
太田道灌俺の先祖やほんまやで　としお
はったりを貫く覚悟勝ちまっせ　和夫
はったりをやめると人が寄ってくる　雅明
豪邸に外車三台婚活中　素噸馬

詐欺師集団見栄はったりのベール着る　満知子
はったりのキツイ男だ北のドン　ばっは
恩師囲む少年の顔見せながら　憲彦
シラス漁囲むカモメの風物詩　憲
囲みから抜けて広げる可能性　ひろ子
師を囲み弾む話題は悪太郎　(綾)清
デモの輪が国会囲むこともない　愿
久々に村に赤ちゃん人だかり　世紀子
はったりで生きてるような男です　(向)清
はったりで強がり言うが気は弱い　玄也
自家用で行くとママチャリこいで来た　五月
豪語する美女に振られた事は無い　輝子
はったりで自分売り込むことにする　舞夢
はったりを言うほど心痩せて無い　さくら
はったりを効かす力のない私　みつこ
はったりで輪の中心にいつもいる　志津子
はったりで生きた一日顔洗う　ゆみ子
この辺にうまい店ありちょと探そ　かりん
骨董品ウチやと婆がちょけて言う　澄空
好々爺内にこもらぬ知識人　富夫
好奇心宇宙に向ける小さい手　八千代
転び癖運にまかせてチャンス待つ　俶子

あかつき川柳会（大阪）　**山本　昌代報**

トランプが喚けど歴史進んでる　鈍甲
騙された振りをしている母の耳　一歩
就活に神も仏も総動員　鮎子

神の手は父同様に硬かった　シマ子
天罰とおもう思い当りある痛み　理恵
遠くなる耳とやさしい妻といる　たもつ
秋車内書を読む人に和まされ　太郎
島ん人を蹴ってどこまでポチになる　多代美
同窓会皆違って皆いい　博美
希望校通ればようけさいせんを　紀子
見えもせず音も聴こえぬ高周波　善之
代代の子を育みし御神木　満知子
住宅ローン完済次は墓地ローン　福貴子
柿食えば聞こえる里の祭り笛　克己
偶数の月には食べる雲丹イクラ　和雄
万策が尽きて最後は泣き落とし　喜代志
余生へと女神がくれた趣味一つ　堅坊
鼻濁音で迫るとっておきの手段　浩子
孫四人食べ放題へ連れていく　一文
神仏はみんなの心奥に住む　清
この命神に託して行く浄土　壽峰
奥の手は最後の手段泣き落し　高鷲
死者が出てやっと手段を取る役所　栄子
仏壇も氏神様も同居して　直子
ゴールまで生き抜く手段考える　紀乃
雑踏で風の噂を聞いている　ひろ介
期限切れ捨てるの惜しい俺が食う　万作
ウソやろう耳を疑う癌告知　忍
聞きたくはないことまでも拾う耳　みつ江
煮え切らぬ彼へ促すデキチャッタ　敏子

平成の最後最後と言い過ぎる　正明
神様もあきれるような願いごと　信子
笑う輪を静かに見てる遠い耳　蕉子
死神も貧乏神も用はなし　いさお
寄り添ってそして粛粛埋め立てる　ダン吉

川柳花の輪（大阪）　岡本　薫報

消したはず未練まだある電話帳　みちる
過去を消す消しゴムあればすぐに買う　正太郎
肩書きを消してまあるいおつき合い　信子
また一人消して淋しい住所録　亜成
ヘソクリが孫の笑顔で消えていく　薫
一人見のドラマ気がねのない涙　博泉
いつの間にか棚から消えたあんこ餅　あや乃
一筋の母の涙がぐっと効き　泰子
追真の演技につられ涙する　笑子
年重ね涙もかれるドライアイ　やすの

ほたる川柳同好会（大阪）水野　黒兎報

平成の子らバーチャルに生きている　順子
平成を安室奈美恵と駆け抜ける　則彦
立つ準備してる平成招き猫　美佐子
平成のうちに種まき五輪待つ　正子
夕日いま平成を彫る妻の墓　一
平成と言うが災害多かった　守啓
骨を折ることなど忘れ生きている　桂子
折り紙で消えた記憶がよみがえる　久子
手折られて客間を飾る菊の花　信男

夭折の友清らなり虞美人草　孚彦
このまんま折れずに育て七五三　春代
腰を折るあゝあの人は候補者か　黒兎
箕面滝道えんえん続く紅葉狩り　奈津子
えんえんと続くコスモス花の道　柳童
逆走車聞けば運転古稀の人　一弥

倉吉川柳会（鳥取）　竹信　照彦報

体調は嘘でも元気と友に言う　瑞子
国会議員本当のような嘘を云う　由紀子
嘘と知り頷いて去る我が心　恭子
相手見て嘘も方便使い分け　智恵子
国民を投げるか国を投げるかだ　次男
五円玉チャリンと投げて神頼み　石花菜
モンゴルを一本背負いスッとした　雄大
愛車だが此の歳案じ廃車した　日出子
何気なく投げたセリフが引っかかる　康子
溜めた愚痴山の彼方へ投げ飛ばす　風露
九の一が投げるセクハラ巴投げ　野蒜
擬態した虫の護身についほろり　萩江
故郷にほろりと包む家がある　紀美恵
ドラマ観てほろりほろりと眼のそうじ　鬼一
散る花に我が身をのせてほろほろり　美知江
老人だほろり酔うのがちと早い　茂夫
仕返しは忘れた頃にやってきた　龍枝
ヨーイドン一人飛び出しやり直す　祐子
仕返しか盗っ人酒が効いてきた　重忠
仕返しにやさしく抱いてあげましょう　玲子

仕返しをしたらさっぱりいい気分　酔芙蓉
私の人生仕返しが出来ぬ　けいこ
追払ったカラス糞かけて逃げた　照彦

川柳ささやま（兵庫）　北澤　稠民報

冬美味し大根太り待ち望む　かほる
関取の母人並みの体つき　哲男
この道と決めて一本木を植える　稠民
孫いない私の猫は避妊ずみ　さゆ子
消費税響かぬ人が上げてくる　善輔
隅んこに居たのに選ぶ奴がいる　剛
テレビとは対話も出来ぬひとり酒　重男
便利な暮らし懐電探す落雷で　喜弘
友誘うあなたの一票未来へと　良子
飴とムチ心の中で使い分け　照代
体保護きつい北風コート着て　幸子
その昔築城労苦月は知る　美智子

長　柳　会（大阪）　辻村　ヒロ報

迷いつつ昭和を生きたカーネーション　ヒロ
酔い誘う名月浮かべ茶碗酒　洋二
遊行期は特急籠を締め直す　旅人
まぶしいなお一人様の大ジョッキ　和子
母さんの野良着の汗に嘘は無い　福子
虫歯でもあるだけましよ総入歯　登美子
泣き虫で手こずった子に助けられ　幸子
かまきりの行く末偲ぶ秋の風　光弘
夕暮れが迫ればぐうと酒の虫　直樹

泳ぐ目が隠した本音映してる　ともこ
本心を薄味にして世を渡る　孝
本心がわからないからまだ夫婦　敬二
本心を平気で喋る乱気流　三和子
本心をうまく隠した嫁姑　ゆき
本心を言える二人でややこしい　ふみ
本心を隠した顔が笑ってる　英美
本心をゴクリ呑み込むのど仏　正美
山中で道に迷うは死への道　規之
右やろかそれとも左迷い道　千代
一休みしたいな迷う人生に　弘美
帰る道忘れうろうろし出す老い　淳司
八方美人見え隠れする裏の顔　由夏
直感で決めて女は迷わない　孝代
コスモスの咲き乱れてる野に迷う　隆明
生きる道二択で迷うことばかり　隆彦
コスモスの迷路かけ抜け秋終る　和代
迷ったら妻が決めてるうちの家　正博

川柳塔まつえ吟社（島根）相見　柳歩報

安物に囲まれホッとする我が家　寿代
安々と負けてたまるか赤パンツ　哲子
好きな服安く買うのにくたびれる　桂子
安かろう悪かろうなど気にしない　ゆき
バーゲンで気取った服もお蔵入り　禮子
カッパだけ頼み江戸前食べた気に　瑞人
七変化できずにブタのままでいる　芳山
変化する中で蟻んこたじろがぬ　知恵子
瞬間に未来が過去に変化する　輝山
嘘ホントどこに線引くエピソード　草庵
半世紀添って話も右さがり　あきら
エンタメの話に疎いドブネズミ　徳利
裏話ネタ競い合う週刊誌　豊仙
その話し毎度聞いたと言えぬ仲　静枝
秋の空迂闊にできぬ無駄話　雪代
昼寝から覚めると違う風が吹く　美智子
昼の雨睡魔が横に座っている　とも子
お日様と一緒おいしい昼御飯　邦代
昼の月うっすら化粧夜を待つ　米估
ランチする今日はフォークが重たくて　孝子
点数に出ない賢さ光っている　柳歩
賢そうな顔をしている評論家　弘充

プラザ川柳（大阪）　梶原　弘光報

落ちるにはピクリと震え受験生　和代
又星をひとつ落とした稀勢の里　弘光
おむつ着けプライドぽとりおちました　克三
帰る道忘れうろうろし出す老い　淳司
赤信号迷わず渡るのは大人　清乃
「てにをは」のたった一字で句に迷う　一彌
次の球読めて喧嘩もあほらしい　正子
お喋りが過ぎ本心がついすべる　五月
嘘泣きが解っていても赦す母　政夫
一合で本音飛び交う酒の席　悦夫
本心を見抜いた母の千里眼　久美子
奈良判定男カリスマ凄み出す　修
何もせず老いと言訳する昼寝　おかめ

ふうもん吟社（鳥取）　両川　無限報

ふる里の山から紅葉降りてくる　昌鼓
どんきゅうがぬるぬる踊り手こずらす　蟹郎
新米を庭のスズメにお裾分け　敦子
終活はととのいました後は金　一粋
お月さま医学書読んで病んでます　とも湖
スニーカー素足が似合う優男　一平
実年齢よりは若いと思いたい　節子
順番はとっくに来てる九十五　妻子
入選句出来ない句だが出してみる　茂登子
物つくりも政治も眉唾で困る　房江
少しだけ汚れにんげん味が出る　宏章
葬儀屋のディナーショウとは通夜の事　振作
初恋の頃を忘れてから長い　鐘軌
ここ一番山をかけたら大当たり　亨
急ピッチ惚けの早さを痛感す　行男
改憲へ総理のラッパ鳴り続け　毅
出来婚の目立たぬ内と式が言う　孝二
急ピッチそれを説く人何もせず　大
急ピッチで脳の老化が迫りくる　凱柳
渡り鳥練習してる急ピッチ　美津子
急ピッチ渋柿吊るぞ冬が来る　勲章
急ピッチで去る平成にある未練　天翔
命までリセットできる子のゲーム　茶人
リハビリでリセット歩く夢叶う　善平
リセットに大臣の首変えました　紀美江

明日こそはとリセットボタン押し続け　真理子
リセットを庶民は願う消費税　金祥
悔しさのバネはリセットかも知れぬ　幸子
リセットは叶わぬと知る風の彩　一瑤
リセットをしたら私が無くなった　楓花
私をリセット出来るのは貴方　八千代
雑音は耳に入れない太っ腹　美恵子
宵越しの金は持たない太っ腹　回春子
喜怒哀楽みな包み込む太っ腹　無限

川柳あまがさき（兵庫）　**大浦　初音報**

使わねばすぐに錆つく脳回路　(高)千賀子
母親の入室拒む写真集　英坊
買わないと競馬の予想良く当る　新録
読む本はいつもマンガと決めている　柳明
重い殻破りとび出す青い空　初音
自分史を作り貰い手いまだなし　(入)修平
決断の時重い責任印を押す　雄次
読み聞かせ澄む双眸に見つめられ　菊江
断捨離した本棚すき間風が吹く　りこ
勝利への重力かかるアスリート　たみえ
まだ欲が今年もジャンボくじ売場　富夫
アイパッドまずは何でもこれに聞く　健二
十年日誌書きあげました充実感　紀華
バッカスもつき合いきれぬはしご酒　紀恵
常温が旨いふたりで飲む地酒　ひとみ
図書館の本からパラリ紅葉の葉　雪菜
今の暮し八十路の僕に良い重さ　(竹)千賀子
秋冷にもみじ便りが気にかかり　純
残したら次の客へとゆくパセリ　(谷)修平
じいちゃんの散歩はいつも千鳥足　祐康
酔っぱらいの型で脱いであるスーツ　公子
侘びと寂び型式踏まず樹木葬　良種
このわたしお金で転ぶタイプです　宏造
カタカナ語使い年寄り煙に巻く　正和
気儘でも猫ねこなりのスケジュール　靖鬼
捨て台詞回りの空気重くする　美籠
火を使う猿がとうとう原子力　耕治
なぜがいっぱいあって楽しい三歳児　かずお
ひと言の重さあすへの糧とする　ヨシエ
幾千年続く命の持つ重さ　真桜子

六甲川柳会（兵庫）　**奥澤洋次郎報**

いらいらとさせてどん尻タイガース　正和
いらつかせ本音の吐露待ちうける　和宏
さっきからエンジン掛けて待つ夫　盛夫
酒まだか こんがりするめ焼けている　武彦
秋味をあつめてうまし釜のめし　邦子
我が夫婦どちらも頓馬良いコンビ　芳江
好きという2文字が言えぬ意気地なし　和郎
待ち合わせ予定の電車遅れ来る　浩司
喫煙者馬鹿にされてるタバコ税　洋次郎
点と線これが私の現在地　弘華
活字は魔術瞼が急に重うなる　美穂
好投も捕手のお陰とインタビュー　狸月
手を貸した孫の工作五十点　敏夫
心ない言葉一つが波紋呼ぶ　正彦
聞きもらしなぞり助ける老い夫婦　弘
残りくじだった妻といいコンビ　千賀子
欠点をオープンにして輪に入る　博
新大臣ハズキルーペを贈りたい　道子
七輪だろうハチローの焼く秋刀魚　義博
改元を機に年賀状拝辞する　じろう
良い風がふいて二人で生くと決め　真桜子
一たす一が無限になれと言う祝辞　利子
原点を辿ると母の海に出る　無限

岸和田川柳会（大阪）　**石田ひろ子報**

ピカソならきわどい絵でも名画です　康信
地滑りの表現舌が動かない　三成
スカート丈後二センチに目が騒ぐ　洋二
だんじりのきわどい技の大工方　義泰
マニキュアの赤がテンション上げている　和美
働けぬ父に代わって母の意地　カズ子
胸深く働きづめの父母が居る　恭子
歳召されさぞお疲れぞ両陛下　笑司
こら猫よネズミ取るのが仕事だろ　みつ江
ランチタイム働き蜂のワンコイン　浩子
働いたおまけみたいな日向ぼこ　律雄
パニックを起こさぬように深呼吸　ふさゑ
好きだよと言えば遺影が頬染める　愿
弱いから染められそうになってきた　彦弘
俺色に染めるつもりが染められて　白水
染められた色がそぐわずノラになる　珠子

何色で終ろか染めるのは私　桂子
政治屋はどんな色にもよく染まる　信二
何色にも染まる大根の持ち味　ひろ子
神様の親は人間かも知れぬ　隆昭
人間が一杯いても寒いまま　玲子
人間の知恵が人間振り回す　英夫
病終えた人間忠太みんな待つ　勝彦
不意の事故家族パニック泣きくずれ　益子

西宮北口川柳会（兵庫）　藤井　宏造報

膨らんだほっぺに不満溜ってる　宣子
靴音を追い朱に溶ける紅葉狩り　野鶴
君の瞳に写るすべてを見てみたい　ひとみ
幸せを一杯掴んできた両手　千賀子
桜田大臣ハズキルーペを買いなさい　宏造
言いたいこと言えて姉妹はあたたかい　迪
そのままの自分を曝け仲間入り　武彦
あんたの句そのまんまやと揶揄される　勝弘
そのままにしてはおけぬと立上がる　正彦
日進月歩そのままなのは俺だけか　盛夫
入れたてのコーヒー冷めた長電話　新録
素のわたし煮ても焼いてもややこしい　恭子
スープの冷めぬ所に子等の居る安堵　弘子
冷めてもやっぱり母の味嬉し　みよし
猫舌に冷めると怒る鍋奉行　利子
冷遇と思い込んでた愛だった　いわゑ
冷飯に我慢とルビを振った日日　美津子
冷めた手を包んでくれた大きな手　哲子

愛冷めるまではきれいに咲いていた　無限
闇夜の散歩犬の首にもＬＥＤ　りこ
闇夜でも雲消え去れば十三夜　健彦
希望とは闇から洩れる子守歌　千代
暗夜行路ぬけて男が出来上る　和宏
薄味の母から学ぶ食文化　敦子
モナリザの笑みに文化のレベル知る　弘委智
最後まで自分出しきり生きてみる　伯備
秋癒えずされど会いたい人ばかり　千津子
激動を生きた卒寿の語り種　嘉代子
煩悩をそのまま背負い経を読む　靖夫
どこの誰闇のメールか指緊張　邦男
暗闇で乳房まさぐる紅葉の手　野薫
川柳が笑い誘った文化祭　忠夫

サークル檸檬（大阪）　松尾美智代報

少しずつ理想を曲げてあせらない　智恵子
今となれば感謝しかない亡夫には　いわゑ
続く人ありこの道掃いておく　希久子
檸檬の字書けないままに散会し　哲夫
世の中の動きを感じ取る素足　光久
寒いとぼやき暑いとぼやきまた冬が　昌紀
檸檬かじってやっと大人になりました　久仁雄
信じ合うもの互いに持って老い二人　たもつ
あんたを産んで良かったと逝った母　加お里
迫りくる老いに私の仁王立ち　美智代
諦めたと言いつつ待っているまさか　扶美代
ながらえて仏の恩と人の恩　千代

ありがとう感謝の言葉これに尽き　蕉子
言葉では尽せぬ君の思い遣り　美籠
難しい話は眼鏡拭きながら　楓楽

川柳ねやがわ（大阪）　籠島　恵子報

世渡りの鉄人流さず流されず　亜成
白髪の頭で腹は真っ黒け　久仁雄
頭数やっと揃ってほっとする　ルイ子
この頭叩くが何も出てこない　銀杏
ウッカリデゴメンハハノヒオメデトウ　麗
行きもせず黄泉の世界を説く不思議　弘委智
支え合う柔和な笑みの両陛下　浩子
流れてはいかん流されてもいかん　祥昭
つっかい棒外し子供の独り立ち　髙鵞
この世は不思議右脳左脳が休めない　弘一
ご長寿を国も誤算で困り果て　俊雄
私をイライラさせる石頭　秀夫
老介護支え切れない修羅がある　恵
なんでだろ医者の前では痛み消え　和仁
溢れ出る涙が流れつく墓標　博泉
鯨一頭空に崩して迷いきる　あかり
時の流れああシンプルで凛として　淑子
寝転んで流れる雲に夢を見る　高志
ふらついてうっかり押した非常ベル　朝子
父の座がますます狭くなって冬　郁夫
年金のわずかへ知恵をまだ絞り　茜
ありがとう心に花のひらくおと　鈍甲
連れ添うて支えてくれた君は風　

毛だらけの虫が華麗に黒揚羽　壽峰
町内の困ったちゃんはカラスです　かすみ
歳老いて夫婦は支え合い生きる　さち子
紆余曲折流した汗のいかばかり　賢子
いつものと言えばいつもの髪かたち　恵子

豊中もくせい川柳会(大阪)初代　正彦報

いい人が見付かるまではあわてない　(永)玲子
急にトイレ行きたくなった水の音　宏子
じっくりと構えて幕を引くつもり　求芽
あと二周程よい位置をキープする　肇
自信持つ君の達筆惚れ直す　多津子
酒飲めば元気湧き出るお父さん　健三
五時からがやる気が湧くと云うやから　英三
息してる間は欲も湧いてくる　時子
セーター編む一目一目にある情念　真理子
赤い糸切れては繋ぎ五十年　武彦
男手を頼りにされて湧く意欲　健二
君の側雲が夕陽に染まるまで　シズエ
裸婦の絵にじっくり見入るお爺さん　歌留多
踊り場の靴はタンゴを踏んでいた　きらり
大声で笑い悲しみフッと湧く　堅坊
スキャンダルで夢の階段踏みはずす　満子
傘寿です若い演歌で湧く血潮　(岩)玲子
信じてた人にもあった裏の顔　美智代
根性で踏みしめ昇る天守閣　久子
じっくりと覗いてみたい袋綴じ　則彦
よれよれの体だけれど口がある　見清
褒め言葉裏返しする脳回路　雅美
階段の先で待ってる終電車　耕治
好き嫌い言えずにカガミみな映す　黒兎
美しい人が纏うている自信　恵
追い風をじっくりと読む赤トンボ　正彦
平凡の非凡に気付く日向ぼこ　寿之
信号は赤盲導犬と待っている　葉子
五線紙にメロディーが湧く嬉しい日　美佐子
ここまでは続編ここからは無限　かこ

川柳藤井寺(大阪)　太田扶美代報

青い月このまま帰るには惜しい　まつお
ユーモアをまぜると味がまるくなる　みつこ
一人居で孫がユーモア連れてくる　一文
このままで老いたくないとひとり言　絹子
セクハラになってしまった親父ギャグ　六点
ユーモアに思わず揺れるイヤリング　瑠美子
縁日の話上手にのせられる　彦弘
ユーモアのある顔だから得してる　典子
こっそりと参加している訳でありで　光男
わたしの意地このまま幕は引けません　フジ子
足すことも引くこともなくいい夫婦　信二
醒めぬならこのまま居たい夢の中　キーキー
このままのあなたでいいと妻が言う　いさお
泡ふいてるカニを見つめて胸算用　シルク
レジェンドが記念大会盛り上げる　紀雄
頑に母は故郷に居ると言う　俶子
幸せのいま絶頂でこのまんま　一歩
絶好調このまま続くはずがない　扶美代

川柳さんだ(兵庫)　村田博報

紅葉を蹴散らし群れる道の駅　ゆかり
軽トラの紅葉マークに追い抜かれ　正和
朝帰る猫の背中に濡れもみじ　えい子
紅葉狩り川面に映える絵巻物　雅司
紅葉とて散りたくはない秋の空　つな子
盆栽の根上り紅葉風情あり　宣子
紅葉には紅葉の都合赤くなる　千津子
人生の波に乗るんだ紅葉の手　美智子
君思うひと日もあるさ紅葉山　ちあき
呱呱の声もみじの拳天を突く　一子
駅前に行くと必ず居る知人　歳子
駅前を拠点に伸びてゆく行事　迪
駅前に丸いポストのある安堵　武彦
駅前で待ちくたびれた秋田犬　千賀子
呆けた振りしては勧誘追い払う　雅尚
僕イエス妻がノーならノーが勝つ　祐康
行き二人帰り一人ののぞみ号　寅男
居候断りもなく飯をくい　野薫
ストレスの項目欲しい検査表　優子
カタカナ語多くてニュース分かりかね　晃
更新に認知テストが有ると言う　加代子
ストレスも限界風船は裂ける　美籠
ストレスを溜めない君はよく喋る　ひろ介
秘め事を人に話せば尾ひれ付く　喜久子
夫に似て息子の口の堅いこと　利子

秋夜長別れた恋が又疼く　貞子
披露宴嘘がつけない友がいる　健二
聴診器使う医者いてほっとする　好文
マルちゃんもタマちゃんもいる通学路　耕治
スマホ派か手書き派手帳決めかねる　厚子
オレ流に生きていますという頑固　義徳
ブランコが揺れる逢いたい逢いたいと　周三
名が変り山家の猿も安堵する　徹
寛容でありたいふっと息を吐く　ひとみ
コスモスが命宿して終わる秋　修平

きゃらぼく川柳会（鳥取）後藤　宏之報

飲み上手遊び上手は楽天家　久直
ジョギングは休んで酒を飲んでいる　章
平成は終わるが僕は終わらない　紀の治
褒め言葉ときめかないは歳だわね　令位子
土下座した稲は九十の母が刈る　美穂
肌寒い暑い暑いが懐かしい　多美子
知識ある勘違いしていた手おくれだ　美智子
山海の恵みもらって生きている　恵子
ちょっと出てくると晩酌お預けだ　雨奇
書きましょうすぐにさよならする秋を　千代
マンドリンこの音色聞き友重ね　治代
満月の雲の流れにいやされて　菜々
若輩と言うのは世辞で憎い奴　汪
自分の健康おいしく食べて又笑い　美草
秋暗れが足に火をつけ大豆獲り　美佐子
ためらわずエアコン使う熱帯夜　瑞枝
輝いた時はセーラー服だった　日枝子
胃カメラを珍客来たと勘違い　宏之

大山滝句座（鳥取）　新家　完司報

法螺を吹きながら口笛吹きながら　正人
儲かった話はするが金が無い　紀の治
まろやかな嘘の傷からチョコの味　芳山
粗大ゴミになってしまった母の味噌壺　寿代
まろやかになろうと転がる三角　楓花
まろやかになれとワインを注いでみる　芳光
盆栽が庭木になった七回忌　くにこ
まろやかな顔をしている悪い奴　石花菜
軒先をまろやかにする柿すだれ　麦青
脳味噌が漏れ出さぬよう箍はめる　裕
追った恋やがては愛になって今　風露
歩こう会集合場所へ自転車で　けいこ
まろやかな笑顔こっそり隠れファン　幸子
ほどほどの法螺は可愛く和ませる　雄大
ホラだとは思えぬほどの真剣さ　昭子
大ボラを吹こう自由な山頭火　熊四郎
円やかになあれワインに魔法かけ　七七
二人三脚リズミカルにはほど遠く　モナカ
ふるさとの追いしうさぎは月の中　のぼる
兎追う如くに夢を追っている　富隆
甘口と辛口シェイク胃の袋　野蒜
痩せました穿いたズボンは袴なり　道唱
法螺ふいて天狗の鼻を折ってやる　重忠
若い頃二度と帰れぬ夢で追う　久子
まろやかなオババ目指して奮闘中　鈴野
俺歌う味噌に盞をと妻が立つ　清明
少々のホラ盛り込んで国自慢　規雄
金ばかり追ってカモメも見ていない　完司

翠洋会（大阪）　大久保眞澄報

いつまでの任期か主婦というつとめ　希久子
赴任先もてる夫に気もそぞろ　舞夢
部下任せ教えるよりも上手くいく　げんえい
丸投げで任せられても困ります　理恵
放任主義むすめは十日帰らない　昭
オレに任せろって棚がまた落ちた　眞澄
玉の輿蹴って気楽な道選ぶ　桃花
リストラの涙で蹴った小石です　弘子
三歩ほど下がって影を蹴っている　すみ子
蹴り飛ばす勇気ぐらいは持ち合わす　ふりこ
腹立ちまぎれ亭主の枕蹴りまくる　蕉子
どん底で本気で夢を追う男　富子
おろそかにしてはならない言い伝え　千枝子
仏様度胸を据えて生きてます　志華子
譲り合うどうぞどうもが温い路地　大子
ああ風雅小春日和の日向ぼこ　満作
太陽光電気造りも無尽蔵　善之
ゴーンさんと呼んでいたのが腹立たし　敬子
メリットは問わぬ尾畠さんの心意気　恭昌
メリットを考えて言うおべんちゃら　楓楽
メリットはあった年金ついていた　義

句会名	日時と題	会場と投句先
西宮北口 川柳会	14日(月) 14時締切 初・清い・うきうき・自由吟	西宮市立中央公民館　6階　講堂 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにしのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
川柳 さんだ	15日(火) 13時締切 たっぷり・遠い・ヒーロー・譲る 自由吟	キッピーモール（JR三田駅前） 〒669-1545 三田市狭間が丘5－10－19　谷　祐康
川柳 たちばな	16日(水) 13時45分締切 印象吟・目・飾る・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7) 阪急塚口駅北へ10分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
岸和田 川柳会	19日(土) 14時締切 鳩・始まる・めでたい・スマート	岸和田市立福祉総合センター 南海電鉄「岸和田」駅東へ5分 〒596-0076 岸和田市野田町2－13－19　中岡香代
和歌山 三幸 川柳会	19日(土) 13時15分締切 正月・雪・祈る	和歌山商工会議所　4階　第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川柳塔 みちのく	19日(土) 17時締切 さすが・大・暖	弘前市御幸町13-1「大成小学校地域交流室」℡0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛　℡0172-36-8605
川柳 ねやがわ	20日(日) 13時締切 記録・期待・愛	寝屋川市立産業会館 〒572-0063 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
川柳 藤井寺	20日(日) 14時締切 輝く　共選	藤井寺市生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0007 藤井寺市林5－8－20－303 鈴木いさお
豊中 もくせい 川柳会	21日(月) 13時50分締切 財布・迫る・そっと・自由吟	豊中市立中央公民館　3F 阪急宝塚線「曽根」駅　徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5－26　初代正彦
川柳塔 すみよし	26日(土) 14時15分締切 料理・喜ぶ・サービス	住吉区民センター2階集会室4 〒580-0026 松原市天美我堂3－130－2－404 森松まつお
はびきの 市民 川柳会	27日(日) 14時締切 図・群生・ジュニア	陵南の森公民館 近鉄南大阪線「高鷲」駅下車　北東へ徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8　徳山みつこ
川柳 ふうもん 吟社	27日(日) 13時締切 自由吟・ロボット・消費・儲かる	開発ビル　2F　砂場事務所（鳥取市片原1－107） 〒689-0202 鳥取市美萩野2－171－3　中村金祥
南大阪 川柳会	28日(月) 18時30分締切 祝日・満ちる・うっかり・雑詠	大阪市立住まい情報センター　5F　研修室 メトロ谷町線・堺筋線「天神橋六丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	28日(月) 14時締切 ラッキー・省・いたずら	ハートピア京都　京都市中京区烏丸丸太町 地下鉄「丸太町」駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勧修寺堂田70－16　桝本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所（06-6779-3490）へご連絡ください。

1月各地句会案内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
城北川柳会	5日(土) 10時50分締切 すんなり・安心・温い・自由吟	錦城閣（キャッスルホテル　3F）「新年句会」 メトロ谷町線・京阪電鉄「天満橋」駅 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14　江島谷勝弘
川柳とんだばやし富柳会	5日(土) 14時締切 裸・泡沫（うたかた）・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043　富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
倉吉川柳会	5日(土) 14時締切 バランス・鍛える・めでたい 席題	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072－17 谷口次男
川柳塔まつえ吟社	5日(土) 13時30分締切 うっかり・演じる・汚染・湧く	松江雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222－1　相見柳歩
ほたる川柳同好会	8日(火) 13時30分締切 一枚・変わる・ぐるぐる	豊中市蛍池公民館 阪急・モノレール蛍池　蛍池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曽根2－4－1　水野黒兎
川柳塔さかい	8日(火) 14時締切 元気・信じる・折句：くしろ	東洋ビルディング　4F 堺東駅北西改札口から2分 〒599-8103 堺市東区菩提町5－171　矢倉五月
川柳塔なら	10日(木) 14時締切 雪・うれしい・編む	奈良市立中部公民館　4F 奈良市上三条23-4　近鉄「奈良」駅④番出口　徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787　安土理恵
あかつき川柳会	11日(金) 14時締切 出発・明るい・立・時事吟	大阪保育運動センター（新谷町第1ビル2F） 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2－312　前田紀雄
川柳あまがさき	11日(金) 14時締切 休む・前・どんどん・自由吟	尼崎市女性センター・トレピエ　2階 阪急武庫之荘駅南へ5分 〒661-0953 尼崎市東園田町3－49－5　藤井宏造
川柳大阪	12日(土) 14時締切 変わる・ジャンプ・返事	メトロ長堀鶴見緑地線　京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六甲川柳会	12日(土) 14時締切 病みつき・リンゴ・燃える 自由吟	六甲道勤労市民センター　5階 E室 JR「六甲道」駅南隣　メイン六甲内 〒657-0011 神戸市灘区鶴甲4－11－11　上田和宏
川柳塔打吹	12日(土) 13時30分締切 元気・逆立ち・びくびく	倉吉市上灘町9　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637－3　牧野芳光 方 川柳塔打吹　事務局
八尾市民川柳会	13日(日) 14時締切 大会・しばれる・凄い・雑詠	八尾市安中町3－5－1　渋川・安中集会所 JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2－1－7　土田欣之
川柳塔わかやま吟社	13日(土) 14時10分締切 兼　題＝御来光・すんなり・甘い 課題吟＝知	和歌山商工会議所　4階　和歌山市西汀丁36 兼　題　〒649-6253 岩出市紀泉台366　藤原ほのか 課題吟　〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町東2-208-5 楽原道夫

柳界展望

★「番傘川柳本社創立110年記念川柳大会」は、10月28日大阪市内の太閤園で開催。参加者482名。同人成績。

細川　花門

歯が二本生えた頃からうどん好き

★「第21回のむら川柳誌上大会」（愛媛県西予市のむら吟社主催）参加者172名。同人成績。

天　位　永見　心咲

ワンテンポずらし家族葬の話

★「川柳塔なら創立20周年記念川柳大会」は、11月1日奈良市内ホテル・リガーレ春日野で開催。参加者118名。同人成績。

天　位　小島　蘭幸

奈良百景来るたび好きになるようだ

★「'18きょうと川柳大会」は11月3日京都労働者総合会館で開催。同人成績。

天　位　斉尾くにこ

集まって見ている絶え絶えの鯨

★「ねんりんピック富山２０１８　川柳交流大会」は11月4日・5日開催。同人成績。

正　賞　新家　完司

大仏もトロリ居眠る秋日和

正　賞　新家　完司

神さまの秀作である富山湾

正　賞　久保田千代

けあらしを待って集まるカメラマン

★「第40回出雲市川柳大会」は、11月11日に開催。同人成績。

天　位　新家　完司

シロナガスクジラ狙って喜寿となる

★「第60回豊中市民記念川柳大会」は、11月23日開催。同人成績。

全日本川柳協会理事長賞

前　たもつ

ばっさりと人切る舌はやわらかい

▽出　版△

○徳山みつこ句集『ときめきの種にも水を忘れない』新葉館「川柳作家ベストコレクション」B6判P95。定価１２００円＋税。

▽表　彰△

○太田扶美代（理事・藤井寺市）さんは、11月3日（文化の日）に藤井寺市より文化功労賞を受賞。

▽ご芳志△

○コーキ封筒（株）さまから和封筒（長型3号）ご寄付頂きました。

○故平嶋美智子さんのご遺族・徳山孝江さまより金一封を拝受しました。

▼訃　報▲

○11月3日、松山芳生さん（同人・青森県）が逝去。享去80。

▽新誌友紹介△

大阪市　紹介者　水野　**降幡**　**弘美**

堺市　紹介者　黒兎　**佐伯**　**洋子**

豊見城市　紹介者　矢倉　五月　**下地**　**順子**

豊見城市　紹介者　森山　文切　**下地香代子**

常任理事会12月7日

①第25回川柳塔創立95周年記念まつりの概要について②災害発生時の塔社行事運用ルールについて③高野山合祀法要の報告④定例確認事項。

次回常任理事会＝1月7日(月)ＡＭ10時～

第八回「ふるさと」川柳募集案内

課　題「　流　」
（一口2句・12名による共選）

選　者　磯松きよし・髙瀬　霜石・尾藤　一泉
阪本　高士・小島　蘭幸・浅利亥一郎　他

締　切　**1月31日（消印有効）**

投句料　１０００円（切手不可）
★添付の誌上大会投句用紙他便箋等使用・2句を1枚の用紙に記入

賞　最優秀賞　一点（樺細工色紙掛・仙北市産品）他

発　表　柳誌「湖」８号（平成31年４月発行予定）

投句先・問合せ
〒014-0602 秋田県仙北市ひのきない字長戸呂85
浅利 亥一郎方　第八回「ふるさと」川柳事務局 宛
TEL　0187-48-2236

主　催　川柳「湖」（うみ）

椙元　紋太没後５０周年
ふあうすと川柳社創立９０周年記念川柳大会
平成３０年　年間賞発表

日　時　平成31年4月21日（日）
午前10時開場
場　所　兵庫県民会館　９Ｆホール
神戸市中央区下山手通4―16―3
TEL　078―321―2131
（JR元町・阪神元町駅より北へ徒歩7分）
宿　題　（欠席投句拝辞）
「ﾒﾛﾃﾞｨｰ」　みぎわはな　選
「　門　」　若林　柳一　選
「癒やす」　小笠原　望　選
「美しい」　大楠　紀子　選
「導　く」　小島　蘭幸　選
「節　目」　矢沢　和女　選
「雑　詠」　赤井　花城　謝選
出句締切　１２時　（各題２句）
会　費　２０００円（記念品・発表誌呈）
（昼食は各自でお済ませください。地下に食堂あり）
懇親会　５０００円　17時～　当日受付
主　催　ふあうすと川柳社

第７回　広島県川柳協会誌上大会

課題と選者（各題２句・３名共選）
「植える」　石原　淑子／村上　和子／赤松ますみ　共選
「自由吟」　楠山東石子／草野　麗湖／岡崎　守　共選
投句要領　規定の用紙（コピー可）または
Ｂ５用紙に２題４句を連記のこと
投 句 料　１０００円（定額小為替）
作品発表誌呈
締　切　平成31年2月末日（当日消印有効）
賞　各選者特選に呈賞
投句先及び連絡先
〒723―0044　三原市宗郷2―7―27
鴨田　昭紀　宛
TEL･FAX　0848―63―1096
主　催　広島県川柳協会

平成31年度　業務分担表　平成30年12月現在

	常任理事		
総務部	**島田　誠一**	久保田千代	
企画事業部	**藤村　亜成**	石田　隆彦 久保田千代	片山かずお
編集部	**木本　朱夏**	江島谷勝弘 内藤　憲彦	大久保眞澄
句会部	**居谷真理子**	石田　隆彦	内田志津子
同人誌友部	**江島谷勝弘**	吉村久仁雄	
渉外部	**藤井　宏造**	上田ひとみ	松原　寿子
会計部	**内藤　憲彦**	宇都満知子	
発送部	**吉村久仁雄**	江島谷勝弘 中川ひろ介	藤井　宏造
事務部	**森松まつお**		

◎ 太字は部長（部長以外は50音順）　◎ アンダーラインは新任者

明けましておめでとうございます

西宮北口川柳会

例　会　毎月第２月曜日　午後１時　西宮市立中央公民館

（阪急電鉄神戸線西宮北口下車　南出口徒歩３分）

プレラにしのみや６Ｆ

投句先　〒663-8112 西宮市甲子園口北町27−4−602　梅澤盛夫

秋元てる　足立つな子　井上じろう　市坪武臣　上田和宏　上田ひとみ　上原翔　梅澤盛夫　江島谷勝弘　榎忠夫　延寿庵野靄　大坪一徳　大矢伸　緒方美津子　奥田みつ子　加川靖鬼　笕靖夫　片山忠　金川宣子

亀岡哲子　河合敏夫　川人良種　北川美香　北島邦男　久保田千代　蔵田光子　黒田能子　小林わこ　酒井紀華　酒田浩司　佐々木憲道　佐藤健彦　神野千恵子　鈴木新録　瀬島流れ星　竹山千賀子　田中章子　近兼敦子

寺井秋果　都倉求芽　冨永恭子　冨山ルイ子　中西豊子　長島敏子　長野峰明　長浜美籠　長縄嘉代子　七反田順子　難波伯備　西口いわゑ　能勢利子　福島弘子　福田正彦　藤井宏造　藤岡りこ　藤本直

藤原みよし　堀正和　前川千津子　牧渕富喜子　松井文香　松村輝彦　丸山一之　みぎわはな　村上氷筆　矢野薫　山内迪　山口弘委智　山崎武彦　山田耕治　山田昭九朗　両川無限

おめでとうございます

河内長野川柳協会

顧問　板尾岳人

長柳会・プラザ川柳

会員有志

村上直樹　坂上淳司　黒岩靖博　山室光弘　木見谷孝代　石田隆彦　梶原弘光　辻村ヒロ　大島ともこ　藤塚克三　森田旅人　山岡冨美子

川柳　葦群

■主な内容
同人作品「葦群抄」
近詠作品「葦の原」
作品鑑賞　新家完司・大西泰世
柳論　エッセイ　句会報　ほか

■A5版　45頁　季刊（年4回）
年間 4000円（〒込）
発行人・編集人　梅崎流青

〒832-0087 福岡県柳川市七ツ家426　TEL.0944-72-6046
振替口座　01760-2-120254
E-mail　house7@cello.ocn.ne.jp

新年明けましておめでとうございます

川柳あまがさき

会長　長浜美籠
副会長　藤井宏造

足立つな子　池野　英坊　石川きよみ　市坪　武臣　入江　修平　三好　京江　上田ひとみ　江見　見清　大浦　初音　奥村　五月　長川　哲夫　加川　靖鬼　片山かずお　釜野　公子　河津　正治　北川　純　北野　哲男　木藤こみつ

木山歌留多　九鬼　洋子　小山　聖也　酒井　紀華　酒井　健二　坂本　晴美　竹林千代子　竹山千賀子　田中　章子　谷　祐康　都倉　求芽　中川ひろ介　永田　紀恵　野口真桜子　野口　雄次　平井　富夫　藤岡　りこ　藤田　雪菜

古川　奮水　細川　花門　堀　正和　森　菊江　森　たみえ　森松まつお　森松　芳香　山口ヨシエ　山田　耕治　渡辺　柳明　鈴木　新録　岸田　万彩　桝本　宏子　山田　葉子　谷口　修平　黒嶋　海童　川人　良種

例会　毎月第二火曜日
場所　尼崎女性センター・トレピエ

大阪川柳の会

事務局　〒532-0025　大阪市淀川区新北野1-3-4-706　本田智彦 方
TEL 06（6303）7297

代表　礒野いさむ

世話人
足立　淑子　井上かれん　池田　武彦　碓氷　祥昭　大堀　正明　伊達　郁夫　内藤　光枝　藤井満洲夫　本田　智彦　森口　美羽

◎会場　駅前第二ビル5階（大阪市北区梅田1-2-2-500）　※開場　午後1時

明けましておめでとうございます

川柳塔すみよし

会長　古今堂蕉子

浅井　公平
荒川　博行
石橋　直子
磯島福貴子
井丸　昌紀
内田志津子
宇都満知子
江島谷勝弘
榎本日の出
榎本　舞夢
大治　重信
大隅　克博
大西　晴雄
奥村　五月
小野　雅美
加島　由一
川端　一歩
木日喜久栄
吉川　哲矢
甲田　靖子
古今堂蕉子

佐伯ミナ子
坂　　裕之
阪井美世子
佐々木満作
柴本ばっは
鈴木いさお
立石　郁子
田中　廣子
田中ゆみ子
飛永ふりこ
土井　舞蹴
中井　　萠
中島　栄子
中川ひろ介
長浜　美籠
長髙　俊雄
中村　民子
西出　楓楽
萩尾　紀子
橋本　典子
藤井　宏造

藤島たかこ
藤原　　昭
藤原　大子
前田喜与子
増田　隆昭
松崎　大輔
松下小枝子
三宅　保州
宮崎シマ子
宮本かりん
森松まつお
森松　芳香
矢倉　五月
山岡冨美子
山根　妙子
山本　半錢
山本　　進
横山　里子
吉村久仁雄
若本　安代

あけましておめでとうございます

川柳塔みちのく

主幹　福士　慕情・ほか同人一同

事務局　036-8275　弘前市城西 1-3-10　稲見則彦方

あけましておめでとうございます

翠　洋　会

浅井　公平　　高杉　千歩
安土　理恵　　髙橋　敬子
安福　和夫　　谷口　　義
阿部　紀子　　辻内げんえい
指宿千枝子　　津村志華子
岩本　浩二　　寺井　弘子
榎本日の出　　飛永ふりこ
榎本　舞夢　　西出　楓楽
大川　桃花　　能勢　良子
大久保眞澄　　原田すみ子
太田　　昭　　藤原　大子
奥田みつ子　　前川　善之
古今堂蕉子　　山本希久子
小谷　集一　　米田　恭昌
佐々木満作　　渡辺　富子

謹賀新年

川柳塔さかい

会長　村上玄也
副会長　矢倉五月

綾田　　清　　石田ひろ子
出海素頓馬　　井上　洋一
内田志津子　　宇都満知子
梅木　澄空　　榎本　舞夢
太田としお　　太田扶美代
奥　　時雄　　小野　雅美
柿花　和夫　　河内　月子
河内　天笑　　楠井　輝子
源田八千代　　齋藤さくら
澤井　敏治　　柴本ばっは
島田　誠一　　髙木世紀子
田中　廣子　　田中ゆみ子
谷川　　憲　　玉瀬　富夫
津田シルク　　遠山　唯敎
徳山みつこ　　内藤　憲彦
中野　健吾　　中林　佳子
原　　清晋　　日野　　愿
伏見　雅明　　古川　光雄
増井ヨシ枝　　升成　　好
宮本かりん　　向井　　清
山岡冨美子　　山根　妙子
山本　半錢　　山本　　進
米澤　俶子

明けましておめでとうございます

富柳会

川柳とんだばやし

秋田あかり　稲山常男
池　森子　井澤壽峰
石橋未知　久世高鷲
沢田和子　鈴木かこ
関　よしみ　田嶋伸雄
土田欣之　都筑文重
栃尾奏子　中井アキ
中薗　清　中村　恵
林　澄子　肥山一文
福元田鶴子　藤田武人
松本正治　森下よりこ
山野寿之　他一同

あけましておめでとうございます

竹原川柳会

会長　小島蘭幸
会計　岩本笑子
石原淑子
六田半徳
古田太虚
土井輝恵
若年幸子
小畑宣之
ほか会員一同

あけましておめでとうございます

きゃらぼく川柳会

会　員　一　同

事務局　〒683-0804 米子市米原5−1−3−304

竹　村　紀の治

TEL 0859−21−7656

明けましておめでとうございます

川柳ふうもん吟社

会長　両　川　無　限

会　員　一　同

事務局：〒689-0202 鳥取市美萩野2丁目171-3

中　村　金　祥

TEL 0857-59-1056

月例会：毎月第4日曜日　13:00～

会　場：砂場隆浩事務所（鳥取市片原1丁目107）

謹賀新年

川柳塔唐津

岩崎實
坂本朗
仁部四郎
山口明
高

明けましておめでとうございます

豊中もくせい川柳会

会員一同

あけましておめでとうございます

南大阪川柳会

会員一同

住まいの情報センター（地下鉄谷町線・堺筋線 天神橋６丁目駅③出口）
原則として第４月曜日・６時から

あけましておめでとうございます

ほたる川柳同好会

水野黒兎　小牧信男
高嶋勝宮田輝
田中螢柳藤原桂子
栗田久子寺井柳童
中山春代池田純子
多田契子荒木郁子
樋口順子貝塚正子
上田陽子永森美佐子
斎藤奈津子倉本一弥
中内孚彦藤井則彦

句会　第二火曜日　午後一時より
勉強会　第四火曜日　午後一時より
場所　豊中市蛍池公民館

明けましておめでとうございます

六甲川柳会「ろっこうみち」

会員一同

10年間続いた勉強会「メダカの学校」に替って句会「ろっこうみち」を立ち上げました。皆様のご参加をお待ちしています。

連絡先　〒658-0026　神戸市東灘区魚崎西町4-1-11
山﨑武彦　TEL.098-842-6235

あけましておめでとうございます

川柳塔なら

事務局　〒633-0054　奈良県桜井市阿部787（松本方）

安土理恵
安福和夫
宇賀史郎
飛永ふりこ
大久保眞澄
加門萌子
高畑おたか
髙橋敬子
仲西賛郎
中堀優
長谷川崇明
渡辺富子
江島谷勝弘　（会計監査）
中原比呂志　（顧問）

明けましておめでとうございます

川柳藤井寺

会　員　一　同

あけましておめでとうございます

京都塔の会

会　員　一　同

明けましておめでとうございます

八尾市民川柳会

会長　中薗　清　　会員一同

謹賀新年

和歌山県川柳協会

会　長　三宅　保州
副会長　川上　大輪
[お問い合せ先]　事務局長　古久保和子

〒640-8111 和歌山市新通7丁目17
TEL 073－423－8930

謹賀新年

和歌山三幸川柳会

主幹　三宅　保州

事務局　〒640-8111　和歌山市新通七丁目17　古久保和子
TEL 073－423－8930

例　会　毎月第四土曜日　12時30分
和歌山商工会議所　４Ｆ（バス停　和歌山市役所前）

謹賀新年

川柳茶ばしら

関	脇	山	金	板	早
本	田	本	子	山	川
かつ子	雅美	三樹夫	美千代	まみ子	遡行

謹賀新年

川柳塔まつえ吟社

主幹　石橋　芳山

同人一同

事務局　〒690-0001　松江市東朝日町206−7
TEL.090−2003−5846　石橋芳山方

あけましておめでとうございます

いずも川柳会

会長　竹治　ちかし
会員一同

事務局　〒693-0026　出雲市塩治原町3−1−5　竹治ちかし方
TEL 0853−22−4309

あけましておめでとうございます

川柳大阪

会長　山崎　珠生

会員一同

あけましておめでとうございます

岸和田川柳会

岩佐ダン吉　三宅保州
雪本珠子　松浦英夫
増田隆昭　松崎大輔
藤原昭　岸井ふさゑ
中岡香代　西田喜代志
石田ひろ子　井岡一子
次井義泰　高橋律雄
藤井康信　中里はこべ
宮野みつ江　新海信二
助川和美　出原誠夫
仲谷弘子　花篤洋二
小島笑司　桐島カズ子
飯田忠太　三宅白水
柿花和夫　鈴木益子
立藏信子　阪口たかお
中原宏之　西岡義博
池内恭子　木村正志
向井清

あけましておめでとうございます

川柳さんだ

会員一同

新年おめでとうございます

はびきの市民川柳会

会長　徳山みつこ　・　会員一同

明けましておめでとうございます

川柳塔鹿野みか月

会員一同

会長 森山盛桜

あけましておめでとうございます
本年もよろしくお願い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

同人一同

事務局 〒640-8482 和歌山市六十谷1188－14 川上大輪方
電話・FAX 073－462－7229

新年明けましておめでとうございます

城北川柳会

藤原千恵子	綱島榮子	永井縣祚	小林杁香	近藤正	江谷勝弘

賀　正

川柳塔社

主幹　小島蘭幸
理事長　新家完司
副主幹　川上大輪
副理事長　木本朱夏
常任理事　石田隆彦　居谷真理子
上田ひとみ　内田志津子
宇都満知子　江島谷勝弘
大久保眞澄　片山かずお
久保田千代　島田誠一
内藤憲彦　中川ひろ介
藤井宏造　松原寿子
藤村亜成　森松まつお
吉村久仁雄

川柳塔社常任理事会

編集後記

★おみくじにやがてとあってよろず吉　薫風

★通巻1100号記念特集号をお届けします。「川柳塔の讃歌」木津川節を存分に堪能して頂けましたでしょうか。一人語り劇場の口演を控えてご多忙中の先生にご無理を申しあげました。ありがとうございました。

★梅崎流青さん（「葦群」主宰）にご執筆頂きました。流青さんの文章は格調高く思わず読み手の背筋をしゃんとさせます。森中惠美子句集『ポケットのみずたまり』所収「雪の約束」は惠美子像を余すところなく活写。併せて読まれますように。

★『川柳雑誌』創刊号をインターネットで開いてみた。目次の中に募集句とあるのは現在の一路集であろうか。「仲人」の選者は井上剣花坊、「花輪」の選者を岸本水府。結社を超えての豪華な顔触れである。95周年記念事業企画の電子化は着々と進められ、居ながらにして路郎の息吹に触れることができる。基金募集に際しては同人・誌友その他川柳愛好家の方々に多くの浄財を賜りました。改めて御礼を申し上げます。

★3年前から金魚を飼っている。昨春卵が孵化。生き残った子は16匹。同じ日に生まれながら5㎝に育った子と僅か1㎝に満たぬ未熟児と。その個体差に驚いている。『ねこのきもち』『いぬのきもち』という本はあるが『金魚のきもち』はない。そもそも金魚の生態学の本が見当たらぬ。やっと見つけた『魚たちの愛すべき知的生活』（ジョナサン・バルコム著）が平成最後の読み初めとなりそう。

★平成も残すところ4カ月。「へいせい」というやさしい語感に似合わず大事件、大事故、未曾有の災害の多い時代だった。今年の干支の猪には「猪突猛進」という言葉がある。平穏な時代への猛進であることを祈りたい。　（朱夏）

○大坂育ちの両親の下、奈良で生まれ育った私はコテコテの関西弁を喋る関西人である。環境や教育の力は偉大で、中途半端な標準語も多少は使えるようになった。それにつけ、大阪弁に代表される関西弁は興味深いものに感じられる。

○「は行」の語は大らかで、それでいて強かだ。「おかあはん」「行かはる」「行かへん」「知りまへん」。

○端折り方も半端ない。「おじゅっさん（住職）」「おっしょさん（師匠）」「おまん（饅頭）」

○人は勿論、物にも「さん」を付ける。「お豆さん」「お芋さん」「お粥さん」。食べ物まで身内か友達のように呼びかける。知らない人にも飴を配る関西人気質の一端を見るような気がする。

○川柳の、読む人を巻き込んでしまう魅力に私は捉えられている。編集で多くの句に触れ、その思いを強くしている。　（眞澄）

平成30年川柳塔合祀祭

秋晴れの好天に恵まれた11月10日高野山奥の院大霊園「川柳塔合祀祭」に参列させていただきました。観光シーズンで観光客も多く紅葉の美しい時期でした。

平成30年3月に他界した塩満敏が川柳塔同人の本年物故者の方々と合祀法要していただきました。今後川柳塔合祀台帳に記載され、お彼岸お盆等には法要されお世話をおかけします。合祀されています先輩の方々と、どこかで句会でも開き、楽しくしていることでしょう。若い頃、敏は川柳に出逢い、とりこになり愛し、お仲間の方々と楽しい人生を送ったと思っています。長い間ありがとうございました。

合祀祭の準備をされた役員の方々、事務所の皆様、主幹の蘭幸様、理事長の完司様本当にご苦労様でした。

これからもよろしくお願いいたします。　（塩満　恭子）

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。

(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。

(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。

(4) 各欄への投句数および**投句締切期日の厳守**をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにお願いいたします。

本社１月句会

とき　1月7日(月)　13時開場・13時40分締切
ところ　アウィーナ大阪　4階　金剛の間
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441
おはなし「句碑の山」　小島蘭幸氏
席題「　　」　栃尾奏子選
兼題「和やか」　柿花和夫選
「ステップ」　初代正彦選
「仕　事」　古金堂蕉子選
「渡　る」　山本希久子選
「輝　く」　新家完司選
（各題2句以内）
会費　1000円　**投句料**　500円（切手可）

本社２月句会

7日(木)　午後1時から
兼題「スタイル」「ぼんやり」「痒　い」
「盛　り」「現　実」

作品募集

3月号発表（1月15日締切）
川柳塔（8句）　小島蘭幸選
水煙抄（8句）　西出楓楽選
愛染帖（2句）　新家完司選
檸檬抄「あれこれ」（2句）　川端一歩共選
山岡冨美子
インスピレーション・ナビ(2句)　大西泰世選
一路集（2句）「モットー」　藤村亜成選
「調べる」　柳田かおる選
初歩教室「守　る」（3句）　居谷真理子担当
初歩教室「守る」は4月号発表

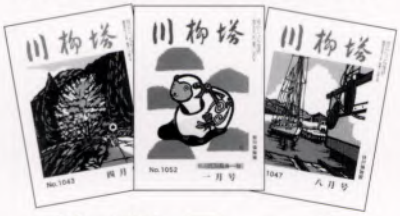
4月号
檸檬抄「ぴかぴか」
一路集「先　輩」「ごめん」
初歩教室「先　生」

川柳塔WEB句会のご案内

課　題「臨　む」　島田駱舟　斉尾くにこ　共選
締　切　1月20日　**発　表**　1月25日頃
投句料　無　料
インターネットで「川柳塔」を検索しWEB句会をクリックしてご投句ください。

定価　八百円（送料93円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇一九年(平成三十一年)一月一日発行
発行人　小島和幸
編集人　木本朱夏
印刷所　美研アート
発行所　川柳塔社
〒543-0052　大阪市天王寺区大道一―一四―一七　花野ビル201号室
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



美研アート
〒531-0061 大阪市北区長柄西1-1-10
TEL（06）4800−3018
FAX（06）4800−3028
E-mail：bikenart@ea.mbn.or.jp
※事務所移転につき住所・電話番号が変わりました。

川柳塔のホームページアドレス　https://senryutou.net

平成三十一年一月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻一一〇〇号　川柳塔　一月号
定価　八百円（送料　九十三円）

川柳募集

「ごま」にまつわる
あなたならではの
一句を募集します。

・兼題　「ごま」川柳塔社主幹 小島蘭幸　選
・応募要領　郵便ハガキに2句、郵便番号、住所、氏名、電話番号を明記してください。入選20句、準特選2句、特選1句に賞品。本紙4月号にて発表いたします。
・発表
・締切り　2019年1月31日(当日消印有効)
・投句先　〒543-0052　大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201号室　川柳塔社　ゴマ川柳係　宛

オニザキの
つきごま
手作りの味わいに
こだわり続けて
六十三年



株式会社 オニザキコーポレーションセールス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング
TEL 0120-30-5050

心を尽くし　思いを尽くし　知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団　湯川胃腸病院

消化器科　放射線科　脳神経外科
緩和ケア（ホスピス）
デイサービスセンター併設

大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2　TEL 06-6771-4861
http://www.yukawa.or.jp

雑誌 05703－1